

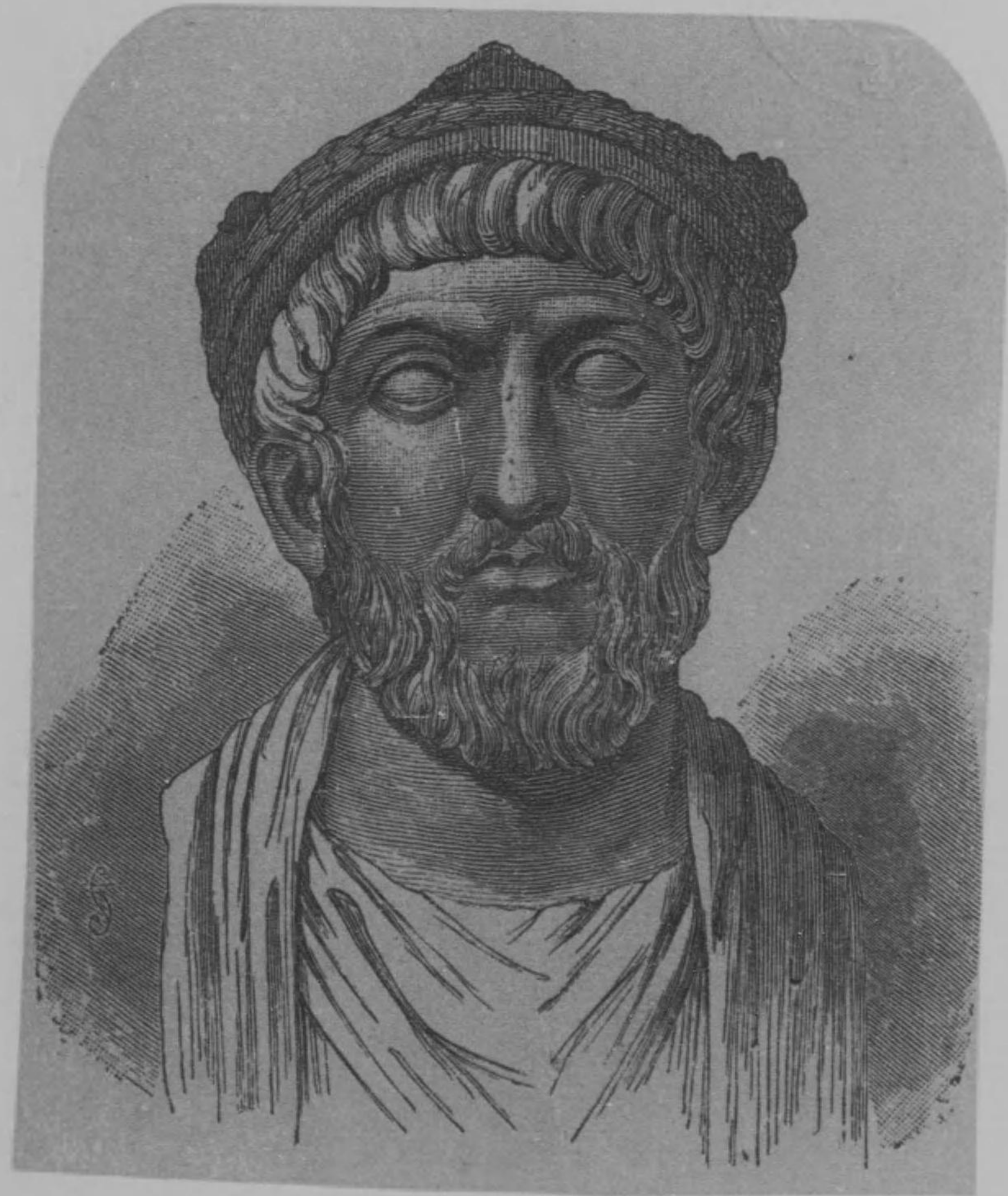
384
153

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18
50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



7.8.20



ンアリュジ帝教背
(像背の歳所ルザール)

384-153



エドワードギボン著

轟舟坂本健一譯

中興史

大正八年十一月

東京 隆文館梓

大正
9. 2. 10
内交

大羅馬の末造六帝の角逐帝國の分崩を致すや、コンスタンチン大帝の雄略能く天下を統一の舊に復し、掉尾の振興祖孫六十年の鴻業を見る。皇室の東遷新都の建營は既に帝國の稱たる羅馬を委棄したるも、依然たる舊疆域に前代の廢絶を興繼して新世の文物制度を盛る。中興を以て呼ぶは或は過ぎたりと爲さんも必ずしも當らずと爲さず。

然りと雖も復古は則維新なり、時勢は逆轉せず、時と人と勢とは復その舊に非ず。就中天下後昆の大帝の業に觀る重大の推移二あり。コンスタンチンノブルの建置は爾來一千六百年東西史變の樞軸を爲して以て今日に及べり。斯くの如きは寔に大帝と雖も期待せざる所、單に羅馬帝國の史中に局限さるべき事ならず。これ一なり。基

二
督教の公認に至りては、流傳教化今尙乾輿の文明地帯を包擧し、その偉大なる後果は利病禍福ともに新都建置のその比に非ず。亦恐らく大帝所信の上に出でたらん古今史上の壯觀とす。本史の首題たる羅馬帝國より觀ば舊帝京を捨て宗祖の國教を棄てしは適ま新進適時の善謀たりや將た趨衰奔亡の禍端と爲すべきやを知らざると雖も、陳舊の凋謝は生新の代興なり。コンスタンチン家の中興は基督教世界の新創として見る可く、羅馬帝國史の私す可きに非ず。

羅馬のチベル河畔に古きとボスフォルス峽邊に新しきとは暫く措くも、十字旗の成敗は天下有衆の信念利害の重要事案なり。その後果の大且久しきを想ひて當年興教の委曲を觀ば、誰か能く十六世紀前の帝國政教の繁争を冷眼看過し得む。若し夫れ國教復興の魁首が基督教最初の皇帝コンスタンチンの孫ジュリアンたりしは、單に史

上の往蹟としても無量の感慨莫き能はず。更にジュリアンが他の金枝玉葉の犬豚と異り一代の雄材を懷きて篤敬深信尙且復教の業に敗れ、勇資英略終に徒に異域の野に斃るるに至りては、メレジコフを待たずして自一大傳奇、以て希臘の神祇羅馬の國教の終焉を飾るに足れり。

大正八年十二月念

蠡舟生識

「羅馬中興史」一巻はギボンの翻譯の第二巻、直に既出「羅馬盛衰史」の後を承け、將に續出せんとする「東西羅馬史」の前を起す。彼此通讀されんことを請ふ。

譯稿は大正七年に成りしも事情の爲に再延して今世に出づ。

以外の凡例は「盛衰史」の巻端に云へるが如し、復贅せず。

本巻には「盛衰史」正誤略を挿入し置けり。衍誤過升此に盡きずと雖も、今悉く窮るに遑なく、唯繙讀の際見當りしまゝ。

凡
例

羅馬中興史目次

第一章 基督教の進歩、原始的教徒の感念、習風、數量、情勢

一七三

第一節 基督教捷利の原因、(一)基督教の猶太教桎梏の

排脱……………

基督教研究の必要 || 基督教の捷利の五因 || 一、猶太教徒の熱誠 || その増進 || その宗教 || 基督教徒の更に寛大なる熱誠 || 猶太教の桎梏 || ジエルサレム教會、ナザレ派 || エピオニ派 || 諾斯士派 || 基督教派の偶像禮儀技術式典の排斥

第二節 同、(二)靈魂不滅と未來世相の說法……………二〇

哲學者派の靈魂不滅說 || 希臘羅馬の國民的宗教 || 他の諸教と靈魂不滅 || ミルレンニウム || 世界終滅の前兆 || 地獄變相の威嚇 || 長怖より來る歸依

目次

一

第三節 同、(三)原始的教會の奇蹟……………三八

原始的教會の不可思議力||不可思議なる奇蹟の利用

第四節 同、(四)原始的教徒の眞摯の道德……………三三

原始的基督教徒の徳性||名聲の尊重||人道的教義||快樂と活動||

基督教徒の快樂奢侈の排斥||男女慾の限制||世事俗務の嫌忌

第五節 同、(五)基督教會の共和制統一……………四〇

教會組織の新事功||その原始的自由平等||地方的宗教會議||大宗

師權の發達||都城大卑涉||羅馬教會の野心||教俗の差別||教會の

奉納歳入||教會資財の分布||破門||その寛嚴と贖罪||宗門の權威

||五因由の再説||多神教派の弱點||異教徒の態度

第六節 基督教宣傳の史的見解……………五八

基督教宣傳の史的見解||東方の宣傳||アンチオクの教會||埃及の

教會||羅馬の教會||亞弗利加及西方諸州の宣傳||羅馬帝國境外の

宣傳||基督教徒と異教徒との總括的比較||卑賤なる最初の基督教

徒||名士の基督教嫌忌||基督教神異の蔑視

第二章 ネロ乃至コンスタンチンの羅馬政府對基督教徒

七四—一四六

第一節 基督教の容れられざる理由……………七四

帝國に於ける基督教の地位||本章の主旨たる教徒の迫害||基督教

徒迫害の前例たる猶太族||猶太族の動亂的精神||猶太教の平時に

於ける認容||祖先教を奉ぜざる猶太族と之に反抗する基督教徒との

差別||基督教徒は無神教の一結社||基督崇拜の不可解||鞏固なる

結黨盟社は國策の敵||秘密は嫌疑の本||教徒の辨解と有司の推斷

との差異||羅馬諸帝の對基督教徒の態度

第二節 未重大視されざりし基督教……………八六

當初基督教は猶太教の一派として閑却さる||ネロの世の羅馬の回

祿||犯罪の轉嫁による基督教徒の殺戮||この誅殺に關するタシタ

ス記事の辨明||ジエルサレムの燒亡と猶太基督教徒の迫害||聖ユ

ドの二孫 || 執政クレメンスの誅殺 || 少プリニの基督教に關する無智 || トラジアン以後の對基督教徒の成法の精神 || 民衆の囂訟と教徒の誅殺

第三節 國家の寛容と教徒の狂熱 一〇一

羅馬有司の寛容 || 誤傳されし上世殉道の實情 || カルセーヂの卑涉キプリアン || その放謫 || その殉道 || 殉道者の態度と教徒の崇敬 || 原始的基督教徒の狂熱 || 教徒寛假の三法式

第四節 禁否の交出 一一三

基督教に對する寛嚴 || 十迫害 || 想像に出でしチベリウス、アントニウスの勅旨 || コムモツム、セゲルス時代の基督教徒 || 無事三十八年 || マキシミンと基督教 || デキウスの峻厲 || プレリアン、ガッリエヌスと基督教 || サモサタのバウル || その失敗

第五節 チオクレチアン以後の禁教と殉教の事實 一二三

ジオクレチアン時代の教會の昌安 || 異教徒の奮起 || マキシミアン、

ガレリウスの多少の迫害 || ガレリウスの禁教會議 || ニコメデア教會の廢毀 || 最初の禁教令 || ニコメデアの失火 || 禁令施行の用意 || 教會の破却 || 禁令の連發 || コンスタンチウス、コンスタンチン父子と禁教令の實施 || マキシミン、セゲルス治下の伊太利、亞非利加の禁教 || マクセンチウスの教徒寛容 || ガレリウス、マキシミン治下の東方イルリアの禁教 || ガレリウスの恩赦令 || 教徒の大赦 || 迫害の復起 || 迫害記事の擇撰とその史材の曖昧 || 殉道者の狀況 || 殉道者數の推定 || 基督教の内憂は外患よりも大なり

第三章 コンスタンチノブルの建置 軍政、宮廷、財政 一四七

第一節 コンスタンチノブルの建置 一四七

新都建設の計畫 || ビザンチウムの地位 || コンスタンチノブルとボスフォルス || 帝都の海港 || プロボンチス || ヘルレスポンド || コンスタンチノブルの形勝 || 帝都の建置 || 都城の地域 || 帝都の經營 || 帝都

の建築 || 都民 || 都民の特権 || 奠都式

第二節 政治組織と文官

羅馬帝國の政治組織 || 神教帝國 || 三卿の名爵 || 執政 || 繙紳 || 禁軍
統領 || 羅馬コンスタンチノブルの兩府尹(統領) || 前執政 || 代統領 ||
州守 || 法家の世業

第三節 軍政

武官 || 軍隊 || 軍の弱小 || 募兵の困難 || 狄兵の増加

第四節 宮廷

七大臣 || (一)侍從長 || (二)官務總長 || (三)御史 || (四)神聖贈賞伯 || (五)皇領
伯 || (六、七)近衛伯 || 欽使間諜 || 拷掠

第五節 財政

賦税 || 徵租課税の法 || 地租と人頭税との混同 || 人頭税と貢租額 ||
商工業税 || 冕冠金 || 結論

第四章 コンスタンチン一家、ゴス波斯役
大帝の殂落と帝國の分裂統一 二〇八—二五五

第一節 コンスタンチンの性情と一家

コンスタンチンの性情 || その徳性 || その一家 || クリスプスの徳 ||
コンスタンチンの猜忌 || クリスプスの非命 || 宮廷の慘禍と史傳の
疑案 || 三皇子と兩皇姪 || その教育

第二節 ゴス役とコンスタンチンの殂落

サルマチア族の風俗 || サルマチア族と隣狄 || ゴス戦役 || ケルソネ
ススの蹶起 || サルマチア族の潰裂 || コンスタンチン帝の殂落 || 兩
皇姪排除の隠謀 || 骨肉の殘害 || 三皇子の領土分割

第三節 波斯役と西方の叛亂

波斯王サボル || メンボタミア、アルメニアの狀勢 || コンスタンチウ
スの波斯役 || シンガラの戦 || ニシピスの攻圍 || コンスタンチン二
世の戦死 || マグネンチウスの叛 || エトラニオの叛

第四節 コンスタンチウスの帝國統一……………二四四

コンスタンチウス、マグネンチウスの乖反 || エトラヌオの失脚 || コンスタンチウスの西征 || ムルサの決戦 || 伊太利の平定 || マグネンチウスの敗死

第五章

コンスタンチウスと
ガルス、ジュリアン兄弟

二五六—三〇五

第一節 ガルスの生涯……………二五六

奄豎の治世 || 兩皇姪ガルス、ジュリアンの教育 || ガルス、亞皇と爲る || ガルスの不謹慎 || 皇帝と亞皇との決裂 || ガルスの無策 || ガルスの凌辱と誅死

第二節 亞皇ジュリアン……………二六五

ジュリアンの避免 || ジュリアン雅典に請せらる || 皇后ユセピア、ジュリアンを救ふ || ジュリアン、亞皇 || ジュリアンのゴール赴任 || シルブヌスの死

第三節 コンスタンチウスの波斯再役……………二七二

コンスタンチウスの羅馬行幸 || 方尖柱碑の寄與 || イワヂ、サルマチ、ア役 || 羅馬波斯の交渉 || サポルのメソポタミア侵畧 || アミダの攻圍 || シンガラの攻圍 || 羅馬の防東

第四節 ゴールに於けるジュリアン……………二八七

日耳曼族のゴール侵入 || ジュリアンの性行の任務 || ジュリアンのゴール役 || ストラサブルグの戦 || ジュリアンのフランク征討 || ジュリアンの日耳曼征畧 || ゴール城市の復興 || ジュリアンの文治 || ジュリアンの巴里本營

第六章 コンスタンチン改宗の後果
基督教特力教會の確立組織

三〇六—三五〇

第一節 コンスタンチン改宗の過程……………三〇六

コンスタンチン改宗の時日 || コンスタンチンの異教的迷信 || 帝のゴールの基督教の保護 || ミラン宣言 || 帝の基督教道德の採用 || 基

基督教の受動的従順 || 君主神權説 || 基督教の解禁

第二節 コンスタンチンの改宗 三二七

基督教徒の忠君 || 神異の豫期 || ラバルム(十字旗) || コンスタンチンの
の靈夢 || 空中の十字架 || プーシルの第四牧歌 || コンスタンチンの
敬虔と特權 || 洗禮の荏苒

第三節 國教と加特力教會制 三三三

使徒に等しき基督教皇帝 || 國教の變化 || 政教兩權の差別 || 加特力
教會 || 卑劣の撰擧 || 僧侶の階級 || 教會の資財 || 繙流の法權 || 道德
的監督 || 演述説教 || 立法會議

第七章

教界の異端分派、コンスタンチン朝の教會國家 三五二—四三七

の紛擾、異教の寛容

第一節 基督教界の異端と三位論 三五二

コンスタンチンの異教禁止 || 亞非利加教會の分裂 || ドナツス派の

分離 || 三位説の爭議 || プラトの三重組織とロゴス || アレキサンド
リアのプラト學派 || 使徒聖約翰の天啓 || エピオン派 || ドセテス派
|| 不可思議なる三位 || プラト學派と基督教徒との差別 (一) 教徒の熱
心 || 同 (二) 教會の權威 || アリウスの異端 || 三位神格の三組織 (一) ア
リウス派の解釋 (二) 三神教派の解釋

第二節 ニケア會議とアリウス派の消長 三七〇

ニケア會議 || ホモオウシオン || アリウス派の信條 || ホモイオウシ
オン || 西(羅)教會の信條 || リミニ宗教會議 || 帝室と教争 || コンス
タンチンの傍觀 || 帝の熱誠 || 帝のアリウス派排斥 || 帝のアリウス
派寛容 || コンスタンチンの統一とアリウス派 || セレウキア、リミニ
の兩會議

第三節 アサナシウス 三八七

アサナシウスの性格 || アサナシウスの迫害 || アサナシウスの第一
流謫 || その第二流謫 || アサナシウスの復位 || アサナシウスと皇帝

マクネンチウスとの抗争 || アムレス、ミランの會議とアサナシウス
 || 西方正教卑涉の流謫(リペリウスとオシウス) || アサナシウスに對
 する謀畧 || アサナシウスの態度 || アサナシウスの隱遁

第四節 アサナシウス失脚後の基督教界の動搖…………… 四一〇

アリウス派の卑涉 || 羅馬の教主 || コンスタンチノブルの擾亂 || ア
 リウス派の暴戾 || サークムセリオンの叛亂とその徒の猛獠 || 宗教
 的自殺 || 内部分裂 || コンスタンチンの對宗教政策 || その諸子の對
 宗教政策 || 基督教の内鬨と異教

第八章

ジュリアンの即位、コンスタンチウスの殂落、新帝の内政

第一節 ジュリアンの自立…………… 四二八

ジュリアンに對するコンスタンチウスの嫉疾畏怖 || ゴール軍に下す
 東征の命令 || 軍衆の憤懣 || ジュリアン皇帝の推戴 || 推戴に對する
 ジュリアンの心情 || 新皇帝の皇帝に對する要求的商議 || ジュリアンの

武備と征狄 || 商議の決裂

第二節 ジュリアンの帝國獲得…………… 四四二

ジュリアンの東征の企畫 || 萊因河畔よりイルリアへの進軍 || ジュリア
 ンの大義名分 || 兩帝の對抗の勢 || コンスタンチウスの殂落と内亂
 の中止

第三節 ジュリアンの内政と性情…………… 四五三

新皇帝の内政の理想と精勵 || 宮廷の革新 || 審判廷 || 帝の仁慈寛容
 || 自由共和の遺意、東洋專制の排斥 || 辯客たる皇帝 || ジュリアンの人
 格的價值

第九章

ジュリアンの一般赦免、異教復興の擧、基督教の迫害…………… 四七〇—五二三

第一節 ジュリアンの背基督教的來由…………… 四七〇

背教者ジュリアン || 帝の少時の教育と背教的徑路 || 古宗教の遺響
 || 譬諭の解釋 || ジュリアンの神學組織 || 哲學者の狂妄 || 帝の哲學

的迷信と不思議教 || 帝の宗教的詐伴 || 帝の基督教排撃の述作

第二節 帝の宗教政策 四八五

宗教の自由平等令 || 神祇伯たる帝の多神教復興 || 國教復興の計畫
|| 帝と諸哲學者 || 帝の改宗の獎勵と新改宗者

第三節 ジエルサレム神廟復興の計畫 四九五

帝と猶太族 || ジエルサレム || ジエルサレム巡拜者と不思議の遺物 || ジエルサレム神廟再建の企畫 || 神廟復興の廢絶に就きて神異の傳説

第四節 ジュリアン治下の基督教徒 五〇三

信教自由の下に存する不公平 || 基督教の學堂教育の禁止 || 基督教徒の社會的壓迫 || 異教神廟復興の爲に基督教徒の處刑 || ダフネの神廟と聖林 || パピラスの遺骸 || ダフネ神廟の回祿 || アンチオクの慘禍 || 埃及に皇威を振ふカッパドキアのジョージ || 死後の殉道者聖ジョージ || エデッサの動亂 || アサナシウスの復職 || アサナシウスの放逐 || 基督教徒の禍は不忌憚の應報

第十章

ジュリアンのアンチオク滯陣、波斯征討、チグリヌス河退軍と殞落、ジョリアンの繼承、屈辱的講和 五三四—五八三

第一節 ジュリアンの東征 五二四

ジュリアンの作「諸亞皇」 || ジュリアンの波斯親征 || アンチオクの民情と帝の反感 || 饑饉と帝の處置 || 都民の不平に對する「母の敵」 || 詭辯學者リバナニウス

第二節 征軍の成功 五三四

皇帝の東進 || 帝の方畧 || アルメニアの反覆 || 皇師の部署と進畧 || 波斯領に於ける活動 || 沿道の征服 || アッシリア || アッシリアの徇畧、ベリサポルの攻圍 || マオガマルチの攻圍 || ジュリアンの個人的風丰行動 || クテシフォン地方の地理 || クテシフォン城下の捷 || ジュリアンの境遇

第三節 困却退軍、ジュリアンの殞落 五五八



死戦のンアリュジ

目次

一六

帝の決志、船舶の燒却、糧餉の缺乏、皇師の退却、且戦ひ且退く、
帝の驚夢、帝の負傷、帝の遺訓、帝の殞落

第四節 ジョギアンの屈辱的講和……………五六九

副主推戴の困難、ジョギアンの推戴、波斯軍の追撃、羅馬軍の困窮、
ジョギアンの屈辱的講和、ジョギアンの私心、約後尙困難なる退軍、
訂約に對する全國の不平、訂約の實行とニシビス城民の悲憤、
帝國衰亡の一步、ジュリアンの回顧

羅馬中興史

文學士 坂本健一 譯

第一章 基督教の進歩、原始的教徒

の感念習風數量情勢

第一節 基督教捷利の原因〔一〕基督教の猶太教楷柁の排脱

基督教研究の必要

基督教の進歩確立に就きて公明合理の研究は羅馬帝國史の甚要の段落と謂つ可し。羅馬帝國なる大團體が外より損じ内より壞れ行く時に當り、純粹謙抑の宗教徐々に人心に浸潤し、黙暗の裡に進長し、反抗に遭遇して新氣力を加へ、終に捷利の十字旗を帝都の遺墟に翻すに到れり。否基督教

第一節 基督教捷利の原因(一)基督教の猶太教楷柁の排脱

の勢力は單に羅馬帝國の時代と地域とに局限されず、前後一千三四百年の革命を経、今尙此宗教は文武技學人間の優秀たる歐洲諸民に歸依宣揚され、歐人の努力赤誠により亞細亞、アフリカの際涯に流傳弘通し、其移殖によりて古人の夢にも得知らざりし加奈陀より智利に至る間に確立されたり。此研究の必要にして興趣あるは實に言説を須ひずと雖も、唯特に二個の難事あり。宗教史材の缺如は初期教會の實相を掩ふ雲霧を排するに困難ならしむ。史家至公の原理は福音經典の天啓なき教師と信者との短所を指摘せざるを得ず、從つて不用意の看官をして彼輩の失短は信仰の上に陰翳を生ぜしめんを恐る。是なり。然りと雖、善く意を用ひて天啓は誰によりて與へられし歟といふのみならず、又誰にか授けられしを熟慮せば、幸に眞摯なる基督教徒の譏謗非難と異教徒の偽瞞的捷利とを免れ得む。世の宗教家は基督教は昊天より下れり、天真に成れりとして自安んじて可ならむも、悲しむ可きは歴史家の重任なり。史家は宗教が久しく地上に降り人間に存して必然に避け得ざりし失短敗壞の相業を説かざるを得ず。

基督教の捷利の五因

先づ乾輿の諸教中如何にして基督教は斯く顯著なる捷利を得しやを問はざる可らず。此一問には明白にして満足す可き一應答あり。教義の破邪折服と其大宗師の威力ある神啓と是なり。たゞ夫真理の世俗に容れらるゝこと稀に、天神の智も時に同塵人情により和光人事に托してその妙用を遂ぐる方便と爲せば、伏して恭しく基督教會の迅速の進歩を致し、第一諦を問はず、第二諦の何たる歟を究めんとはするなり。茲に密に之を推すに、大略五條の因ありと想はる。一には、基督教徒の不撓の赤誠は實に猶太教徒より傳承せしも、彼が偶像信者のモゼスの訓戒に歸依せんとするを歡び迎へざりし偏被固陋の精神を排脱し得しこと。二には、各般の情勢の下に未來世相を説き加へて真理の莊重と靈威とを増せしこと。三には、原始的教會に不可思議力を托歸せしこと。四には、基督教徒の眞摯峻厲の道義。五には、基督教義による共和制の統一訓練、漸く羅馬帝國の中畿に獨立進歩の一邦國を建創せしことなり。

一、猶太教徒の熱誠

一。上世教界の調和は最差別ある、否對敵の國民と雖も相互に其迷信を

信仰し、少くとも互に相尊重する温和の風尚ありしことは既に説けり。ただ其時に當りて人間普通の交睦に背きし者唯一あり。猶太族是なり。アシリア波斯諸王の治下に悲惨なる奴僕の境遇に墜つること久しかりし猶太族は、亞歴山大王の後繼者の治世に稍頭角を露はし、始は東方に後には西方にも増殖して世人の視聽を惹くに至りしが、其特殊の教義非社交的習俗を墨守する頑強は、殆ど特異の民族と視られ、殘餘の人類の嫌惡を避け得ざりき。例之ばアンチオクスの暴戻も、ヘロットの權謀も、さては四隣民族の往例も、猶太族をしてモセスの訓憲に希臘の神語を附和融會せしむる能はず。世界的統合を宗旨と爲せる羅馬人はその惡める迷信をも擁護す。温雅なるオーガスタス皇帝はジルサレムの神廟に犠牲を供へて幸福を禱するの令旨ありしも、アブラハムの後裔は最卑賤なる者と雖も若し羅馬カピトルのジビトル神前に斯る祈願を爲したらんには自禁へ得ずまた同胞の嘲怒を免れ得ざらむ。羅馬の一領州として必然に流入する異教の影響を驚異忌憚せし此臣民の褊狹固陋は捷主の訓解も奈何ともする能はず。ジェル

その増進

サレムの神廟に自己の像を安置せんとせしカリグラ帝の狂舉は冒瀆を畏怖する死に若かざる此民の排斥によりて破れたり。斯民族のモセス遺法の固守は直に是他教異宗の排斥と爲り、誠摯狂熱の流は、狭谷窄隘に壅まりて益其力を加へ、其暴を増して急湍激瀬と化せり。上世に於て既に他の嫌忌と嘲笑とを買ひし固陋我執は天啓一たび撰民の不可思議なる由來を示すに及びて益太し。猶太族中に名聲ある第二廟中の民はモセス教の狂熱其宗祖の頑陋に比して更に過ぎたるあり。紫電シナイ山に閃きて神戒下りし日、海潮星宿イスラエル族を救ひし日、一時の神賞冥罰が斯民の敬虔不信の應報たりし日、この民族は常に神王の尊威を冒して叛き、諸國民の偶像を耶和華の神龕に居、亞刺比亞の帳幕、佛尼豈亞の市邑に行はれし各種の狂儀妄典をさへ行ひて恠しまざりしに、天の擁護安兒の民族を棄て去りし今に於て眞摯精進の度は益進めり。モセス、ヨシヤ時代の民は最驚く可き怪異を觀て意に介せざりしに、各般の不遇を蒙りて後世の猶太族は偶像教の神異を排除し、人間普遍の主旨に背

馳して、自覺觸する事相よりも寧ろ幽久なる宗祖の傳説口碑を重んじた

その宗教

猶太教は洵に自守に宜しきも、決して折服に利あらず、改宗者の數は決して背教者の數より多からず。神約は元來一族に屬し、特殊なる割禮の儀式も亦一族に歸し、アブラハムの子孫後裔の眞砂の如く蕃殖するに及び、口づから宗法教儀を授けし天神は、自イスラエル族の固有の神と宣り、また實にその民族神なりき、最眞摯にその寵民を人類の他族より區別したりき。迦南の地の征服は幾多の奇蹟と幾多の慘禍とを有して爲に捷者たる猶太族と凡ての隣族との間に解き難き怨恨敵心を生ぜり。猶太族は殆んど偶像教の民族を根滅す可き神命を奉じ、此神意の實行は殆んど人情の弱點を以て和められず。他國民とは結婚を通ぜず同盟を結ばず、或は三世或は七世、甚しきは十世相傳の自己の教會へ他の民族の入るを禁じ、モゼスの信仰を異教徒に説くは教法の義務ならずと爲し、否任意的にも爲す可きこととせず、アブラハムの後裔のみ、自獨教法の繼承者たりと信じ、天下の

異民族に之を弘通せばその相傳繼承の價値を減ずと思へり。されば他の民族と相識る益多くして智識の範圍漸く弘く固陋の度毫も減ぜず、モゼスの教法は單一の民族特殊の家國に特定されし形勢を剛致したるが、男兒は毎年三び必ず上帝耶和華の御前に出づ可き法令を嚴守せんには神約の地の狹境の以外に出でざらんこと最難し。幸ひに此困難はジェルサレム廟の破壊を以て免がれしも、之とともに猶太教の最重要なる部分も亦破壊されき。空虚なる靈域の不可思議なる風聞を久しく怪しみ來りし異教徒は、此時始めて神殿なく祭壇なく祝僧なく犠牲なき此信仰の何をか禮拜の目的とし何をか信奉の儀則と爲し、やを發見するに苦しみき。たゞ猶太族は此悲境に沈みて、愈自己の崇高特異の特典を固執し、他族の社會に融合せずして却りて之を嫌忌し、苟くも其力實行に耐ゆる限りの教法の若干部を墨守して遷らず、齋日食物種々なる祭式等明らかに他族の習風に背反せしにぞ、悉く他の嫌惡の因と爲り、苦痛にして危険なる割禮は教會の扉を叩かんとする改宗者を悛拒するに足りし而已。

斯る情勢の下に、モゼス教法の力を武器としながら、その桔槔を擺脫して出顯せしものを基督教と爲す。宗教の眞實天神の唯一に就きての獨得の熱誠は新舊法相等しけれど、至高天神の賦稟意圖に關して、今新に人間に默示する所は、悉く此新宗教崇奉の信心を増進するに適せり。モゼス及諸豫言者の神權は基督教の根柢として認許され、否確立されたり。世界の創造以來不斷の豫言は救世主豫言者として殉道者として神子としてよりも王者として捷者としての救世主の降誕を揚言し、久しく其出顯を期待したりき。かくて其償罪の犠牲のために、神廟の不完全なる諸犠牲は光を失ひ、形骸象文のみなりし式法に代ふるに、民族と地方とを問はず到處に適應する純正精神的信仰を以てし、流血の入教式は洗禮の儀を以て繼がれ、アラハムの後裔にのみ限られし神眷の約は奴隸にも釋奴にも希臘人にも、外狄にも、猶太族にも異教者にも一般に光被せり。改宗者は地より天に上り、崇敬の念を高め幸福を保つ等の特典は基督教會にもなほ存するとともに、單に眷寵としてならずまた義務として光榮ある特待は一切の人間に許可

され親姻友朋に自受けし無上の福音を宣傳すること、若し之を拒む者は是仁愛萬能の神意に背く罪深き業として嚴峻なる冥罰を受く可きを警告す可きことは新歸依者の最神聖なる義務と爲せり。

然れども基督教會の猶太教會の桔槔を離脱し得しは一朝一夕の易事に非ず。猶太の改宗者も古來の神宣豫言によりて耶蘇を救世主と認めしものから、神徳教法の豫言的教師として之を尊崇すれど、なほ宗祖の舊典古儀を頑守して日に信徒の數に加はり來る異教徒に之を遵奉せしめんと欲す。乃陽にモゼス教法の神起因と大宗師の完全不易に歸論して論ずらく、若し恒久不易の天神にして特にその撰民に授けし神聖の儀禮を停廢せん、神意ならば其默示は昔初めて之を弘布せし時と同じく尊嚴明白ならざる可からず、モゼス教法の永恒を確し幾宣明の代としては信向禮拜の更に完全なる方式を人間に傳ふる救世主の出世までの暫定のものならざる可からず、救世主はもとより之と地上に相語る弟子等はモゼス教法の細部を採らずして直に此等の嫌惡す可き儀禮の廢停を世界に公布し、基督教を

第一節 基督教捷利の原因、(一)基督教の猶太教桔槔の排脫

ジェルサ
レム教會
ナザレ派

して幾星霜の間空しく猶太教諸派の間に困頓せしむると勿る可しと。蓋し斯る議論は將に滅びなんとするモゼス教法を辯護せんためなれど、わが學徒の努力は充分に舊約の文辭と使徒の行跡とを説明せり。乃徐々に福音書の組織を披きて、細心に猶太信徒の偏傾に對する宣告を掲げん而已。ジェルサレム教會の歴史は斯る論想の必要と猶太教が其教徒の中心に生ぜし深き感想との明白なる證據を提供す。ジェルサレム教會の當初の十五年、申涉は悉く割禮を受けし猶太人にして、其司配せる教會はモゼスの法と基督の教とを合一せるものなり。蓋し基督の死後四十日に起りて其使徒の直督の下に幾年を経し教會が正教の旗幟を傳承す可きは論なく、遠地の教會は尊崇す可き師父の權能に訴へて施物濟財の寄與により困厄を賑恤されしこと屢なりき。然れどもアンチオク、アレキサンドリア、エフェソス、コリンス、羅馬等帝國の諸大都に幾多の富有なる結社起るに及びて、ジェルサレムが天下基督教界に卓越せし尊崇の漸く減退するは勢の自然なり。基督教會の創設者たりし猶太の改宗者、則後に所謂ナザレ派は幾ばくもな

くして諸多神教派より基督の旗下に参加する群衆のために、または當初は屈從せしモゼス法教の耐え難き舊儀を自派の使徒の下に擺脫せし異教派の爲に、壓倒さるゝに至れり。ナザレ派は神廟、市城、猶太公教の衰滅を感ずる頗る痛切にして、其信仰は兎に角其形迹に於ては、異教徒が天神の輕侮と爲し、基督教徒が天神の震怒と爲す不幸に沈淪せる猶太民族と密邇の關係を有し、ジェルサレムの廢墟よりヨルダン河外の小邑ベラに退きし古教會は約六十年間落莫たる境遇に在りしも、なを屢神聖市府を往弔し心竊に天然にも教界にも愛す可く尊ぶ可き舊都に還るの日到らんことを待ちし甲斐なく、ハドリアン皇帝の世、猶太人の窮餘の狂舉は此徒の否運を完うせり。羅馬人は此民族の叛服常なきを怒りて捷者の權利を振ふに非常手段を執れり。皇帝はシオン山上に新市を建置しエリアカピトリナと名づけ、植民市邑と定め、此聖域に近よらんとする猶太人には重科を課し、羅馬軍を駐屯して嚴令を施行せしめしかば、ナザレ派の共犯同罪を通るゝ道は唯一ある而已。乃信仰の力は俗權の援助を得たり。已むを得ずして異教

徒出身恐く伊太利若しくば羅旬州の出身たりけむマルクスを擧て卑涉と爲し、に此時始めて百年來尙襲踏せしモゼス法式を廢し、舊禮古式を犠牲に供して漸く自由に皇帝植民地に入ること許され、加特力教會と結合し得たり。

派 エビオニ

ジエルサレム教會の名稱名譽シオン山に復するや、羅旬卑涉に伴はざる異端分離の罪はナザレ派の餘黨に歸せり。餘黨はなほペラの舊地を棄てずしてダマスクス附近の村落に散居し叙里亞のベレア則今のアレppoに一教會を組織せしが、ナザレ派の稱は斯基督教猶太人に過ぎたりとて、理會も地位もともに貧窮なるより卑しんでエビオニ派と稱せられ、ジエルサレム教會復地の後僅に數年にして、耶蘇を救世主と認むるもなほモゼスの遺法を奉ずる者は救はる可きや否やの疑義起れり。温和なる殉道者ジエチンは、斯る不完全なる基督教徒もなほ濟度救助す可きを主張せしも、その教會の感情を宣明するに際しては、猶太的信徒を救ひの外に排斥するのみならず、友誼歡待等の社交をも絶つ可しと爲す者基督教徒中に甚だ多きを明言せ

り。否温和派よりも猛烈論の行はる可きは自然の勢とて、モゼスの徒弟と基督の教徒との間には永久に分離決裂の障壁を生じ、一教よりは背教徒他教よりは異教徒として排斥さるゝ不幸なるエビオニ派は、孰か一に自己の立場を決定せざるを得ず、四世紀の頃まではなほ幽に其派の形迹を存したるも、終に基督教會に走るか、猶太教會に歸して史上より消滅し去れり。

正教會がモゼス教法に對して尊敬と侮蔑の中間程を持せる間、異教徒は誤謬と過度の兩端に迷ひぬ。猶太教の眞理を確認してはエビオニ派はその廢絶せざるを斷じ、その不完全を想像しては、諸斯士派はその天神の意に出でざりしを論じ、適當に神意を解し得ざる吾人の不能力より生ずる懷疑心にはモゼス及使徒の權威に對する異議ありて、諸斯士派の虛學は此異議を固執し、迦南の征服民族の滅亡を如何に人道正義と調和すべきやに惑ひ、終に唯犠牲儀典によりてのみ成立し、酬罰ともに一時的なる宗教は情を制し、徳を養ふ所以に非ずと斷じ、モゼス派の天地創造人間墮落の譚を嚙り、イスエラルの神には宇宙の神父たる賢徳全能の影をだも見ずといひ、猶太教は

異教徒の奉ぜる偶像教に稍優りしものに過ぎず、人間諸罪惡を救済し眞實完全の新教法を示顯せんため現世に出顯せしは天神の最初の最光輝ある現身基督なりと主張せり。

諾斯士派

基督示寂後約一百年トラジアン、さてはハドリアン帝の世に至るまで教會の處女的純正は毫も異端分離の爲に犯濫されざりき。更に適法の辭句を用ふれば、當時救世主の弟徒は信仰にも實行にも後世の教徒よりは自由なる態度に在りきと謂ひつ可し。さるに教會の意義漸く狭く、教社の靈權漸く嚴に最尊敬す可き教徒は各一家の私見を立て誤れる旨義を逐ひて爲に教會の一致を破ぶる離畔の旗を公然として掲揚するに至る。諾斯士派は基督教界の最進歩し最富裕なる者、智識の優秀を表明する其派名は自稱して高く標榜せしか、他の猜みて諷稱せしところ、その派中には異教民族を含有し、その主要なる派祖は叙利亞若くは埃及の出、その基督の信仰中には物質の永遠不滅、兩元の相對存在不可見世の不可思議、教界等、東方の哲學さてはゾロアストル教義より借引混同せる所少からず。

その靈界に出づるや混沌たる想像の指導に任せ岐路傍徑に紛出分崩し、パシリデス、ブレンチヌス、マルキオン諸派、

「辭」出で、「辭」より「理解」起り、「理解」より「智」と「力」と起り、「智」と「力」とより「秀智」「王者」及「天使」生れて天を創造し、夫より三百六十五員の天神生れて各自一天の主たり、アブラクサス其主たり、上述の「心」則基督是なりと、教祖パシリデスの名によりて稱す。

シリデス、ブレンチヌス、マルキオン諸派、更に下りては麻尼派に至るまで五十餘派と爲り、各涉卑教會教師殉道者を誇稱し、基督教會の用うる四福音書に代へて、各獨特の基督及使徒の言動を録せる聖典を有す。かくて諾斯士教派の成功は神速に廣大に、亞細亞埃及を掩有し羅馬に入り時にまた西歐にさへ侵入す、諸派概ね第二世紀に起り第三世紀に昌へ第四五世紀に衰微せり。その宣教弘通は常に平和を攪擾し、太しきは叛亂の名を負ひしことあり、れど基督教の進歩を阻害せずして寧ろ促進せし功あり。モゼスの教法を忌むこと甚しき異教の改宗者は争つて基督諸流の門に走り、基督諸流は此等の改宗者は何等舊來固執の信仰なきを歡び迎へ、其信仰を築き増し教會は其最敵を征服し得たり。

モゼス教法の神聖と實施とに就きては、基督教の正派、エビオニ、諾斯士派各異見を持つると雖も、上世世界の民族中に獨り猶太人の特立を識別せしめし偶像教の排斥に熱誠を傾注せるは、三派相同じ。多神教の組織は人間誤謬の作す所と思惟せる哲學者の一派は、嘲笑か從順か孰にしても不可見力否其所謂想像力の念慮に自任するとは悟らで、信仰の假面を借りて多神教輕侮の微笑を粧へり。然れども原始的基督教徒は之に比して確立せる多神教を更に恐畏す可きものを觀察し居たりき。教會派も他派も均しく以爲らく、惡魔は偶像教の創主、恩主、宗旨なり、天使の地位より逐はれて地獄の極底に沈みし魔神は罪深き人間の肉體を苦しめ心靈を困しむるため地上に徘徊するを得、人間に自存せる信仰心を發見し濫用し巧に創世主より人類の崇尊心を收攬して、自至上天神の地位と名譽とを僭奪暴冒して虛榮復仇の情を逞らし、罪惡不幸の渦中に人類を引入ると。また曰く、舌少くも想へらく、諸惡魔は各多神教中の最著れし賦性を分稟し、甲魔はジビートルと爲り、乙魔はエスキュラピウスと爲り、丙魔はエヌスと爲り、丁魔は

アポロと顯はれ、久しき經驗と飛翔の神通とを以て各分擔の所務を嚴正精妙に遂行し、神廟に會し祭典犠牲を行ひ傳説を作り詭言を發し、屢不可思議の奇蹟を示せしかば、惡魔の居中によりて諸般理外の顯象を解し得し基督教徒は異教神話の最不可思議なる傳説をも認容せんとせり。然れども基督教徒の信仰は異怖を伴ふ。苟くも國民的禮拜に尊敬を拂ふは是直に惡魔に歸依し天神の威嚴に呻く行爲なりと爲せり。

されば此説に據れば、偶像教の行禮に汚されず自清淨を保つ可きは基督教徒第一の義務なれど、洵に一難事なり。國民的宗教は單に學堂に教へ教師の説く思想的教義に非ずして、多神教の無数の神祇と儀禮とは公私生活上の事務遊戯と密接の交渉聯關を有し、斷然人間の業務を廢し社會の職事快樂を抛たざるよりは到底その教界と離るゝ能はず。平和戰役の大事は顯官議官將士の臨席する嚴肅の犠牲を以て始まり且終り、公共の觀場は主として異教の信仰を根帯と爲し、神祇は君民の奉祀する演戲を嘉納す。若し嚴正なる基督教徒ありて、演劇諸技を避け得たりとせんも宴會に列すれ

ば諸友が互に幸福を祝して神祇に禱り灌煎の酒を灑ぐに遣はざるを得ず。新婦の花燭の典に赴く死者の送葬の列に連なる基督教徒は汚れし儀式を排すれば最愛の人に畔かざるを得ず。苟くも偶像の連關する技術商工皆汚れたり。一び上世の遺物を見れば神祇の肖形禮拜の儀器希臘妙手の想像に出でし優雅の形觀愉快の傳説は異端の家屋衣飾器什なり。音樂も繪畫も雄辯も詩賦もその源皆濁れり。アポロと美神とは悪魔の機關なり、ホーマーとブーヅルとは悪魔の奴僕なり、その天才を發揮せし雄麗なる神話は悪魔の光榮を推賞する所以なり。否とよ、基督教徒が殆ど言ふに困じ聞くに耐えざる不淨の語はその日常口にする希臘羅馬の言語中枚舉に遑あらず。

斯く八方より防備なき信者を威壓する危険ある誘惑は、嚴肅なる式典の日には更に甚し。式日祝期は一年を通じて恰も迷信が快樂若しくは盛徳の外觀を粧へるが如く巧に按配さる。例へば羅馬の最神聖なる式日たる一月改曆新正の嘉節は公私の幸福を禱り生死の記念を賀し資財の安固を

慶し、陽春の來復により歳の豐饒を祝し國都の創建共和制の創始を記念し、サツルナリアの世人類の平等に復するを賀すれども、此の如きは基督教徒の尙嫌忌に觸るゝ所なり。また祝節式日に毎戸華燈を懸げ橄欖を飾り頭に花冠を戴くは上世の常習にして、單に無邪優雅の民俗と見る可けれど不幸にも門戸は家神の保護の下に在り橄欖はダフネの戀人に捧ぐる神聖樹なり、花冠は屢屢の表徴として着くも、起原を尋ねれば亦迷信に出づ。斯くて基督教徒は國俗に従ひ官命に順はんには自心裡の苛責と教會の禁令とに耐え得ざらんとす。

偶像教の毒氣に對して福音の純正を擁護せんとする苦痛斯くの如し。勿論國教遵奉の國民は教育と習俗とによりて自斯る迷信的行事を踐行するに過ぎず敢て他意あるなきも、節物運行の度毎に基督教徒に眞摯なる反抗の氣を昂めしめ之をして益信仰の壘を固くし、愈惡魔の天下に對して神聖戰役を起す敵愾心を順致し來れり。

第二節 同【二】靈魂不滅と未來世相の説法

哲學者派
の靈魂不
滅説

二。シセロの書は、最能く上世哲學者が靈魂不滅に對する無智、誤謬、不定見を描出せり。哲學者は死滅の異怖を避くるため肉體分崩の最期の打擊は人生の苦難を離脱せしむるに在りと教へき。従つて論理は概ね想像に出で想像は虚榮に出づるもなほ人性に對してより崇高により正しき理想を抱懐せし少數の希臘羅馬の學者あり。此徒は人間心力の範圍を熟察し、深奥なる思索必須なる勞作を盡くして記憶想像判斷の諸能を推究し、未來に死處葬域の外に残存する名譽欲を考察して、人類を野獸と同視するを好まず、最眞摯に推尊せる人間を一地域數星霜の間に限定する者と爲すに忍びずして、終に解釋を純正哲學の學理否寧ろ其言辭に求めたり。其結果として物質は毫も心力の動作に影響せざれば靈魂は肉體と別物にして、清淨單純靈妙不壞、一たび肉體の桎梏を離脱すれば福德更に自在なる可きものと爲す。而してまた其結果としてプラト派の哲學者は靈魂は未來に

Platon

希臘羅馬
の國民的
宗教

向つて不滅なる而已ならず過去もまた永存不壞にて實に是天地宇宙に磅礴せる無限自存の大精神の一部分なりと推斷するに到れり。斯る感界を超へ經驗に絶せし崇高の空理は哲學的好尚を満足せしめ、若しくは閑寂の境に於て徳性を養ふに足らんも、學堂に受け來る此説の微弱なる影響は實世間の活生活に入らざるや直に霧消せん。見すやシセロの同時初代の數帝の治世に在りし顯著の人物にして、一生の行蹟毫も未來の賞罰應報を期せず、如き者の甚多きを。また見よ、斯學説は教育理解十分なる人々に空談虚説として輕侮擯斥されしを羅馬の法廷議院に公言せしに毫も聽者の反駁を受けざりしを。

乃知る、哲學の最高至上の努力も未來世の希望、若しくは所期を否、最大にして其蓋然を指示するより外殆ど能なかりしを。是に於て乎、肉體を離脱せし靈魂の入るべき不可見境の存在を證し、その狀勢を説述するを得るは唯神の示顯ある耳。而も不幸にして希臘羅馬の國民的諸宗教亦此に適せず、何ぞや。一。その神話の全般組織を支持するに鞏固なる何等の證迹なく、

第二節 同【二】靈魂不滅と未來世相の説法

異教徒中の最、賢明なる者は既に其權威を拒めり。二。幽界の記述に畫家詩人の幻想多く其描出せる饒多の靈性、應報賞罰に公正を欠き、放縱の小説無稽の傳奇を混淆して人心に最、適應す可き嚴正なる眞實を棄れり。三。希臘羅馬の敬虔なる多神教徒は殆ど未來世の教を宗教の一根木義と思惟せず。神祇の世界は私人の心裡に交通せず、公衆の社會に交渉し、主として現世の可見境に出顯し、ジュピトル若しくはアロポの神壇に捧ぐる所願は總べて禮拜者の現世の幸福に關し、未來世に就きては無智没交渉なるを證す。靈魂不滅の緊要なる心理は寧ろ印度、アッリア、埃及、ガリアの宗教に及ばず。吾人素此差を以て外狄の智力優越に歸する能はず、寧ろ此を以て特性を野望の手段と爲す狄國編徒の勢力に出づると爲さむ。

他の諸教と靈魂不滅

立教宣法に必須なる此教義の明白にパレスティンの撰民に示顯されアアロンの世襲巫祝の間に安全に寄托されしと爲すも、誤想ならじ。靈魂不滅の教義がモゼス教法中になかりしを見て、神祇の不可思議を推發せざるを得ず。豫言者によりて暗々裡に此義は説かれしも、埃及の苦難よりバビ

ロンの厄運に至る久しきは、間猶太族の喜畏偏に現世に繫りしが、流離の民族キルス王に釋放されて、神祇の郷地に歸りし後、エズラが宗教の古記録を蒐拾せし後、ジェルサレムにツツキ、パリサイの兩派起れり。前者は富有なる門閥より成り、モゼス教法の辭義を嚴守し、靈魂不滅はその信仰の唯一規と尊べる聖經中に見ざる所なりとて排斥せり。パリサイ派は然らず、口碑傳説と稱して東方諸國民の哲學宗教より若干の添加を聖經に附せしが、運命宿縁、天使精靈、未來の應報賞罰等皆其信仰の新條項にて、靈魂不滅の教義また其一なりしに、此派の嚴肅の風は猶太民衆の心を牽き、從つてアスモン王僧の世に、靈魂不滅は猶太教會の説となりしが、此民族の心情は彼多神教徒の如く、冷靜なる能はず、一び未來世想を容るゝや、その獨特の熱誠を以て之を抱懐固持せしが、其熱情は此教義の證迹に何者をも加ふる能はず、その蓋然をすら證定し得ざるにぞ、自然の示し道理の證し、迷信の受理せし人生不滅の教義も、なほ基督の權威と實例とを待ちて始めて、神來の眞相を顯證し得たり。

信仰を採り福音を受くれば人間に永劫の幸福を致す可しと約さるゝや、羅馬帝國の各宗の教徒、各階の士民各州の民庶争ひて歸依せんは訝しむに足らず。古の基督教徒が現世の假存を卑しき未來不滅の信仰に熱中せしさまは到底近世の不完全なる信仰にて推知し難きものあり。原始的教會に於て眞實の勢力を甚有力に強めしものは傳來の古く有用なるも實際には合同し難き一説なりき。そは世界の終滅、天國の來現を信ぜしこと是なり。世界終滅の近きは諸使徒の豫言せしところ、その説は夙に諸弟子の傳承せしところにて、基督の説法を文字通りに解せし此徒は地上に於て基督の困厄を見ズ、パシアン、ハドリアン諸帝の治下に猶太族の艱苦を見る現世の未全く盡きざるうちに雲上に人の子の光榮ある再現を期待す可しと爲せり。後世十七世紀の革命は豫言默示の不可思議なかりしも、斯誤傳謬説も賢明なる目的の爲に教會に保存さるれば、基督教徒をして乾坤蒼生を擧げて最終の神裁の現出に畏服す可き時節の到來を期せしめ、信仰に最有効の結果を生ずる利益ありき。

ミルレン

上世民間に流布せし千福年(ミルレンニウム)の説は基督再生と密接の關係あり。天地の創造は六日に成りしといへるは豫言者エリジアーの口傳によれば現世の六千年に當る。乃今や殆んど既に終りなるとする苦勞争闘の此長時期の後に、一千年の悅樂安息日來り、基督は死を免れ若しくば不思議に再生せし聖徒撰民と與に地上に君臨し、以て最後の全般の復活の期に至る可しと爲す。此千福年説は使徒の直弟と語りし殉道者ジュスチン及イレネウスよりコンスタンチン帝の皇子の導師たるラクタンチウスに至るまで師弟傳承して、世上一般に認諾されざるも正教信者の唱和する所たりしに、終に基督君臨説は異端狂妄の言説として排斥され、今現に尙聖書の一部を爲せる默示録(アポカリプス)は嘗て

1、新約全書の末巻なり。

世界終滅の前兆

「殆んど教會の禁遏に會はんとしたりき。」
 基督君臨説はその教徒に幸福と光榮とを約するに反し、不信の世界に對しては最恐ろしき不幸を宣言せり。新ジェルサレムの建立は不思議なる巴比倫の破壊に伴ひて進み、コンスタンチン以前の諸帝が偶像教を信奉す

るかぎり羅馬の帝都帝國亦巴比倫と運命を同らし、昌榮なる國民を苦しむる道徳的、肉體的諸災厄相踵ぎ、内は慘憺たる闘闘外は名も知れぬ北狄の侵略、疫疾と飢饉、殞星と日蝕、地震と洪水あらんも、此等はなほ將に至らんとする大破滅の前徴豫戒に過ぎず、最後の日に達せば諸シツピオ諸ケーザルの國土は天降の猛火に燒盡し、七丘の都城は宮殿廟宇凱旋門を併せて火焔の湖中硫黄の海底に沈まんと。蓋し大火の説は基督教徒の信仰と東方の傳説、ストイク派の哲學、自然の理法と吻合し、燒盡の國土は恰も天然の地勢と合致し、エトナ、ゴスギウス、リパリの諸火山は深濠洞硫黄床、噴焔口の表本たり。されば冷靜沈着なる懷疑學者すら尙火焔の爲に現世の組織一變せんことは、最眞に近しと爲して敢て拒まず。況や基督教徒は戰慄と確信とを以て既定將來の事實として期待し、常に嚴肅なる理想を抱きて帝國に起る諸災厄を皆世界の終滅の顯然たる前徴と認めたり。

異教徒は最賢最徳の者もなほ神の眞を知らず、信ぜざれば現世眼前の情理を犯して顧みず。然るに原始的教會はまた信仰の狂烈なるため人類の

地獄變相の威嚇

大部分を永遠の苦痛に委棄して平然たり。福音の光未發せざる前理性の光に事を誇りシク、ラテス若しくは古賢の徒には仁慈の希望を繋ぎ得可けんも、基督の降誕より示寂より以來、惡魔の信仰を固執する輩は天神の嚴判より免るゝ能はずとは一齊に説く所なりき。上古には知れざりし斯峻なる感情は仁愛調和の組織中に一味辛辣の精神を鼓吹し、信教の異同によりて親姻友朋の誼義を壞り、現世にて異教徒の力に壓抑さるゝ基督教徒は未來の捷利によりて報復せんと誇持せり。峻厲なるテルツリアンの言に曰く、爾曹は唯能く群劇を愛するも群劇中の最大劇宇宙の最後永遠の審判に看及せず。予は如何に喝采し、如何に哄笑し、如何に歡悅し、如何に狂喜せむ、幾多の驕傲の帝王、無能の神祇が闇黒奈落に沈淪號哭するを見ん時、上帝の名を讀せし諸高官が基督教徒に對して笑きしよりも猛烈たる火焔裡に燦爛し衆聖賢が徒弟と與に紅赫々たる光炎中に面を染むるを見ん時、幾千の名詩人がミノスの判決ならなくに基督の裁斷に震怖し、數多の悲劇作家が能く自己の苦痛を歌ひ、幾多の舞伎が「噫、讀者の仁心に訴へて予は茲

畏怖より
來る歸依

に熱誠なる亞非利加人の快口熱辭の地獄變相の長篇を閉ぢむ。
原始的基督教界にも其性その旨とする温和仁慈に適せし幾多の教徒ありしは疑を容れず友人國民の危難を患ひ將に至らんとする破壊より救濟せんとの熱情ある者尠からず。不用意なる多神教徒は此新なる奇襲に會ひて、巫祝哲學者毫もその防備に任せず、徒に永恆苦痛の威喝に壓倒驚殺されて、其畏怖の情は信仰と理性の進歩を助長しつ、一び基督教の宗教が眞實なるを悟るや進んで之に歸依するの最安全賢明なる所以を理解するは容易なりき。

第三節 同【三】原始的教會の奇蹟

原始的教會
の不可思議力

三。現世に於てすら基督教徒は他の人間以上に超自然の天度ありとなすは教徒自の快樂のみならず、屢異端教化の利器たりき。天神が宗教の爲に自然律を曲ぐる時々、不可思議の外に、基督教會は使徒及其直弟の時代より、言語、夢幻、豫言、攘魔、癒病、回生の神異力を傳統繼承せりと自稱す。イ

レネウスが福音をガリア狄種に説く時、狄語の困難と戦ひしも、當時より外國語の智識は既に存せり。覺時の幻と睡中の夢とに論なく神來の靈感は婦老師童の別なく總ての信徒に自由に與へらるゝ神眷なりと認めらる。祈禱、斷食、徹宵の禱等にて異常の神感を享く可く飽くまで心神を傾倒せる時は、心神は感觸の外に逸脱して感奮奪魂の境に入りて、恰も角笛の吹奏者の器たる如く、聖靈の器と化す。斯る幻覺夢想は教會の將來の史を開き當面の統治を持する所以なりき。不幸魔の附きし體中より之を驅攘するは此教の奇蹟にして、而も家常の捷利として識られ、上世の教徒は之を以て最明に基督教の眞理を顯證するものと爲せり。又當時公衆稠群の中に恐る可き儀禮多かりしに、祈禱者の力か技か能く患者を救ひ、敗れし惡魔は自世上の傳奇的、神祇人間の信崇を借奪せしなりと告白せり。然りと雖も第二世紀の末造、レネウスの世既に死者の復活は稀有の珍事ならずとし、教會の公式齋戒に屢此奇幻を見、蘇生者は數年間祈禱者と同棲せりといへるを想はゞ、病者の治癒の如きは驚くに足らず。されば信仰は死者に對す

第三節 同、(三)原始的教會の奇蹟

不可思議
のなる奇蹟
の利用

る奇異の捷利を誇稱するものから斯る際にもなほ回生復活を否認する哲學者の懷疑は如何ともし難かりけむ。一希臘貴人は此要諦に全力の駁撃を加へ、若し眞に能く死人を回生せしめ得ば直に基督教に歸依せんことをアンチオクの卑劣テオフィルスに約せしに、さしも東方第一教會の聖僧も此有理なる挑戦を回避するを可とせしは稍著聞せる事實なりき。

原始的教會の不可思議は時代の制裁を蒙りて近時甚自由に明敏なる研究により攻撃され、俗衆よりは厚遇を受くるも吾邦並に抗抵派諸歐の教會には一般に敬愷さる。是蓋し吾人の學問思索に馴れ、就中不可思議事件の證據を要請するに坐せり。然れども此好箇必須の反駁に私見を挿むは史家の義務に非ず。史家は唯斯る道理を宗教の利害と理性の利害とを調和するに用ふるの困難及之を妙用して超自然力の賚賜と爲す誤迷より此好運の時機を明瞭に區別するの困難を否む能はず。最始の師父より最後の法王に至るまで、卑劣聖徒殉道不可思議は相望みて絶えず、何の節に於て綿々たる口碑の連鎖を截断し得可きやを知らず。各時代皆奇蹟ありて

之を推重すること前世に滅ぜず、八世紀若しくは十世紀に尊きベデ聖きベルナルドを拒む可きや二世紀に於てジュステンさてはイレネウスの奇蹟を認む可きやを知らず。唯其奇蹟を善用せば何れの世か不信者に宣教し異信徒を説破し偶像民族を教化し得ざる可き。默示に實在を説き正理の人は不可思議力の休止を知りてより、基督教會より奇蹟の俄然として若くは徐徐として絶ゆ可き時の至らんは明白なり。而も其時の何なるやは暫く措くも使徒の死滅羅馬帝國の教化、アリアン異教徒の絶滅當世基督教徒の無智は均しく驚異に値す。既に實力を失へる基督教徒はなほ虚聲を擁して輕忽信仰の職に任じ狂妄感通の語を用ひ偶然奇中を以て超自然事と爲す。寧ろ近世の合理的奇蹟の實驗は基督教世界を天神の道に導き、神の技能を以て基督教民の眼を馴らしむ。近世伊太利の丹青界第一の妙手にしてラファエル、コレヂョの名を假りて孱弱なる模倣を飾るとせば、虚飾忽露はれんのみ。

使徒以來原始的教會の奇蹟に就きて何の説あるも今敢て問ふを須ひず、

その第二三世紀の穩和なる人心を動かし宗教信仰の功を奏せしは明なり。近世にては鬱積せる懷疑は、最敬虔なる性情に歸して超自然的真理の許容は冷靜なる聽従に過ぎず、久しく自然の事象を觀察尊重するに馴れし予輩の理性少くとも想像は、天神の行爲を顯相に認むるに足らず。然れども基督教の初世に於ける人心は、太く今と異なり。異教徒中最好奇輕忽の輩は、屢神異確認の社會に誘はれ、原始的基督教徒は常に不可思議界に住し、その心は經へず異常の奇事を信じ、身邊常に惡魔の逼るあり、幻夢の慰むるあり、豫言の戒むるあり、教會の祈禱には危難疾病、死亡をすら免れ得可しと感じ且信ぜり。その自目的となり機關となり、觀官となる實現假粗の神異はまた幸に其徒をして容易く宗教史上の靈異を信仰せしめ、その經驗の範圍を出でざる奇蹟はその理解境界外の不可思議を確認せしむ。信仰の名の下に、神の眷遇、未來の幸福を確認して基督教徒の最大利益と爲すは此超自然的事實を深く感銘すればなり。

原始的基督教徒の徳性

第四節 同【四】原始的教徒の眞摯の道徳

四。然れども原始的基督教徒もなほ徳性を以て信仰を論じ、信徒の理解を左右する神教はまたその心意を清淨にし行爲を指導せざる可からずと爲せり。同胞の無邪思を辯明せし基督教徒の最初の辯護者も、宗祖の聖淨を顯揚する後世の記者も、均しく福音の説法によりて世界の風俗を改良せりといへり。但予は唯默示の勢力を擴大するものとして、此事に言及せしなれば、原始的基督教徒が當世の異教徒よりもはた後世の墮落せる基督教徒よりも嚴肅潔白なりし二原因は、過去の罪惡を償ふと當世に名聲を維持するに在りきと曰はん。

最重惡の徒も、一び悔悟の念動けば、異端神祇の廟にては到底赦され難き罪惡を洗禮の淨水によりて拂ひ去らるとして、基督教徒に誘惑されたりとは、古來異教不信者が無智と憎惡との餘りに刺誣せし風説なるも、其實を見ればまた教會の名聲と増加とに由る。乃基督教徒自も亦高名の聖徒多

くは洗禮の前に無賴重罪の徒なりきと曰ひて恥ぢず。假令不完全ながらも世に立ちて仁惠の事に従ふ者は恥辱悲哀畏怖等の爲に容易く動かされざる冷靜の満足を生ず。乃ち神師の例に倣ふ福音傳教者は自己の不徳の爲に煩へる男子の社會殊に婦人の社會を嫌忌擯斥せず罪惡迷信を離脱して不滅の光榮ある希望に向ふや嘗に有徳の生活ならずまた懺悔の生活に入る可しと決意し、心中第一の情は完備に在り、冷靜の伸介を理想とすれば人情は忽ち極端より極端に飛過するは常なり。

新改宗者の名を教中に列し身を教會に投ずるや未だ十分に精神的ならず無邪思の性情よりその過去の不規則に復歸せざるため嚴に拘束を加ふ。蓋し何の團體にもあれ國民若しくは宗教の大團體より分離自立すれば天下衆人囑目の下に立つ。團體小なれば益々團體の徳否に負ふ所多きにぞ各員自戒めまた友衆を戒めて名聲の失墜を防がざるを得ず。嘗てピチニアの基督教徒、小ブリニウスの判廷に立つや、其の徒は豈國法を犯さざるのみならんや、苟くも公私治安を紊る偷盜強賊奸淫詐僞等を爲さずと曰ひ、後

名聲の尊重

人道的教義

一世紀、テルツリアヌスは基督教徒にして宗教事項の爲ならで刑吏の手に落ちしもの極めて稀少なるを誇れり。凡て傲奢を主とせる當世の俗に反して、教徒の眞摯離脱の生活は自仁惠廉節儉約其他所有穩健着實の徳を養はしめ、多くは商業其他の職業に従事せしものから、苟くも神聖を冒瀆するの嫌なからんとて、飽くまで老實清白を旨とし、且は世界の輕侮を受けて謙温厚耐忍に馴れ、益々迫害に遭ひて益々相互に結束を固め、教徒間の仁愛信頼は異教徒を驚かし却つて屢禍端と爲りしことすらありき。

其誤過も徳の餘りに出でしは原始的基督教徒の甚々尊敬す可き點なり。教會の卑涉教師の行蹟は當世人の職業主義行爲を證しその權勢は之を左右し得しが、その聖典を學ぶや專信心を以てし技能を以てせず、基督諸使徒の嚴肅なる遺言を解する最、辭句に忠に後世の註疏者の意を汲み義を探るの類にあらず。福音の完全を哲學の知識以上に卓越せしめんとせし熱誠の教師は自制清淨忍辱の義務を負ふこと到底腐敗懦弱の現代に於て學び得ず存し得ざるものあり。斯くまで異常に斯くまで崇高なる教義は人間

の尊敬を受く可きは當然なれど、假現の一生に自然の感情と社會の利害とのみ腐心せる世間的哲學者の贊同は得らる可くもあらず。有徳寛仁の性中に兩個の自然的偏向あり。一は快樂の愛他は活動の愛是なり。快樂の愛を飾るに學藝を以てし練るに社交を以てし正すに經濟健康、名聲の尊重を以てせば、以て私生涯の幸福の大部分を博し得む。活動の愛は之に比して更に強烈に更に暖味なる主義なり。世屢之を憤怒野心報徳に導く者あれど、若し然らずして公正仁慈に用ひなば諸徳の源泉たり得可く、一家一州一帝國の安泰昌寧一人不撓の勇に頼り得可し。故に快樂の愛には愉悅を歸す可く、活動の愛には有益を源ぬ可し。若し能く兩者を兼ねて之を攝調し得ば、是人間の至完理想なるも、無感覺不活動兩愛併せ缺くが如きは、何等箇人の幸福を致さず、又毫も天下に益するなき廢者なり。知識の獲得、理想の練修、拘束なき口舌の快辯は寛容なる人心の享樂に用ふ可きも、救済に用なき知識は悉く不用とし、辯論の輕浮を口舌の濫用と認むる基督教徒の嚴肅なる極力此等の諸快樂を排斥せり。肉體は心と

と離る可からず、心は肉體の感受を味ふものなれど、吾狂熱なる宗祖の理解は太く之と異なり、徒に天使の完全力に模して、凡て世間的肉體的快樂を排除せり。感觸は人間生存の要諦なれば、其用を禁じ難きも、苟くも由て以て快樂を感ずれば、濫使の端と爲し、生天の候補者は美味、薰香は固より妙音に耳を掩ひ、美術に眼を閉ぢぬ。盛衣高館、珍器は肉慾誇心を併用する罪惡にして、既に罪を懷きて救の尙期し難き基督教徒には、簡素の生涯を適せりとすなれば、教師の奢侈を排せしは甚しきあり。假髮、白衣以外の華文の衣裳、樂器、金銀の器皿、柔沈ヤコブは石を枕としたり、白き麵麴、船載の外國酒公式の祝賀、温浴、さてはテルツルリアヌスの説によれば、自己の面貌を偽り造物主の神工を變ずる刺髮等は悉く排斥されたり。基督教の富者上流に入るや、斯る奇習は卓絶せる聖者を以て、自任する少数者にのみ残ること猶今日の如しと雖も、自己の運命によりて、獲取し難き傲華と快樂とを排斥して、功徳を得可しと爲すは、下流の爲し易く且快と爲す所なり。原始的基督教徒の盛徳はなほ初世の羅馬人の如く貧窮と無智との資なりき。

諸師父の男女兩性の關係に於て極めて純潔なりしも亦同一理由、則人間の肉感を満足し精神を破壊する快樂を排斥するに出づ。若し亞當にして創世主に従順ならば永久に純粹の淨貞を保ち得、樂園は無邪思不死の種族の世界たり得しとは、其徒の常に言ふ所にて結婚は唯亞當の墮落せる子孫が種族繼承の必要已むなきに出づと爲す。此點に於て正教心學者は結婚制を説明するに頗る窮し、初婚は天然及社會の目的に適合せるも再婚は合法的姦淫にして此を犯す者は基督教の清淨を辱す者直に教會より放逐される可しと爲す。その希望は既に罪惡結婚は敗徳といへば、獨身は最も神的全きに近きものと爲す。古の羅馬にては單六個の貞童女巫を有するすら頗る困難なりしに、原始的教會には終生淨身を保つ男女甚多く、基督教信者には此事更に容易く行はれしかば、その行はれ難く見ゆるより異教徒亦情慾の犠牲の功德を敬ひ師父は之を以て基督教の爲に誇示聲言せり。後世基督教の俗權に對抗せし修道院制の起源是なり。

基督教徒の世務を忌む猶快樂を排するに減ぜず。身體財産の自衛は如何にして過去の罪過を寛假し新に幾多の障害を招く忍辱の教義と調和す可きやを知らず。その素朴は宣誓の式、吏員の傲慢、公生涯の競争を卑し、その無智はまた其有罪の舉、抗敵の舉が全社會の安寧を攪亂する時すら正義の劍、戰役の劍を以て血を流すの正法たるを解せず。不完全なる立法の下、天の認容に頼りて猶太憲制の力が狂熱の豫言者と抹膏の君王とに運用されしを認め、現下の世界にも斯る憲制必要なりとし、嬉々として異教太守知州の下に服従し、飽くまで柔順忍耐すれど、尙毫も民政に携はり帝國の守備に任ずるを諾せず。原來歸依以前に既に其職役に任ぜし者を除きて基督教徒はより神聖なる義務を廢せずして戦士たり文官たり君王たる能はず、爲に異教徒をして若し滿天下の蒼生をして此新教に歸依せしめば四狄に對して如何に帝國を防守し得んとの刺詆を敢てせしめしも、基督教徒は滿天下歸依の前には戰役も政府も羅馬帝國もはた全世界も烏有に歸す可しとの豫期を公白し得ざるものから、辨解は甚曖昧なりき。而して此點にても亦當初の基督教徒の地位は其宗教的地位と適合し、活世間より隱退

第四節 同(四)原始的教徒の眞摯の道徳

せるは軍國の榮譽を厭ふよりも寧ろ其任を免るゝに在りしを知る可し。

第五節同 【五】基督教會の共和制統一

教會組織の新事功

五。然りと雖も一時的熱誠の爲に激越せるもの何時しか天然の平衡に歸還し來るは人性なり。原始的基督教徒は塵務享樂を度外に放ちしも、なほ根盡全滅せざりし活動の愛は復活して教會制の新事功に向へり。始は帝國定制の宗教を攻撃せし分離せし教團も、やがて定制を生じ、基督教共和治法の精神的機能のみならず世俗的方策をも併せ任する若干の司徒を擧ぐるに至り、教會其名譽共擴張等に就きての愛教心は、最敬虔の心裡にもなほ當初の羅馬人の共和政治に對する如く醸成し、時には切望する目的の爲には手段をも問はず。自己若しくば黨朋に教會の名譽職官を占めんと、の野心を粧ふに公益共和の爲に智力を盡瘁するを以てし、その智力を背教の指摘闘争の術、不信なる同胞の排斥、不名譽なる擯斥に用ふる可きからず、教界の司宰は、鶴の無邪に交ふるに蛇の智を以てす可きを自覺し、定制

その原始的自由平等

立法の習慣より其智益進み其無邪日に銷し、教會にても世間にてても公生涯の著聞の人士は、辯舌と手腕と、人世の俗智と世事の技倆とを以て推され、その行動の眞目的を人にも自にも隠しながら、却りて宗教的熱情の餘勢を驅りて辛辣頑迷の色彩を帯べる俗情に墮落し行けり。

蓋し教會政府は、屢教會争擾の目的にして懸賞と爲りて、羅馬バリオクス、フアード、ゼネヴの争奪者は自己の旗下に原始的使徒的模表を隸屬せんと争ひき。寧ろ黨争分裂に甘んずるも時代の變遷事情の轉化に應じて後世の基督教徒に各自宗制の自由を得せしめんとは、定制立規に拘泥せざる古の使徒の見なりと爲すが如き公平の意見を持せし者は極めて少數なりき。而も彼第一世紀の使徒等が爲し、方針は、ジェルサレムにエフソスに、コリンスに見る可く、羅馬帝國の諸地に起りし結社は、唯信仰と仁慈とを紐帶連鎖と爲し、平等と獨立とを根底となし、基礎と爲し、訓練と智學との欠如は時に豫言者の援助を以て補足され、豫言者は老少男女才不才の別なく、神來の感應によりて出顯指導せり。然れども斯る情勢の下に、豫言者的教師は屢

此機能を濫使誤用し、機宜を失し禍因を醸し、コリンスの如き爲に禍を免る甚しかりしかば、豫言者制は無用より有害に進み、其権能を停め其地位を廢し、之よりして教務を教會の定宰則、卑涉不勤斯彼得に一任すること防まる。卑涉と不勤斯彼得とは本來同職同階の異稱に過ぎず。不勤斯彼得の名稱は年齢不寧老實智識を表し、卑涉の號はその會下に歸せる教徒の信仰狀勢を監督するの義のみ。斯くて不勤斯彼得は皆等權にて各多少の教衆を會して共和的會合を爲し居たりき。

然るに自由の最完全なる均衡は更に秀越せる司宰を要し、公共的討議の爲には少くとも會合の意志を會集し決議を實行する司會長を要するとともに、毎歳若しくは屢次の改撰は全般の靜平を案すを恐れし結果原始的基督教徒は永續的尊職を置き、諸不勤斯彼得中最尊最賢の一人を推戴して之に任じ教會司宰の重任を寄するに決し、こゝに不勤斯彼得の卑稱の上に卑涉の尊稱を生じ、前者が最自然に近き基督教議員の稱に止まりしに反し、後者はその新創の議長の地位を占めき。此宗制の進歩は第一世紀末以

地方的宗
教會議

前に既に起りしが如く、その教界當面の平和を持し將來の發展を期するために必要なるや、忽帝國諸地に散在せる諸結社の襲踏採用する所と爲り、現今にても東西の最有力なる兩教會に原始的且神創的制度として尙存せり。但初めて教徒間に推されし敬虔恭謙なる不列斯彼得の職が現時羅馬法王の冠冕日耳曼教主の尊冠を圍繞せる權力と尊嚴とを有せず、否之を拒みしことは記すを要せず。たゞ一言その有せし主として靈界の時には俗界の狭き職權を説かば、教會の聖禮の執行宗儀の監理、教宰の推尊淨財の處理、信徒が偶像信奉の判官に提起するを厭ふ事件の裁判等にして、事皆不列斯彼得會の指導と教徒會の協贊とに決せり。故に當初の卑涉は只是不列斯彼得の頭首、自由教民の奴僕にして、其示寂空位を生ずるや、自神聖なりと信ぜる全會衆の投票により、群不列斯彼得中より後任卑涉を推撰せり。

諸使徒の滅後一百年間基督教會を司配せしは斯温和平等の制度なりき。乃信徒結社は各自獨立の共和制を有し、遠近に論なく使書相通じ親交を訂せしも、基督教界を通じては何等至上權力も立法會議も存せざりしに、漸

く信徒増加して利害事功の關涉更に密通なるを要するより、第二世紀の末、造希臘亞細亞の諸教會は地方的宗教會議を組織し始む。蓋し例を其地方なるアムフィクチオン(希臘諸州總會)アカイア聯盟、さてはイオニア諸市の會議に採りしと見ゆ。斯くて諸獨立教會の卑涉が春秋の定期に州の首城に會議を開くは殆んど定例常法となり、少數の有名なる不列斯彼得との討議を援助し、多數の聽衆之を節調し、宗律と名くる其議決は信仰薰陶の必要なる各異論爭議を決定し、基督教民の代表たる此連合會議は神聖なる精神を自由に流露せしかば、宗律の制定は個人の野望よりも公衆の利害よりも歡迎され、數年を出でずして帝國到處に行はれ、各州會の間には一定の通信ありて相互にその消息情況を通告せしかば、幾ならずして加特力教會は大聯合共和制の形式を具へ實力を得たり。

大宗師權の發達

各教會の立法的權力は何時しかに會議に移るとともに、卑涉は連合して實權の握取に力め、利害を共にするものから戮力して僧侶教民固有の權利を奪取す。かくて第三世紀の高僧は訓誡の辭を命令に變じ、未來の靈權の

理
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

都城大僧

種子を時き、實力と道理との不備を聖經の警諭と口舌の雄辯とを以て補ひ、教會の統一權力を嵩めて大宗師職にて代表し、以爲く君王顯官は地上假現の領土に君臨するを誇り得るも、神意を擧げて現當兩世を支配し得るは唯大宗師權あるのみ、卑涉は基督の副王使徒の繼嗣、モゼス教法の高僧の代理なりと。乃、宗教的特權は僧侶教民撰擧の自由を壓倒し、教會の施制に於て尙不勤斯彼得の判定、教民の意向に聽く所あるも、それは自任意下間に過ぎずと爲し、其會議に存する最上權を認識するも、各自教界の施治に就きては恰好の警諭たる群羊より從順を強ひ、恰も牧者の群羊の上に立つが如くす。但此從順には一方の努力他方の反抗なきにあらず。低級編徒の熱誠なる反抗は諸處に制度の民主的部分を飽くまで維持せんと力めしが不幸にして擾亂離背の不名譽を以て稱せられ、カルセーヂのキプリアンの如く、聖徒殉道者の有すべき基督教的道德と、最大望ある政治家的技能とを併有せる幾多の高僧の努力奮闘によりて、宗師派は迅速なる進歩を爲せり。蓋し始不勤斯彼得間の均權平等を壞りしと同一の原由はまた卑涉間に

競争の端を發しぬ。春秋の定期に州の卑涉會議に列するや個人的功績聲名の差等は直に會衆の覺知する所と爲り、群議を左右し得るは實に若干少數者の智慧の力なり。然れども公議は定制を要し、各州會議の常任議長は各首城都門の卑涉の手に歸し、都城大僧正(大卑涉)大教正(主教)の尊稱を得、卑涉が群不勤斯彼得の上に超越せしごとく、今衆卑涉の上に凌駕優越せんす。豈嘗に惟のみならずや。諸都城大僧正間にも久しからずして凌競争勢起り、各其駐錫都城の名譽利益共司牧の下なる教徒の人数富資其地出身の聖徒殉道者、其教會創始に與りし使徒若くば使徒の徒弟より正教卑涉の歴世傳承せし信仰の純正等を極力誇稱せしが、教俗兩面諸般の因由より推して諸州の尊崇を博し服従を得可きは帝都羅馬なるを逆睹し難からず。信教界の情勢も帝國の首都たるに比例す。基督教の諸中心中、地最大、徒最多、西方にて由來最古きは羅馬教會にて、諸州は概ね其宣傳教化に歸依せしものなり。アンチオキア、エフソス、コリント諸教會の最誇稱す、創始の使徒は一人なるも、チベル河畔の教會は使徒中最著名なる兩使徒の宣

羅馬教會の野心

教殉道に起り、羅馬の諸卑涉は聖彼得の人格職位に關するものを傳承せりと爲し、伊太利及諸州の卑涉は基督教貴族政治の最嚴密なる表現たる(命

命、聖保羅と聖彼得となり。但彼得の羅馬に宣教せしは古來大抵之を曰ひ、抵抗教派も亦然か云ふ者あれど、スパンハイムは此説を排斥せり。十三世紀の師父ハルツインは聖彼得をトロア英雄、警諭的人物と爲せり。

令會合の首班を之に許さんとせしも、教界の元首權は認められず、亞細亞亞非利加の衆は早く羅馬の俗界の主權に服せしも、教界の主權には激烈に反抗せり。專制の權力をカルセーヂ教會に奮ひ、其州會を左右せし愛教者キプリアンは決意と成功とを以て羅馬教主の大使に反抗し、東方諸卑涉を後援とし、彼古のハンニバルの如く、亞細亞の中心に新興盟を求めたり。此ボエニ役の流血なかりしは相争ひし高僧の温和なりしにはあらで無力なりしに因る。其武器は讒謗と破門と而已。争撃の全局を通じて互に之を用ゆる甚激なりき。法王若しくは聖徒殉道者を攻撃する必要上當時教界の雄將が議場若くば戰場に看するが如き熱烈の奮闘を爲し、詳細を叙せんには近世の加特力教徒を擧げせしめん而已。

教界權勢の進歩は古の希臘羅馬人の未嘗て知らざりし教俗の差別を生じき。俗界とは何ぞ、基督教徒の全部なり、教界とは何ぞ、特に宗教事務に關知する撰擇されし一部衆なり、近世史上に最、教化あるにあらず、唯、最、必要なる問題を惹起せし著名の一部衆なり。教俗の敵對は時に尙幼稚なる教會の和平を攪亂せしも、其熱誠と活潑とは共同歸一の目的に用ひられ、最、詐略ある變形の下に、平涉殉道者の抱懐せし權力の愛着すら只管從徒の數を増加し、基督教國の範圍を擴大せんとせり。其徒は政權を有せず、久しく吏僚の援助を得ずして、虐壓を蒙りしも、自己の社會に於ては二個の最有力量なる統治力を用ひ得たり。何ぞや。酬賞報罰是なり。彼は信仰の敬虔なる寛容に出で、此はその熱誠なる了解より來れり。

一。最、プラトンの想像に適し、或はエセニア派の中に見る如き資財共有は、暫く原始的教會に行はれたり。最初の新信者の熱心なる、悉く自己の資財を沽却して、其價を使徒の足下に捧げ、自己は共有財團の平等なる分配を受けて、甘んじたりしに、基督教の進歩は、使徒の如く純潔ならざる手が

人情の自利に還りて、此寛大なる制度を濫用す可くして、漸く此風を滅じ來り、新教歸依者は家傳世産を享有し、相續し、商工によりて増殖するに至り、絶對の犠牲にはあらで、適度の部分を福音の宰者に呈する俗と爲り、毎週毎月の會合に各信徒は時宜に應じ、資力と信仰とにより、任意の進獻を致す。一紙半錢固より拒まざれど、モゼスの教法に十分一ありて、劣れる猶太教徒すら資財十の一を致すは常なれば、基督教徒は更に寛大ならざる可からずや、がて世界の終滅と共に銷盡す可きものなれば、餘財剩資を寄捨して、若干の功德を得可しとは、其所説なり。斯りしほどに各教會の收入は不確定に、信徒の貧富に従ひ、寒邑と大都とによりて大差あるは言を須ひず。デキウス皇帝の世、羅馬の基督教徒は若干の富資を擁し、其祭式には金銀器を用ひ、新歸依者の多數は教派の公資に投ずるため、田宅を沽却し、爲に父母は聖徒たりしも、子女は乞丐たりしとは、當世官吏の言なり。斯る教外宗敵の言は、必ずしも信じ難きも、當時の實情に信賴す可き色彩を與ふる二事實あり。是或精數を示し、或確念を與ふる唯一の材料たり。そは何ぞ。殆ど同時に、

教會香財の分布

羅馬に比しては富資の劣れるカルセーヂの卑涉が漢中の蠻族に捕はれし
 ヌミヂアの同胞を償還するため不時の喜捐を募りしに忽ち十萬セステル
 ケ(八百五十磅以上)を得たるは其一なり。其二はデキウス帝前約百年羅馬
 に寄附せんとせし一ポンツス人が獨力にて羅馬教會へ二十萬セステルケ
 を寄進せしことあり。但此等喜捨は殆んど錢貨を以てす。基督教界には
 土地の寄附は望まず又得難かり。そは諸法令の恰もわが國の不讓資產律
 の如く、皇帝若くは議院よりの特許なくして田園を公共團體に讓與するを
 禁ぜりあり、皇帝議院は其當初は輕蔑し後には畏忌せし新教派に此特許を
 爲す可くもあらざればなり。然も此禁令の漸く懈弛し基督教が羅馬境內
 に土地を有するを得し實例はアレキサンデルセエルス帝の治下に始めて
 見れき。而して督基督教の進歩と帝國の内亂とにより法令次第に弛み第三
 世紀末前に羅馬、ミラン、カルセーヂ、アンチオク、アレキサンドリア其他伊太
 利及諸州の大郡通邑にて富有の教會は土地を獲得所有し始めたり。
 卑涉は自ら教會の管庫なり。公共の資財は計算なく制裁なく其管掌に

委せられ不勒斯彼得は唯教事に務め更に地位卑き執事は唯收入の處理分
 配の事務を執る而已。若しキプリアンの激語を信すれば其亞非利加の教
 冊中には所管の處理に就きて宗規は勿論道義に外づれし者甚多かり。
 此不信なる管庫者は或は快樂の爲に或は蓄財の爲に、さては重利のために、
 教會の富資を濫用私使せり。たゞ教民の寄與進献自由に無制限なりし間
 は、管庫者の濫用尙甚しきに至らず、その寛大なる用途は宗界の光彩たり
 き。則適當なる一部は卑涉以下編流の用を支へ、充分なる他の一部は彼徒
 の所謂アガペと稱する愛の會式に用ひ、殘額は擧げて貧困者の資たりき、卑
 涉の命によりて、鰥寡孤獨癡疾老老の
 扶助、外客巡禮の擁護、捕囚、殊に宗事教
 件の爲に楚囚となりし者の慰藉に分配使用されき。斯慈善の交通は弘く
 行はれ、遠隔の地方をも併せ、貧少困窮の教會は富大の教冊の喜んで扶助す
 る所なりき。是實に物質的に基督教の進歩を増進せし所以にして、其嘲笑
 せる異教徒も人情の慈心に動かされて此新教派の慈善を嘉納し、現世の救

第五節 同(五)基督教會の共和制統一

五一

h、希臘語 Agape、則、愛より出づ。貧窮恤賑
 の事ある際此式を行ふ。三百九十七年カルセ
 ーヂ會議にて廢止さる。

濟と未來の保護と相待ちて、貧病老苦の不幸に沈淪せる世界幾多の士女は此温き教懐に來投し、また當世の不人情の俗にて父母に遺棄されし幾多の幼兒は基督教徒の慈惠と其公財とによりて死を免れ洗禮され教育されし例甚多し。

破門

二。一般の認識によりて定まりし規矩を拒み犯す者を排斥するは其社會黨朋の争ふ可からざる權利なり。基督教會は此權利を惡む可き罪人、殊に殺人騙詐姦淫の徒に、宗法教律の禁する異教外道の徒に、さては自意にも果た他の事情にもせよ、洗禮後苟くも偶像禮拜によりて身を汚せし輩に用ひたり。破門の結果は教俗兩面の効力あり。此を受けし基督教徒は信仰の所有を奪取され、宗教私交の朋友と絶たれ、最愛し愛されし者に嫌忌され、不名譽の烙印を得て一般の社會より放逐さる。此不幸なる逐客の地位は痛ましくも憐れむ可く、其實苦よりは心痛甚し。基督教の福音は永世に亘り、その罪を得し教界の司宰は神より地獄天堂の鍵鑰を委託されたりとの恐る可き説は心理より消ゆる能はず。自救濟の眞道を發見し得可し

その寛赦と贖罪

との自覺と希望とを有せる異教徒はまた自別に教俗兩面の慰藉を求むるを得可けんも、心ならずも瀆冒偶像禮拜に墮ちし者は其墮落を自信し、只管基督教界に復歸の念を斷つ能はざるなり。斯る徒の處理に就きて原始的教會には正義派と仁慈派との二反對説ありき。峻嚴なる論者は此徒に對して永久に容赦なく其背き去りし神聖なる教界の最低の地位をも拒み、與へず、唯其罪を悔ひて生死の悔悟が至上天神に受理さる可きやの極めて微弱なる光に望を繋ぐるに止まらしむ。温和派は然らず、基督教會の最純潔に最尊ぶ可き教理と實行とに頼り、歸來する懺悔者に對して勸解し、天堂の門を鎖すこと稀なるものから、なほ其罪を贖ふため他人をして恐れて其轍を踏まさらしむるため、峻厲嚴肅の式法を設く。其懺悔者は公懺斷食麻服を掛けて會堂の門に立ち、涙を流して赦罪を求め信仰の祈禱を求めざるを得ず。其犯罪重大ならば數年間懺悔を以て神裁の満足を購はざるを得ず。罪者異信者背教者が教會に復歸し得るは徐々辛苦の徑路を経るを要せり。而も極重惡罪、殊に屢教

界長者の慈惠を濫用せし徒の如きには永劫の破門なきにあらず。罪跡の數と情實とにより卑沙の命にて所罰の法必ずしも同じからず。一はガラチア、一は西班牙に略同時に起りて今に遺れるアンキラ會議とイルリベリス會議との教律は其精神に太く差あり。洗禮の後屢偶像に犠牲を供せしガラチア人は七年の懺悔にて赦るされ他人をして其例を踏ましめしもなほ三年の明を延したる而已。之に反して同罪の西班牙人は不幸にも一死尙贖罪し得ず數へられし十七重罪の首に偶像崇拜を掲げられき。而して其の重罪目中に卑沙不勒斯彼得否とよ執事の讒謗をすら數へたりき。寛容峻厲の節調報賞所罰の神約は政策正理の兩面より教會の人道的勢力を組織せり。現常兩世に師父の權を奮ふ卑沙は其職權の重大を認識し秩序維持の好辭柄の下に野心を包藏して十字旗下に集ひ來り其數日に加はる信徒軍の離畔を防止する必要上相競ふて訓練に力む。キプリアンの權威ある揚言によれば破門贖罪は教界の重規にして基督の徒たる者は例令道德を輕しとするも卑沙の訓旨を重んずるを得策と爲すが如し。卑沙

宗門の權

の地は裂けよアアロンの僧に服せざる背離の輩は劫火の焰に吞まれよと命するを聞く時は宛もモゼスの聲を耳にするが如きと亦時に羅馬の執政が共和制の尊嚴を確立し法令の精神を強制するが如き口吻なりと想はる。(カルセーヂの卑沙が同僚の徳を嘲りて曰く、「斯る不正にして罪されずば、茲に教界の精華滅びん、教會を司導する崇高神來の權終らむ、基督教の終滅たらむ。」キプリアンは斯る現世的光榮を讓しけむ否恐らく得んと望まざりけむも唯教會の覺悟了解の上に斯る絶對の號令權を得んは最專制の主が武を用ひて不廷の民を屈せしよりも更に人心の満足たりけむ。

再五因由の

以上は實に冗漫憊困なるも亦是必要の討究なり。斯くして予は基督教の眞理を有力に助長せし數副因を開陳せんと欲せしなり。此等諸因中若干の人爲粉飾若干の偶發的事情さては過失情緒の錯綜あらんもなほ人間は其不完全なる天性に適合する斯る旨意によりてこそ最能く動かさるるは怪しむに足らず。基督教が羅馬帝國に多大の成功を收め得しは獨特の熱誠他の世界の直に將來すること不可思議嚴肅の徳及原始的教會の制

度以上五因に頼れり。第一因は苟くも征服せんと志せし敵には到底降らざる基督教徒の無畏不敵の勇に出づ。次の三因は此勇に最恐る可き武器を授く。而して最後の因は其勇を合せ其武器を用ひ少数と雖も精銳熟練の士馬が攻戦の技に習はず旨を知らざる烏合の大軍を撃破する不可抗の雄力を表するものなり。

多神教派の弱點

多神教の諸派にては唯民衆の迷信を利用する若干の埃及叙利亞の狂熱の徒が巫祝繙流の地位を保ち宗教的職業によりて自支へ土地神明の安全昌榮と自己の個人的利害とを結合するに過ぎず。羅馬にても諸州にても多神教の司祭は概ね貴種門閥ならざれば巨族富室著名の神廟を司り公共の祭式を行ひ屢自費を以て神祭の競技を擧ぐるを名聞と爲し冷然として國法邦俗に従ひて古典舊儀を襲踏するのみ。一に是生平の常事毫も利害の深念信教の熱誠あるに非ず。各司典の神廟市邑に屏居して全教界の訓練統制を念とせず議院神祇官皇帝に推服して和平の間に一般民庶の禮拜崇敬の神事を保持して晏如たり。多神教徒の宗教的情念の如何に多

異教徒の懷疑

端に疎漫に不確なるかは既に嚮に曰へる如し。その生活と地位とにより偶然に信仰の目的と心緒とを定め數千の神祇に崇敬を致せば、その特に何の神何の祇に不惜身命不退轉の至信を捧ぐるといふのあり得可からず。基督教の世に顯れし時斯る幽けく不完全なる感念も早其本來の力の大部分を失ひ居たりき。人情は自既に多神教の愚劣を越えて容易く捷を占め、テルツリアン、さてはラクタンチウスが其虚欺放縱を暴露するや、皆キケロの辯ルキアヌスの智に走り、その懷疑的書籍の流行は讀者以外に波及し、不信の風は哲學者より遊樂實務の徒に、貴族より平民に、主人より家奴、其卓に侍して他の談論に耳を傾くる家妓にまで感染し、公式には哲學者もなほ國家の教事に相當の敬禮を拂ふも、内心の輕侮は掩はんとして殆んど得ず、國民は其位階學術尊敬す可き諸人の神祇を輕んじ宗教を侮るを見ては教義の眞理に就きて疑義を挿み懸念を抱かざるを得ず。古義舊旨の廢頽は幾蒼生を痛ましき不安の地位に沈め、懷疑惑亂の情は唯少數研學の徒を樂しましむる耳、されど迷信の因習は深く民心に入れば、急に之を動かさば

なほ愉快なる幻想を破るを悲しまむ。不可思議超自然に對する好尚未來に關する好奇現世以外の希望畏怖の情緒は、多神教の創定されし主因なり。乃神語の組織亡ぶれば亦恐らく他の迷信の來り代る可く此の危機に際して天神の大智最正理なる尊敬と覺信とを起す可き同時に人民の好奇驚異尊敬を牽く可き粉飾を有せる眞の默示を下さざりせば必ずやジュピトル、アポロンの廢廟に他の近代流行的の神祇の出現を見たりけむ。蓋し民心は古信仰の人爲的なるに離るゝも眞摯なる歸依の情は存すれば其空心を満たしその熱情に投じ得可かりしを以てなり。若し一び此に想及せんか、基督教の迅速なる進歩に驚かんよりは寧ろ其成功の更に速に更に廣からざりしを恠しまん耳。

第六節 基督教宣傳の史的見解

羅馬の征服は基督教の征服の爲に路を開けりとは眞實に適當なる見解なり。歐亞非三大陸の最進歩せる地方の如何にして一帝の治下に歸し

基督教宣傳の史的見解

漸く法律風俗言語の紐帶を以て統一されしかは本書第三章既に之を説けり。好んで世俗的教主の出顯を期待せしパレスタインの猶太族は神の豫言者を遇する冷かに爲に何等希伯來福音書を公行せんとも否保持せんとも爲さざりしにぞ、基督一生の權威ある歴史はエルサレムを距る稍遠き希臘の語に記述され信徒の數非常に増加して後に成れり。而して其記史の一び羅甸語に翻譯さるゝや羅馬天下の蒼生に讀まれ其僅に至らざりし限は叙利亞埃及の田夫なりしも之が爲には後來特殊の譯經ありて出で可き。帝國が行軍の爲に開きし孔道はダマスカスよりコリンスに伊太利より西班牙不列顛の邊陲に基督教宣教師の爲に來往の便を借し他國にて外來教の受けし如き阻障反抗を受けず。デオクレチアン、コンスタンチン皇帝以前基督教の宣傳帝國の各州各市に波及せしは信す可き據所あり。但諸教會の建創歸依者の數歸依者と不信者との比較の明確ならざるのみ。亞細亞希臘に埃及に伊太利に西方に基督名の増加に就きて予輩の知る如き不完全なる事情は兎に角茲に羅馬帝國の邊陲に於ける實在若しくは推想の

諸事を列記せむ。

東方の宣

ユフラテス河よりイオニア海に抵る豊沃の地方は使徒の熱心徹底の舞臺にて、其沃土に蒔きし福音の種子は其徒弟によりて能く栽培され、最初二世紀の間に早くも多数の教徒の團體を見しが、叙利亞にて最古且著名なる結社はダマスクス、ベレア則アレppo及アンチオクのそれにて、黙示記の豫言的序詞はエフェソス、スミルナ、ベルガムス、チーアチラ、サルヂス、ラオヂケア、フィラブルフィアの七教會の名を不朽に傳へ、その移植宣傳は國中に瀰蔓し、キプロス、クレタの海島、スレーイス、マセドニアの山地は早く新宗教に歸し、コリンス、スパルタ、雅典の名城には夙に基督教共和制興り、希臘亞細亞諸教會の古史はその進歩増加に若干の歳月を要せしものから、諸斯土派其他異端の運動すら正教會の繁榮を證す。且斯る内部の證據の外、異教徒の告白愁訴等亦傍證に値するあり。人間を研究し、最明快にその習風を描きし哲學者ルキアヌスの著書は、コムモツス帝の世、其故山ポントスにはキリヤ派と基督派の充滿せるを記し、基督の滅後八十年、プリニウスは根絶

クアンチオの教會

し難き不幸を愁訟し、トラジアン帝に上りし書に、神廟は殆ど荒廢し、犧牲は購者なく、迷信は唯に都城のみならずポントス、ピチニアの村落荒野にまで浸潤流行せりと奏せり。

東方に於ける基督教の進歩を記述愁訟せる此等記者の言文旨意は暫く措く不幸にもその州裏に於ける信徒の数を推記せるもの皆無なり。唯幸に一道の微光を此幽晦にして興味ある題目に投ずるは、テオドシウス帝の世、基督教が帝の眷遇に浴する六十年に餘りて有名なるアンチオクの古教會は十萬の信者を擁し、その三千は公供に生活せりといふ一傳なり。東方の女王たる雄麗壯大、ケザレア、セレウキア、アレキサンドリアの戸口滋殖、ジュチヌス長帝の世アンチオキアの震災に二十五萬の死者ありしは、其民口の五十萬を下らざりしを證す可ければ、熱誠宣傳し得し基督教徒の数は此大都の民口の五分の一に過ぎざりしを知らむ。若し夫捷勢に乗ぜる教會と迫害されし教會、東方と西方、昌榮の都城と邊陲の村落、始より基督教の名號を受けし地と遅れて其教に歸依せし國とを比較せば、其差や如何。然れ

ども此典據たるクリソストムがまた教徒の數は猶太教異教徒より多しといへるを看過し得ず。此支吾は如何。蓋し雄辯なる此説者の言はアンチオクの官邊と教界との比較則洗禮によりて天を得し基督教徒の數目と公共の自由を分ち得る市民の數目とを分ちしなり。奴隸外人幼兒は前者の數に算す可く、後者の數目より省かれしに囚らん。

アレキサンドリアは商業の盛にしてパレスティンに近きたため容易く新教の宣傳を見き。そのまづ歸依せしはモゼスの儀禮を尊重せし猶太族の一派、マレオチス湖畔のエッセニ則テラペウテの大部分なり。エッセニ派の嚴肅なる生活斷食、破門、資財共有、無妻主義、殉道の熱誠純潔ならねど熱烈なる信仰は既に原始的訓練の活模範を示せり。基督教の神學が整齊なる學術的形式を得しはアレキサンドリアの學校に始まり、ハドリアン皇帝の埃及に幸せし時猶太希臘人の組織せし教會は此研究的皇帝の注意留心する所たりき。而も基督教の宣傳は外國の一殖民地たる此城市の外に出でず、第二世紀の末に至るまでデメトリウスの宗祖は尙埃及教會の唯一高僧

埃及の教會

なりしが、デメトリウスは手づから三卑沙を定め、其繼嗣ヘラクラスは其數を増して二十員と爲せり。但不撓反撥の埃及人は新教を視る冷淡に、オリゲンの時にすら郷國の聖獸の爲に舊俗を棄つる埃及人はあらざりしに、基督教の天下と爲るや、國人大勢に逆行し得ずして國中の諸市に卑沙充ちテバイスの曠野に隱棲の道士群れり。

羅馬の教會

羅馬は流石に帝國の首都、外人州民の出入絶へず。奇なる者、醜なる者、罪ある者、嫌疑ある者も、大都の隅に法令の影に隠れ得れば、眞實に論なく各派の教師、徳否を問はず、諸宗の創主は、孰も歸信依倚の徒を得難からず。ネロ皇帝の偶發的迫害の日、羅馬の基督教徒はクシタスに據れば、若干の大眾に達せしといふも、此大史家の言はリキウスがパッコス(酒神祭式)の流傳と禁遏を記したる筆法に似たり。パッコス宗が議院の嚴肅を驚かし、とき他の人民とはいへ、幾多の大眾此禁制の不可思議宗に歸せしを曰ひしも、よく調査せしに七千に過ぎず。蓋し犯禁觸法の徒としては七千も驚くに足らんか。クシタスの史筆も亦定制の神祇崇拜に背く狂妄の教徒をブリニが鋪張

せしと同策なりと視て大過なけむ。羅馬教會の帝國第一最多の宗會たるは言を須ひず。第三世紀の中葉三十八年の和平の後、羅馬の編流は一卑涉、四十六不勒斯彼得七執事若干の副執事四十二從師、五十讀師、祈禱者、關尹より成り、信徒に喜捨に養はるゝ寡婦、幼兒、貧困の徒は千五百を算す。アンチオクの例を以て推せば羅馬の教徒は約五萬ならむ。帝都の人口精數を知り難きも、最穩當の推定百萬を下らずと爲さば、教徒は多くも全府人口の二十の一を出でず。

亞非利加及西方諸州の宣傳

西方諸州は羅馬の言語情緒風習を傳承せしと同一源より基督教の智識をも傳承し、亞非利加ガリアともに漸く帝都にならひしが此等羅甸諸州は羅馬宣教師を聘するに利便あるに拘はらず、其海を超え嶺を度ると雖く、兩アントニー皇帝以前に信迎並に迫害の事蹟を存せず。ガリアの寒天に福音の進歩遅かりしは亞非利加の暑地に歸信の熱烈なりしに肖す。亞非利加の教徒は、原始的教會の主要なる一を組織し、小城僻邑にも卑涉を任じて宗團教社の面目を増し、第三世紀中にはテルツリアヌスの熱誠に鼓舞

され、キブリアンの技倆に指導され、ラクタンチウスの雄辯を以て飾られしが、一び眼を轉じてガリアの光景を見れば、マルクス・アントニヌス皇帝の世に里昂、辛ナの小弱なる連合教團あり、世降りてデキウス帝の時に及びても、アレクサンドル、ボナ、ツール、リス、リモジ、クレルモン、ツール、パリ等の數城に僅少の教徒を擁せる教會散在せし而已。沈黙は崇敬に適するも熱誠に適せず、ケルト語を羅甸語に代へし此等諸州の基督教は振はず、始の三世紀間教界遂に一人の文筆なし。アルプス以内の諸國よりは學術權勢の秀優なるガリアより西班牙不列顛の邊地を照らす福音の光微に、テルツリアヌスの激語を信すれば、其セエルス皇帝に告白を奏せし時、此地方の民既に信の曙光を認めたりしも、西歐諸教會の由來に就きて記録の闕如せる若しその草創の狀を説かんと欲せば、後世の編流が僧院の奥深く迷信の筆を執りし傳奇綺説を以て上世の暗黙を補綴せざるを得ず。其傳説中稍記するに足るは唯一の聖ジームス使徒傳のみ。身をゲネサレス湖畔の漁夫に起して勇猛の武夫と爲り、西班牙騎衆を將てムーアと奮戦したる其偉蹟は嚴正

の史家も亦記す所、コムポステラの不可思議の龍宗教審司の畏怖と武人の
劍戟とは評論の障害を排するの力ありき。

基督教の進歩は羅馬帝國の版圖に限られず、豫言を以て事實を示す原始
的師父に據れば天神の祖師基督の滅後百年を出でずして既に世界の各方
面に流傳せりと爲す。殉道者ジュステン曰へり、「希臘と外人とに論なく言
語習俗の異殊を問はず、技藝農耕を解せざるも、帳幕に住すると蓋車を驅る
との別なく、十字架上の耶穌の名を以て在天の父萬物の創主に祈禱を捧げ
ざる者一人もあらず」と。然れども此雄大なる誇言は現時にも人間の實
情に適せず況や當時にては唯是所信と希望とを混用せし敬虔なれど不用
意なる記者の放言に過ぎず。諸師父の所信と希望とは史實を變動する能
はず。後來羅馬帝國に代りレスキチア日耳曼の狄種は多神教の暗黒裏に
掩はれたり否、イベリアアルメニアエチオピアの宣教傳法すら正教の皇帝
位を得るまでは毫も功を奏せざりしは事實なり。カレドニアの狄族萊因
禿納ユフラテス河上の民族間には正教皇帝以前交戰通商の爲に稍福音の

一端片影を傳へ、ユフラテス河内にてはエデッサ信仰の中心と爲り、基督教の
教義は此地よりアルタサーキザス家の領有せし希臘叙利亞の諸城市に流
傳せしも、聖師の訓練努力能く希臘羅馬の神話以上に教義を確立し得たる
波斯人の心裏には基督教は何等の深き印象を與へざりき。

以上は基督教進歩の不完全ながら公平なる觀察にして、之によりて新歸
依者の數は一面には畏怖のため他面には崇敬によりて鋪張誇説されしと
見る可く、オリゲンの公平なる説に據れば信教者の數は不信の衆に比すれ
ば殆んど較ぶるに足らず。但精細の記述なければ原始的基督教徒の實數
は算定するに由なく推定すること難し。アンチオク羅馬の例によりて推
測するも帝國臣民の二十分の一を超ゆることなかりけむ。然れども其信
仰熱心結合の習俗は其數を増す可く見え、未來の増加に資せし諸因はその
實力を一層顯然に一層恐る可きものたらしめき。
富貴名譽智識は少く卑賤無智貧困多きは人世の常態なれば、全人類に開
放されし基督教の歸依者にも上流よりも下流の多きは自然なり。たゞ此

無邪なる自然の事情も、敵の之を指搦するよりも辯護者も強て拒む能はざる一種厭ふ可き風聞を生じ、則ち基督教は殆ど人間の滓糟を會し、田夫工人婦幼乞丐奴隸のみといへり。但奴隸は時として却つて其隷屬せる富貴の門家に宣傳の便宜ありき。斯る卑賤の教師は公には沈黙せるも私には僥舌獨斷にて哲學者を危険視して避け無智の徒と交り、年齒、性及教育の最、迷信的畏怖の感銘を受け易き者を教化し得たり。

卑賤なる
最初の基
督教徒

然れども此不祥なる光景も亦暗色畸形以て敵の彩筆に背ける點あり。基督教の教世に弘まるや、生地運命ともに秀でし若干の人士も之に投じき。ハドリアン皇帝に巧妙の譬諭を上りしアリスチデスは雅典の哲學者なり、殉道者ジュスチンは老翁、否天使によりて猶太豫言者の學に入る前ゼノ、アリストトル、ピサゴラス、プラトの諸流の神教智識を討ねし人なり、アレキサンドリアのクレメンヌスは希臘學者、テルツリアヌスは羅甸の學者なり、ジュリウス・アフリカヌスとオリゲンとは共に當代の學に通曉し、キプリアンとラクタンチウスとは文辭異なるものから孰も修辭の教師たり。後には哲學す

ら基督教中に入りしが、其結果は必ずしも有益有利ならず。蓋し智識は、崇神の因たり又異端の漸たり。アルテモンの部下に用ひし文字はまた直に教徒の後嗣を評するに足る。曰く「彼曹は聖經を變じ古信仰を棄て論理によりて自家の説を作らんとす。幾何を學びて教會を蔑にし、地を測りて天を觀ず。手裡常にユクリドを持ち、アリストトル、テオフラテスを推賞しガレンを尊崇す。迷誤は異端の技學を濫用するに起り、人間理性の進歩によりて福音の簡朴を腐敗せしむ」と。

生地運命の利と基督教とは常に背離せりと爲すも實ならず。若干の羅馬府民はプリニーの判庭に引かれ、プリニーはピチニア人の諸階級が宗祖の宗教に背きしを見たり。亞非利加州牧の畏怖と人情とにより、若し酷虐を敢てせばカルセーヂの民十の一を罪せざるを得ず、己と同列の若干の士流、議官、貴種の婦人、親友、その姻親故舊を罪せざるを得ずと言ひし明確の證言はテルツリアンの放言よりも信す可し。而して此證言は、プレリアン皇帝の宣旨に議官、騎衆、貴婦人の基督教派に關係あるを疑ひしを四十年後に

證したり。斯くて教會は内本來の純潔を失へど外壯麗を加へ來り、チオク
レチアン帝の世には宮殿法廷軍營の裡にも幾多の基督教徒潛みて、現世の
榮利と未來の利福とを調和せんと努力したり。

されど最初の新歸依者が端なく蒙りし基督教徒の卑賤無智の風聞を全
く拂ひ得し者の數は甚だ少く事は後年に屬す。予輩は後代の綺言を以て
自辯護せんよりは寧此誹謗を以て訓誡と爲すを賢しとせむ。誠に天意に
撰まれし諸使徒はガリレアの漁夫なり、最初の基督教徒の世間的地位愈卑
しくして其勳績愈高きを知る可し。天國は貧しき者に約され、惱める者凌
がれし者にしてよく楽しんで未來の幸福の神約に耳を傾けしも、富貴の輩
は現世の幸福に甘んじ、智識の徒は理智を以て疑争の具と爲したりき。

斯くて予輩は最天來の賚賜に適すと見る若干の人傑の失を此見地よ
り見て慰めざるを得ず。セネカ長少兩ブリニー、タシタス、ブルタルク、ガレ
ン、奴隸エピクテツス、皇帝マルクアントニーの盛名は皆當世を粉飾し、人性
の權威を高め、活動に靜生に各光榮を表し、學問を以て智識を磨き、哲學を

名士の基
督教嫌忌

以て世俗迷信の外に超越し、真理の追究盛徳の實踐を以て生を送りしが、驚
く可きかな、此諸賢は皆基督教組織の完全を拒否し、若しくは見誤り、其言と
不言と共に羅馬帝國に流布弘通し來れる勃興の教派を蔑視し、言或は基督
教徒に及びし者も唯以て不可思議の教義に盲従し、學者の注意留心に價す
る一論議をも敢てし得ざる頑迷固陋狂熱の徒と爲したりき。

此諸賢が原始的基督教徒の自己のため宗教のため屢公にせし告白を
讀みしやは頗疑はしきも、更に惜しむ可きは基督教徒の爲に一層巧妙な
る辯護者を得ざりし事とす。教法辯護者は多神教の不稽を暴露するに機
智と雄辯とを用ひたり。虐遇されし教友の無辜と苦痛とを明示する、頗
人心を動かしたり。然れども一び基督教の神的來由を説くに及びては、救
世主出顯に伴ふ不可思議よりも寧ろ出顯の豫言に重きを置きしかば、此豫
言の權威を認めその感念と完成とを遂求するに熱烈なる基督教徒を訓へ
猶太教徒を化するにこそ効あれ、モゼスの神約、豫言の辭を解せず重んぜざ
る他教民に向つては何等の威力なし。ジヌチン及其後を承けし辯護者の

拙かりしたため希伯來神官の崇高なる意義は空辭虚誇冷論と化し、その權威すらオルフェウス、ヘルメス等の未來記詩人の名を以て天來の福音と同價値と爲す敬虔なる虚欺を混じて、異教徒の疑念を牽けり。默示を擁護するに欺罔と偽辯とを用ひし詩人は、恰も不當の英雄に碎け易き耐え難き甲冑を裝はして無用の重量を加へしと同じ。

基督教の
異の蔑視

然りと雖も萬能天神の手によりて、世の理論にあらず、人の感觸に示せし大事實に對して、多神教徒哲學者の不注意無留心なりしを予輩は如何に解す可き。基督の世使徒の弟子の世其説きし教は無数の靈異を以て證されたり。跛者は歩めり、盲者は見たり、病者は癒えたり、死者は起てり、惡魔は攘はれたり、自然の法は教會の仁慈によりて屢問歇せり。然るに希臘羅馬の聖賢は此恐る可き實相を看過し、日常の學術と生活とを逐ひて世界の物心兩界に起りし異變を知らざるが如し。チベリウス皇帝の世全世界否少くとも羅馬帝國の一名州は三時間の異常の暗黒に掩はれ、人類の恠異好奇崇尊を刺戟せしも、當代の學者史家は之に留心せず。事はセネカ、長ブリ

エーの世に起れば、靈異の直接の結果を経歴して神速なる報知を得たる可きに、自然の所有大現象、地震、隕星、流星、日月蝕等集録せざるなき兩者がともに天地創造以來人間の眼もて見し最大現象を記録せず。プリニーの一章は異常なる長時の蝕を記せしも、唯シーザーの死後一年の大部分太陽蒼白に光なきを録せしに過ぎず。此永く記憶す可き當代の詩人史家が筆に載せしは、耶蘇苦難の異常の闇黒と比較す可くもあらぬ此晦冥の事而已。

第二章 子ロ乃至コンスタンチンの羅馬政府對基督教徒

第一節 基督教の容れられざる理由

基督教の純潔其道德の神聖初世紀間の其信教の清白嚴肅の生活を精察すれば、斯る善良の教義は假令不信者の世界にても相應の尊敬を受く可く、その道德は假令神異を嘲笑する智學の徒にも推尊さる可く、政兵の事にこそ従はざれば最柔順に法令を遵奉するその教徒は當局に迫害さる可くもあらず寧保護さる可しと想像せらるゝは當然なり。然して國民の信仰する所とはいへ天下を擧げて多神教を容認せるを思ひ哲學者の信じ難きを想ひ、羅馬議院皇帝の政策に想到するとき予輩は基督教徒が何等新なる罪を犯したるや、上世の温和恬淡の性情を何事によりて激厲せしや、泰平の治下に千百の諸宗教を平等視せる羅馬諸皇を何を以て憤怒せしめて、信仰崇拜の奇異なればとて毫も他に害なき一方法を自擇びし臣民に峻令苛法を加

帝國に於ける基督教の地位

本章の主旨たる迫害

基督教徒の迫害たる猶太

ふるに至らしめしや、殆んど理由を發見するに迷はざるを得ず。

上世の宗教政策は基督教の進歩を阻害す可く峻酷なりしと見ゆ。基督教の滅後約八十年、最愛す可き哲學的性情の一州牧の令により、寛治仁政の智と正とを以て聞へし一皇帝の法によりて、基督の無辜の徒弟は死に處せられたり。トラジャン皇帝の繼嗣に屢呈げられし上疏は、羅馬帝國臣民中自覺せし基督教徒のみ盛世の餘澤に漏れしとの愁訴に充てり。數箇著名の殉道者の死は注意して録され、基督教が全權を得し以來教會の司率は對敵たる異教徒の行爲に倣ふが如く、その殘忍を指摘せるに力めたり。傳奇誤聞中より與ふ可くんば若干の確實に興味ある事實を擇採し、最初の基督教徒が受けし迫害の原因、範圍、時間、最必要なる事例を明確に叙述せんことは本章の主旨なり。

迫害されし宗教門徒は、畏怖に失心し、怨恨に激昂し、さては熱誠に驅られて敵の旨意を冷靜に研究し公平に評論し得ること稀なり。羅馬皇帝の原始的基督教徒に對する處置は寧ろ多神教の方面より明白に見るを得可

第一節 基督教の容れられざる理由

し。既に説きしが如く當時世界教界の協和は主として各宗派相互に他の傳説儀禮を黙認尊重するによりて維持され従つて獨人間の交誼を避忌し自神智を誇りて他の教義禮典を卑しめて不神聖と爲す宗派民族あらんか他の諸宗派の連合して之を頻斥せんは當然のみ。寛容の權は相互の交誼にて保たれ慣行の貢賦を拒みて失はるゝも亦自然のみ。然るに此貢賦を拒みしは猶太族然り獨り猶太族のみなりしかば羅馬官吏より其蒙りし待遇は事實によりて此研究を證明す可く且基督教徒迫害の眞因を發見するの端緒を解く可し。

羅馬の諸帝諸守がジエルサレムの神廟を尊崇せし狀は既に述べたれば復贅せず神廟聖城の破毀は征服者の心を激成するに足る各種の事情より起り政治的公平公共的安寧の最明白なる理由を宗教的刑罰に能ふるより説き起さむ。ネロ皇帝よりアントニヌス・ピウス帝に至る間猶太人の羅馬の統治を甘受せず猛烈の虐殺動亂となりしこと一再ならず。埃及にキプルスにキレネに其敢てせし慘忍を説かば人情は震蕩せむ。其重惡輕佻の

猶太族の動亂的精神

猶太教の平時に於ける認容

迷信は單に羅馬政府の敵ならず實に人類の仇たるものから此狂妄の徒に對して武力を用ひし峻烈なる懲罰は予輩稱賛を禁する能はず。蓋し猶太族の狂熱を煽りしは偶像崇拜の君主に貢賦を納むる法なしと爲す説、征服的救世主義に出顯してその淫格を破棄し天の寵民に地上の帝國を援けんと古豫言より起りし自負なり。有名なるバルチ・チェバスが大兵を集めて二年間ハドリアン皇帝に抗敵せしは、自久しく期待されし教主と號してアブラハムの子孫を煽搖せしに因れり。

然れども動亂屢起れど裁定の後には羅馬皇帝の疾視直に失せ其畏怖亦亂時に止まりき。多神教の一般的忍容とアントニヌス・ピウス帝の仁慈とによりて猶太族は舊特權を復し再び兒孫に割禮を施すの許可を得唯外來の信者に此希伯來族特殊の式を加へ得ざるの禁のみ。ジエルサレムの聖域よりこそ遠けられたれ猶太族は伊太利及諸州に散居安處して羅馬人の自由を得地方的名譽を得て而も社會上煩冗失費の公職より免るゝを得しのみかは羅馬人の温和によるかはた輕侮に出でしかその宗教的警察權を行

祖先の教を
奉ぜざる猶
と反抗する
と基とる猶
別徒るに太

ふを許され、チベリアスに厩錫せし大教正は副宰使徒を任じ教内の裁判を行ひ四方の信徒より喜捨を受くるを許されき、帝國の諸名城に新教會は起り、安息日齋日式日はモゼスの遺法とラビスの所制とに論なく公然嚴肅に施行されき、斯る温和なる待遇は漸く猶太族の峻厲なる性情を和げ豫言征服の夢より覺めし猶太族は平和なる生産的臣民と化し、その解け難き人類に對する憎惡は流血殘虐の暴行より轉じて安全なる方面に向ひ商業にて偶像教徒を征服するの機會を握取し、
驕傲なるエドム王國に秘密曖昧の咒咀を
宣するに至れり。

一、エドムとは猶太族の羅馬帝國を稱する語なり。

猶太族は、其君王及同列の臣民が崇敬する諸神祇を憎めど、なほ其非社交的宗教の自由なる執行を得たれば、アブラハムの後裔が免れし峻酷を、獨基督の徒が蒙りしには別に理由なかる可からず。兩者の區別は簡明なりしも、當世の人情には最必要なりき。猶太族は一國民なり、基督教徒は一宗派なり、當世の各宗各族の相互に教法を尊重するや、宗祖の遺教を固執せざ

るを得ず。神宣の聲、哲學の教法、令の權は一齊に此國民的義務を督勵せり。猶太族は優越の神聖を自負して多神教徒を嫌忌す可き不淨の民と觀るを得、他民族との隣交を卑しめて其輕侮を招き得、モゼスの教法は久しく一大社會に傳受されしかば、其徒が之に従ふは人間の常例を逸せず、その怠れば罪惡なりとする所を實行するの權利は天下の等しく認むる所なりき。然れども猶太教會を保護せし此主義は原始的基督教會には何等の裨益を與へず。福音の信仰に歸する基督教徒は不自然不可許の罪を犯せしものと目さる。此教徒は習俗教育の神聖なる紐帯を解き、郷國の宗教制度を破り、宗祖の眞實神聖と信せしものを輕侮せる而已ならず、此語を用ひ得可くば、此背教の輩は部分的地方的ならず、埃及叙利亞の神廟より背きし徒は雅典カルセーヂの神廟に入るを忌み、其家門故郷祖國の迷信を卑しむと、ともに一齊に羅馬の帝國の否、人間の神祇を擯斥せり。壓服されし信徒は良心私判の移し難き權利を確守するを得ず。其地位や憐む可きも、其論議や決して異端世界の哲學社會信仰社會の良解する所と爲らず。故國一定

基督教徒の無一結社

の信仰に疑を容るゝは其風俗衣冠言語を急變するに劣らざる惟事と目されき。

異教徒の恠訝は忽ち憤恚と爲り、最敬虔の徒も不敬なりとの不公平且危険の風評を得たり。帝國の宗教組織に、最大膽なる攻撃を加へ官吏の峻法に觸れし基督教徒は無神教の一結社と罵られたり。その其徒は多神教の諸派によりて全世界の各處に行はるゝ諸迷信より分離し、之を宣言するを誇り、而も之に代ふるに何の神祇何の禮法を以てせず。蓋し其無上至神に對する純潔崇高の思想は何等具體的神像可見的象徴祭禮式典祭壇犧牲等を用ひず。是心靈上唯一神を認め得ざる異教徒の理解する所ならず。所謂第一原の存在と賦稟の考案とに心力を用ひし希臘羅馬の諸賢は此哲學的熱誠の特權を理論と自負とによりて自家及其門徒にのみ歸し、人間の理解を以て眞實の旗と爲さずしてただ人生本來の溢漲するものと爲し、感觸の援助を假らざる信仰の方法は幻想の動搖妄想の迷觸を拘制し得ずと爲せり。従つて智學の徒も基督教の默示を一見して其崇敬し得し神性的

基督教崇の不可解

統一の主義は神教徒の熱誠に汚され空想に滅ぼさるゝと速断せしに過ぎず。ルキアヌスのなりといふ有名の一論文の著者は三位一體を嘲侮して人間理智の薄弱と天神の靈性とを解し得ざりき。

基督教の祖師が其教徒によりて聖者豫言者として尊ばるゝのみならず神とし拜されし事は多神教徒の恠しまざる所なり。多神教徒は假令少しにても國民的神話に肖似せるものを採らんとすれば、神子が人間の形貌を具して出現せしはバックス、ヘラクレス、エスキラピウス等を例と爲せばなり。唯其驚きは基督教徒が草葬の世に出で、技術を覺へ法令を制し地上を荒らし、虐主怪物を除きし此等古英雄の神廟を棄て、輓近蠻民の間に降生し國民の憤怒若しくば羅馬政府の憎惡の爲に犠牲と爲りし一無名の説教者を宗教的崇拜の唯一目的と爲せし一事なり。それは世間的利益に而已感謝を表する異教徒の群衆はナザレの耶穌が人間に與へし生命と不滅の無上價の賚賜とを承け得ざるに由る。酷虐に遭ひて確守せし基督の温厚其世界的仁慈其行動性情の偉大なる簡朴を以て此等肉慾的群衆は名譽帝國

第一節 基督教の容れられざる理由

鞏固なる
結黨の
敵は國策の

成功の必要に酬ふるに足らずと爲し、闇黒墓穴の力に捷らし驚く可き捷利を認めず、神降の基督教徒の不確なる降誕、彷彿的生涯、不名譽の死を嘲笑諷謗したりき。

基督教徒が國教よりも私人の感念を重しとするより生ぜざる個人的犯罪は、集合團結によりて益重り行けり。臣民間に結黨盟社を組織するは、由來羅馬政策上最疾惡するところにて、無害なる否有益なる目的の私黨衆團と雖も之を許可するに極めて稀なるは既に述べしが如く顯著の事實なり。

然るに基督教の集團は公共の禮拜と絶ちて無邪思とは見え難く、主義に於て不法に其結果或は危険を醸す可く、社會公安の爲に斯る秘密の特に夜間の集會の禁遏を以て諸帝は自不法なりと認めず。教徒の敬虔なる不屈はその行爲志望に益々危険有害の觀を加へ、號令の實施に名譽を繋けて容易に屈從せば寛典を吝しまざる諸帝も、公然官憲に敢抗する頑強の精神を屈服さすためには峻苛の刑罰を用うるに至れり。況や此精神的隱謀は日々範圍を擴大するをや。既に説ける如く、基督教徒の活躍なる奏功的熱誠

秘密は疑の本

は帝國の各州各城市に宣傳流布するをや。新歸依者は到る處他族他派と異りたる一特殊社會に投合せんため家族を捨て郷土を捨て、その闇憚深酷の容貌その生活の公事公樂の嫌忌、その將來の災禍の豫智は異教徒を恐怖せしめたり。プリニーは曰へり、「教徒行動の主旨は何たるを問はず、その不撓不屈の頑守は刑罰に値せり」と。

基督教の徒弟が教法施行の用意は、始は畏怖と必要とより起り、後には自好んで之を承繼し、エレウシス異法に用ひし秘密を擬し、由つて以て神聖なる教法を異教世界の眼に更に尊崇せしむ。

~~~~~

古昔アッチカのエレウシスにてデメテル、可しと自信せしが、狡獪なる政策の間遭

~~~~~

則、ケレス神の爲に行ひし秘密の神事。

遇する如く、事の結果は豫期に背反せり。世人は以て公開しては恥づ可き事を秘密に行ふと見做せり。誤りたる基督教徒は人間の極重惡徒にて闇黒の隱處に想像にだも及ばざる惡事を行ひ、所有道徳に叛ける犠牲を以て世に知れざる其神に詔ぶとの恐る可き風評を世の憎惡者に捏造せしめ、輕佻者に信ぜしむる機會を與へき。則此憎む可き結社の秘密儀式なりとて

教徒の辯
解と有司
の推斷と
の差異と

語る所は、新に生れし嬰兒を粉に塗らし入教式の不思議の徴象として新歸
 依者に供し、新歸依者は知らずして此無辜の犠牲に秘密致死の傷痕を蒙ら
 しめ、虐忍の式終るや宗徒は其鮮血を嘔りて震怖する會衆と互犯の罪を共
 にし、永劫の秘密を締し此無道の犠牲に踵ぐに飲宴を以てし、瀟沈獸慾を鼓
 舞し、懲熾なるを待ちて俄然燈火を滅して羞恥を掩ひ人性を忘る」と。
 然れども古の告白を精讀すれば公平なる教敵の心裏よりも些末の疑惑
 をも排し得可し。基督教徒は無邪思の證明を以て風説の聲裡に官憲の公
 平に訴へ、若し斯る罪惡に就きて何等かの證據あらば酷刑重罰に當りなん
 と、刑罰を激し證據を挑み、斯る事實は當に絶無なるのみかまた有り難き事
 に屬す、神聖純潔なる福音教條によりて最公明なる俗世の快樂をすら厭斥
 せる者の豈斯る亂離廢倫を敢てせんや、一大結社の中豈會衆各恥ぢざらん
 や、男女老幼死を恐れ名を重んずる諸人の如何ぞ人性と教育との深く心裡
 に印せる教法を犯すことあらんやと辯ぜり。蓋し宗教の同一路を岐れし
 告白者の教會部内の教敵に對して深酷なる憎惡を逞しうするにあらざり

羅馬諸帝
對基督
教徒の
態度

せば何事か斯る公道正理を破り得ん。誤りて正教信者に歸せし、斯慘血の
 犠牲願唐の儀式は、異路邪徑に迷ひながらなほ基督教徒の感念を鼓吹し、教
 條を奉ずる諸斯士派のマルクス、カルポクラテス其他諸派中に實に行はれ
 しとの説、或は輕く行はれ或は確に傳へられ、教會より分離せし背教者はま
 た教會中に此事ありと揚言し、要するに基督教徒と稱する者の多數中には
 最卑しむ可き醜風陋俗存せりと爲せば、正教の信仰と異端の邪徒とを分つ
 殆ど認め難き分界綫を識別し得ざる異教の官僚が是を以て相擠排して互
 に其醜を露擄するものとなし、は惟しむに足らず。而も官僚が常に教事
 に干渉するよりも温和の解釋を爲して、公認の教法より分離せる宗徒も職
 業には眞摯に習俗は潔白に、唯迷信教熱の餘法に觸れ罪を犯すと見しは、原
 始的基督教徒の名聞の爲に幸ひなりき。
 過去の往蹟を未來の戒鑑と爲す歴史にして、虐主に左祖し刑罰を正しと
 せば、その榮位を辱めん。然れども原始的教會に薄かりし諸帝の行爲は決
 して徒に臣民の教説に對して武を用うる近世諸君主の如く罪す可きにあ

らず。一チアーレス五世、一路易十四世はその思想より感情より自覺の權能信仰の義務過誤の無辜に就きて正當の知識を抱く可きも、古羅馬の皇帝吏僚は信仰に於て基督教徒の不撓の頑守を煽搖せし主義を知らず。その胸裡に教徒が國の法令憲制を輕しと爲し、旨意を發見し得ず。罪を和め得る道理は罰を輕うし得ると同じ。皇帝吏僚は迷妄固執にあらず、執行政を旨とすれば、基督の卑賤の教徒が法を犯し、に對しては輕侮執法を寬うし、仁慈處刑を緩めしこと屢々にして、其性格と主旨とにより、予輩は四端の推定を爲し得。一、新教徒が政府の視聽を牽きしは稍久しき後に屬し、二、此奇異なる罪を犯して、臣民の處刑は細心愼慮に出で、三、其刑罰を用うる頗寛に、四、迫害されし教會もなほ多く和平安靜を樂しみ得たりしを知る。異教徒の記述の最繁最細なるすら殆ど基督教徒の事に及べるなきに似ず、なほ予は以上四端を推斷するに確乎たる證據を有し得たり。

第二節 未重大視されざりし基督教

當初基督教徒の猶太派として閑却さる

一。天神の靈約により教會の尙未幼なるや不可思議の帷幕に掩はれて、基督教徒の信仰既に成育し其衆數稍多きに及ぶまで、異教世界の憎惡より擁護されき、否殆んど異教世界に知られざりき。モゼス教法を廢却するに徐なりしは最初の福音教歸依者の安全なる被衣なりき。歸依者は多くアブラハムの遺族後種なりしものから割禮を受け、ジェルサレムの新廟に詣ぶると異ならず、以て神教及豫言者を天神の冥示と爲すに至りしかば、異教徒にして之に歸する者も亦猶太族の習俗の間に隠れ雜はり、多神教徒は主として外形に顯はれし禮拜を認めて信仰の教條を多く問はざるものから將來の偉大と大志とを韜晦せし新教は羅馬帝國の有名なる一古民族、則、猶太族に對する一般の寛容の下に潛伏し得たり。唯猶太族の教事に熱烈なる未だ幾ならずしてナザレ派の同胞が猶太教會より漸く分離し行くを認め、て此危險なる異端を撲滅したらんと欲せしも、天なる哉、其憎惡は力を失へり、猶太族既に刑律を行ふ實權なく、その熱烈の憤恨も羅馬人の冷靜を動かし得ず、地方の守吏は苟くも公安を紊亂すとの訟案は直に聽きけんも案

第二節 未重大視されざりし基督教

事實にあらすして唯猶太の教法豫言の解釋に關する争説に屬すれば斯る東夷迷信の疑義は羅馬官憲の論議する價値なしとして耳を借さず。官憲の無智と輕侮とは端なくも當初の基督教徒を擁護し、吏僚の異教徒たりしは却つて猶太教會の忿怒より基督教徒を庇護したり。若妄に夫の荒唐不稽の古傳説を採らば十二使徒の遠遊奇蹟示寂を語り得んも、精研熟考すれば目前基督の奇蹟を睹し此徒がパレスティン境外に自血を流してその眞理を傳へしやは頗る疑なき能はず。人性の常徑より推せば猶太族の亂を起してジェルサレムの破壊されし前既に使徒の多くは示寂せしと爲すと眞に近し。

アレキサンドリアのテルツリアン、クレメンス時代にも、殉道の榮譽を荷ひしは聖彼得、聖保羅、聖ジエームスの三使徒に過ぎず、其餘の使徒の異蹟奇聞は更に後世の希臘人の構説に出たり。

基督の死後、此亂前苟くも羅馬人の發怒不忍を認む可きは唯死後三十五年亂前二年にネロ皇帝が帝都の基督教徒を處罰せし突發的一時的の慘禍ありし而已。此慘禍を傳へし哲學的史家の信頼す可きは最注意して考案す可き價値を予輩に保證せり。

1、タシタス。

ネロ皇帝の御宇十年帝國の首都に前代未聞の大火あり。希臘の技術羅馬の智徳になりし記念、フエニ、ガリア征役の戦利、神聖なる廟堂莊麗なる宮殿は均しく皆祝融の怒に觸れ、都城の十四區中七區は哀む可き殘灰荒墟と化し、三區は空地と變じ、免れ得しは僅に四區のみ。災後の救済に百万盡瘁を吝まざりし政府は皇帝の園囿を開放して罹災者を收め、臨時の造營を起して避難者を容れ、穀糧物資を低廉に供給す可き令を發し、さては市區の整齊私屋の建築に就きての布告は最寛大なる政策を證し、時盛世に際會せることとて、回祿の後數年を出でずして舊に比して更に整頓せる更に莊麗なる新羅馬を見るに至れり。唯不幸にしてネロ皇帝が此災厄に處せし細心仁恕も民間の私疑を氷解する能はず。妃と母とを殺したために衆惡一身に集まり、劇場に尊嚴を損ぜしより異常の愚惡を歸嫁され、皇帝こそ自帝都に火を縱ちたれとの巷説生ぜるや、最信じ難き譚柄も激越せる人耳には容易くて、ネロは都門炎上を觀、琴を撫して、古のトロイの燒失の曲を歌ひて樂めりといふ説深く信じられつ、專制の力も民衆の疑を解くに由なきものか

犯罪の轉
嫁による
基督教徒
の殺害

第二章 ネロ乃至コンスタンチンの羅馬政府對基督教徒

九〇

ら帝は遂に罪を他に嫁するに決せり。(タシタス曰く)「帝は此見を以て俗に基督教徒と稱せられて既に不名譽の烙印を受けし輩を峻刑に處したり。此輩は昔チペリウス皇帝の世州守ボン



后タスウフと帝ンチンタスノ

るに至り、事發して追捕就縛するや、教徒の數甚多きを知れり。而も其處刑は帝都に放火せしといふよりは寧ろ人類を敵視せしに坐し、其拷掠は輕

チウ スピ レト の偽に處刑されし基督より其起源と名稱とを得たり。この極惡の迷信は一時滅絶せしが、後再燃し、唯に其初發の地猶太に流行せしのみならず、能く世間の不淨下純を併せ容るゝ帝都羅馬にさへ行はる

此誅殺に
關するタ
シタス記
事の辨明

第二節 未重大視されざりし基督教

九一

侮嘲罵によりて更に苦痛を加へ、或は十字架上に磔殺され、或は野獸の皮に裹まれて猛傲の餌と爲り、或は燃燒物を身體に塗抹されて闇夜を照らす松明に代へられたり。ネロの宮園は競馬とともに此悲む可き觀物の場と爲り、帝は親驅車手の衣扮を爲して之に臨めり。基督教徒の罪は洵に最峻の刑に該れりと雖も、その國安の爲に誅せられずして、虐主の殘虐に死せしよりに之に對する公衆の嫉視は、忽憐哀に變ぜり。耽奇の眼を以て人世の推移を觀察する徒は嘗て初期基督教徒の鮮血を濺ぎしネロ皇帝の園園戲場は今や當時迫害されし宗教の捷利と濫用とによりて更に著名なるゾチカソ法王宮と化せるを看む。羅馬カピトルの古の光榮を壓倒す可き殿堂の其處に建てるは、ガリレイの卑しき漁者より遍天下の領有權を繼承して皇帝の尊位に代り、羅馬を征服せし狄蠻に法令を與へ、バルト海上より大西洋岸まで靈界の裁斷權を掌握せる基督教徒の増營せる所なり。然れども予輩はなほネロ帝の教徒處刑の記傳に就きて其纏絆せる錯綜を解き、爾後の教會史の上に若干の光明を照らさざる可からず。

一、最懷疑的の評論家も此異常事件の眞實とタシタス史文の公明とを推重せざるを得ず。ネロ皇帝が有罪の新迷信に歸依せる基督教徒を處罰せし光景はスエトニウスの精細の記述によりて明確なり。上世の諸記録に據るも、タシタス史文の模倣なき辭句によるも、宗教的虚偽の撰入なきに據るも、他の人類よりも何等の妙不可思議の力を有せるを説かずして初期の基督教徒を重悪罪に擬せる點よりも、此史文の公明は證せられたり。二、タシタスは帝都回録の前數年に生れしかば、幼時の此事變は唯讀書言説によりて記述し得。自才の熟するを待ちて初て世に出で永く後人を訓感せし其アグリコラ傳の初作は齡四旬以上に及びて成れり。此アグリコラ傳日耳曼志に史才を試みて後更に大作に志して成せしところ、即ネロ皇帝の滅亡よりネルヴ皇帝の即位に至る三十卷の羅馬史なり。その老來職を得しはネルヴ皇帝清明の治世に在りしも、述史の主材近く眼前に在れば、當今の盛徳を記すよりは前世の惡政を録するため更に榮譽ある地位なり否猜疑少き地位なりと信じたれば、オーガスタス帝後四主の史を録するに記年體に

より、八十年間の不朽の青史を集成完備して深奥なる觀察生々たる光榮を表現するに生涯の大部分を銷しき。トラジアン皇帝が羅馬の威力を舊邊境の外に耀かせる時、此史家は第二第四卷にチペリウス帝の失政を述作しつゝありて、其帝都の大火とネロ帝の基督教徒處罰とを筆に上せしは、ハドリアン皇帝就位の後に在れば、前後六十年に互りては、史家は當世の記録を材とせざるを得ずと雖も、新教派の起源進歩特性を記するに當りて此哲學者は豈ハドリアン時代の知識見解を輕んじてネロ時代のそれに重きを措かんや。三、自信じて省略して可なりと爲す間話挿説を讀者の好奇回想に委するはタシタスの常套なり。故に微弱にして無辜殆んど羅馬皇帝の輕侮にも留心にも價せざる羅馬の基督教徒がネロ皇帝の慘虐に遭ひしは、自或因由ありとせざるを得ず。當時猶太族は郷國に虐壓せられ帝都に多ければ、その皇帝と民衆との嫌疑を蒙らんは基督教徒に過ぎたり、且既に羅馬の驅扼を惡むの情露れたれば、執拗なる報復を企つるは其處なりと見得可きに、却つて宮中に有力なる辯護者を有し皇帝の心情を左右す可きあり、帝

の妃たる美人ポッペア及既に此種族の爲に辯ぜしアブラハム族の祈禱師是なり。されば之に代る犠牲なかる可からず。モゼス直統の教徒は羅馬の大火に關與せざるもその恐る可き罪に當る可きガリラアの新派の其中に起りたるは容易く認められき。蓋し同じくガリラア派の稱呼の下に風習教義互に全く相反せる兩者あり。ナザレの耶蘇の信仰に歸依せる教徒とガウロニのジダの旗を奉ずる徒とは是なり。前者は人類の友後者はその敵兩者の相似たるは白刃を踏み拷掠に屈せず所信を頑守固執する點に在り。國人を煽搖して動亂を起せしジダの徒は幾ならずしてジェルサレムの破滅と運命を共にせしが基督教徒の名によりて更に著名なる耶蘇の徒は羅馬帝國に散在せり。既に殆ど滅盡せる一派に歸すること更に公平なる可き罪と罰とを基督教徒に歸せしはタシタスが筆を執りしはハドリアン帝の世に在りし故而已。四、莫、遮此は固より臆測に過ぎず、此臆測の如何は措く、ネロ皇帝處刑の原由も後果もともに

ジェルサレムの猶太人の基督教徒の迫害

帝都の外に及ばざる、又ガリラア派、則、基督教徒の教條は毫も處刑訊鞠の因題ならざる、且教徒の迫害は殘虐不公の思想と相伴ひしものから後來の諸帝王は有徳無辜にして徒に暴主の赫怒に觸れし此新派を寛遇せんとせるは明白の事實なりき。

ジェルサレムの神廟と羅馬のカピトルが殆ど時を同くして兵燹に罹りしは稍顯著なる事實にして前者の爲に捧獻せし喜捨の征略將軍の力によりて却りて後者の莊麗を恢復し粉飾する用途に供されしも亦一奇ならずとせず。羅馬皇帝は猶太人に人頭税を課せり。その個人負擔の額は云ふに足らざるもその用途その誅求は耐え難きものなりき。酷吏はその不法の要求を猶太の血統宗教に關係なき幾多の人人に及ぼしつれば從來屢猶太教會の陰に隠れし基督教徒は今やその誅求を免るゝ能はず。而も毫末も偶像信者の冒瀆に耐へざる此徒は敢然としてカピトルのジピトルとなんよべる

聖ユドの二孫

惡魔に捧ぐ可き寄進を甘受せず。また既に頽廢しつゝなほモゼスの教法を奉ぜる基督教中幾多の異端分派は猶太教徒にあらずと辯ずるものから、羅馬の吏員は教條の差異を問はねば割禮の有無によりて判ぜられては免るゝ能はず。斯くて皇帝の裁斷に否恐らくば猶太州吏の裁廷に引かれし幾多の基督教徒に、其出自の眞に世の大帝王より尊き者二人ありき。そは實に耶蘇基督の同胞たる使徒聖猶度の兩孫なり。その血統上ダビト王の位を繼承する權あるため恐らく國民の崇敬とよもに州守の媚嫉を招きしならんも、衣帽の疎野應答の簡朴羅馬帝國の治安を攪る可き希望と力量となきを證せり。兩者は明白に、王家の後裔救世主の近親なるも、毫も世間的大望を懐かず、その熱誠に期待せるは純然たる心靈的王國なりと告白し、資財職業を審問さるゝや、勞役に耐ゆる雙手を示し、コカバ村に近く約二十四エーカー、九千ドラクマ則三百磅の農園の耕耘に衣食すと答へしかば、憐哀輕侮の下に放免されき。談はヘゲシッブスに出でたり。

執政クレメンスの

ダキド王家の落魄は虐主の嫌疑を免れしも、皇室の大は却つてドミチア

誅殺

ン皇帝の小膽を驚かしぬ。蓋し帝の小膽なる其畏れ憎み尊敬する羅馬人を誅殺して僅に自安んず。皇叔父フラギウス・サギヌスの二子中、長子は夙く異圖の嫌疑に陥りしも幼子フラギウス・クレメンスは怯懦無能にして安泰を保ち、帝は之を庇護して皇姪ドミチラを嫁し、その所生の幼子を皇儲に擬し、その父に執政職を加へしが、一年の任期满つるや、些末の口實を以て直に誅殺し、ドミチラをカムパニア沿海の孤島に謫し、連座の餘黨を或は誅殺し或は積没す。而して其罪名は無神主義と猶太風といふに在り。蓋し當世の吏僚も記者も、基督教徒の外解し得ざる理想の結社を明確完全には看破し曉得し得ざりしかば、斯る罪名を附せしにて、教會は其初期殉道者中にクレメンストドミチラとを數へて、ドミチアン皇帝の虐行に第二迫害者の汚名を印せり。然れども此所刑といひ得可くんばも久しからず。クレメンスの誅死、ドミチラの流謫後、兩三月ドミチラの信仰を奉ぜざりしもその寵遇を得し釋奴ステフンは宮中に皇帝を弑し、議員は其記念を没し、その放謫は召還され嗣き立ちしネルヴ皇帝の世には無辜冤枉の徒の地位と資財

とを復せしのみならず、有罪の輩も尙特赦されき。

二。是より後約十年、トラジャン皇帝の世、少プリニは友にして且主たる帝よりピチニア、ボンツス兩州の牧に拜せられき。此新州牧は直に最その仁恕の情に背馳せる處罰に何の法何の律を用ゆ可きやに困せり。唯基督教徒の名は聞きたらんも、未だ嘗て其裁斷に與りしことなく、その犯罪の性質、その裁斷の方法、その處刑の程度は全く知らず。窮餘此新迷信の徒の事情を皇帝に問ひ由つて自己の疑を解き蒙を啓かんことを請へり。抑プリニは學府の俊髦にして亦政界の逸才なり。十九歳の年少名を羅馬の法界に知られ、議院の席に列し、執政の職に當り、伊太利及外州の諸階級の士と多く交を訂せるに其基督教徒に就きての無智は予輩の閑視し難き點なり。乃ちそのピチニア州牧に拜されし時、基督教徒に對して何等羅馬議員の一般法律令條なく、トラジャン以往の諸帝の勅旨の文武諸官に奉行されしものも公然此新宗教に對して聲明言宣せるなく、假令何等の處置ありしとするも、それは羅馬吏僚の處置に十分の權威ある先蹤ならざりしこと、此によ

少プリニの基督教徒に關する無智

りて明白なり。

トラジャン以後の基督教徒の精神

後來基督教徒が屢引用するトラジャン皇帝の勅答を見れば、その宗教政策の誤れる思想は正義仁恕の尊重を以て償はる可きを知る。飽くまで窮迫索し、苟くも異端の細跡を扶摘し、徒に犠牲の數を求めんとするが如きは帝の意にあらず、有罪の逸脱を防がんよりは寧ろ無辜の冤枉を過めんと欲する而已。帝は一般の政策を定めかねしも、その二條の法令は不幸なる基督教徒に救濟保護を與ふるものなりき。乃ち吏僚に命ずるに法禁に觸れし者を所罰す可きを以てするも、その疑似の罪案を羅織するを禁じ、また何等告發の手段を採るを許さず。以爲く公正の政治に惡む可きは匿名の摘告なり、苟も基督教徒の罪ありと爲すには必ず公明なる告訴者を要す、則ちその嫌疑の根拠を明示し、その秘密の會に列せし時處を列舉し、その極力俗眼を避けんと力むる内情の若干を暴露するを要すと爲す。故に告發は假令成功するもなほ有力なる一派の怨恨を招き、人間の寛仁なる階級の刺戟を受け、孰の國何の世にも告發者の受くる不名譽を蒙らざるを得ず。

第二節 未重大視されざりし基督教

若し立證明蹟を擧げ得ざらん乎峻罰を免るゝ能はず。現にハドリアン帝の法によりて基督教徒を誣告して重科に處せられたるなり。實にや人情の激し迷信の熱するや時に危を踐み名を顧みざることありと雖も斯くまで不利なる告發は羅馬帝國異教の臣民も屢輕よく爲したりとは信ぜられず。

民衆の
殺と殺
の誅

斯る法令の細心を回避する方策は却て私怨若しくば教熱による惡む可き企畫の遂げ難かりし反照たり。公會稠集の場に最個人の情意を左右し得るは異怖と羞恥との制裁なり。敬虔なる基督教徒が耐へ得ずして殉道の名を成すも恐れて不殉の譏を招くも、ともに公宴祝式の場に在り。斯時斯場には帝國大都會の士女戯場に雲集し狂熱の情燃え憐哀の心滅ぶ。花冠を戴き異香を薫じ犠牲の血を以て淨め神祇の尊像靈籠を以て繞まれし群集は享樂を以て宗教的信仰の重事を爲し、此際獨神祇を嫌忌するは人間基督教徒ある而已と爲し、その場に列せず會を厭ふを以て公安を犯し治寧を咒ふと爲す。國家何等かの不祥ある、例之ば流疫饑饉戰敗或はチベ

ル河水の溢るゝもニール河水の漲らざるも、地の震ふも季節の順を失ふも、迷信なる異教民は皆是基督教徒が政令の寛恕に馴れて不淨を敢てし終に正義の天神の譴怒を牽くに因りて放縱熱情の群集の間には正當の手段行はる可くもあらず、憐愍の聲は野獸と闘士との殷血に汚されし戯場に聞くを得ず。喧罵なる衆口は一齊に基督教徒を神祇の敵人間の仇と爲して其酷刑を迫り、新教徒中最名ある者を指して直に執へて猛獅に投ぜよと勢當り難ければ、當場臨式の守吏は已むを得ずして僅少の徒を犠牲として、滿場の群狂を慰撫するに至る。然れども諸帝の智は紛々たる羈訟を以て爲政の公平を棄るものと爲し、操々たる傲詐の前に能く教會を保護し、ハドリアンさてはアントニヌス・ピウスの勅旨は明に群民の聲の基督教徒を奉ずる不幸の徒を所罰する正當の證明ならざるを宣示せり。

第三節 國家の寛容と教徒の狂熱

寬馬有司
の寛容

三。有罪の自白も必ずしも刑罰を受くるにあらず、證據の顯然たる或は

第三節 國家の寛容と教徒の狂熱

自白せる基督教徒と雖も生死は自擇ぶの餘地あり。吏僚の意を損ず
 は過去の犯罪よりも現當の峻抗を重しと爲す。若し一抹の香を祝龍に燒
 けば身命を完うし賞賚を博して法廷より放還さる可き程なりと説く。蓋
 し迷妄の徒を罰せんよりは寧ろ之を覺醒するを判官の義務となし罪人の
 老弱により男女に従ひ門地に應じて調を異にし力めて生の怡む可く死の
 恐る可きを示諭し其人のため親姻のため朋友のために情を動かさんこと
 を要請否懇諭して已まず。解諭威嚇皆効なきに及びて始めて暴力に訴へ
 鞭笞拷掠の具は口辯の足らざるを補ふ爲にしてあらゆる殘虐の刑方は異
 教の徒の眼に執拗と見へし不撓の罪人を屈服せんために用ひられき。上
 世の基督教辯護者が刑吏は執法の旨義に反して鞠訊の目的たる犯罪の白
 狀を得んために拷掠を用ひず却つて犯罪の否認を得んために之を用ひし
 を刺れり。後世の緇徒は平和閑寂の裏に在りて好んで原始的殉道者の死
 と楚と苦を種々に變化し更に進歩せる大々的苦楚を案出せると尠からず。
 特に羅馬の吏僚は全然道德公義を蔑視して己の屈服し得ざる教徒を誑惑

誤傳され
世上の實情

せんとし誑惑し能はざる教徒に暴戾の力を加へしと臆想して自悦び、一
 死を輕んぜし敬虔なる婦人は時に死よりも更に恐る可き責問に附せられ、
 教法と貞操と孰が重きかを決せざるを得ざるに至りしとさへ語れり。

蓋し原始的殉道者の實情に就きて斯く全然實を失ひ虚を傳へしは洵に
 自然の過誤に起れり。何ぞや。第四、五世紀の教界の記者は自當世の異
 教徒偶像信者が抱懐せりと爲す峻厲殘忍の性情を羅馬の吏僚にも在りと
 爲せばなり。固より帝國要の地位を占めし者の民衆の意を迎合せし者
 なきに非ず或は殘酷の天稟私憤私怨の爲に動きし輩無しと爲さずと雖も、
 當時帝命を奉じ議院の令を行ひ生殺の權を委任されし諸州の守吏は概し
 て政治の正を尊び哲學の義を重んじ教養あり品性ある紳士の行爲ありし
 は事實にして上世の基督教徒も亦之を公言して謝意を表せる所なり。守
 吏は屢所刑を嫌忌し摘告を輕蔑し或は有罪の教徒に法禁の嚴を回避す
 る術策をさへ暗示しその掌裡に運用の權を有する時は之を教會の壓抑に
 よりは寧ろその利便の爲に用ひ己の判廷に上りし全基督教徒を罰せんと

カルセー
デの卑劣

は欲せず況や悉く之を死に擬せんとは尙更せず多くは禁錮流謫贖奴の如
 き輕罰に當て幸にして皇帝の慶事即位大婚凱旋等に際して大赦に遭ひて
 舊地位に復するの希望を繋けしめんと謀れり。されば羅馬吏僚の爲に刑
 僻に觸れし殉道者は全然他の極端より出づ。そは卑劣か不勒斯彼得か地
 位勢力基督教徒中に秀越せる者か孰にもせよ其刑死が全教徒を畏怖せし
 むるに足る輩ならずば、上世に於ては生命の殆ど重んぜられざる苦楚の殆
 んど顧みられざる極めて卑賤の教徒殊に奴僕の輩而已。經歴と讀書とに
 より基督教史に通曉せる學匠オリゲンは殉道者の數は甚少きを最明
 白に宣言せるにあらずや。其言明に據れば多く羅馬の瑩域より獲て幾多
 の教會に納められ奇蹟靈傳鴻翰なる神聖傳奇の題目と爲れる無數の殉道
 者は殆んど烏有に歸す可く而してデキウスの峻厲なる處刑の日大都アレ
 キサンドリアに在りしデオニシウスが基督教の爲に罪されし者として唯
 十人の男子七人の婦人を數へしを以てオリゲンの傳の實なるを證す可し。
 熱烈雄辯にして大志あるキブリアンが嘗にカルセーデのみならず亞非

キブリア

利加の教會を司りしは同じ處刑の時世に當れり。彼は異教吏僚の信用
 をも博す可く又その嫌疑怨憤をも招く可き人格を具へ性情といひ地位と
 いひ猜忌危險の最著しき標的たる可き聖僧なり。その一生の經歷は一
 基督教卑劣の危險なる地位を示し、その遭遇せる危險は俗世の功名を逐ふ
 徒が受く可き危難に讓らざるを證す。此カルセーデ卑劣が權勢と雄辯と
 を以て亞非利加教會を指導せる十年間に羅馬の四帝は皇族股肱と與に劍
 に伏せり。そのデキウスの峻令吏僚の警戒さては基督教徒の主宰キブリ
 アンを猛獅に投ぜざる可からずとの群民の喧囂に會せしは其第三年にし
 て細心にも一時退隱の必要を生じ隱棲の中よりカルセーデの僧俗と絶へ
 ず通交し、以て風潮の退くを待ちしかば、能く生を完うして而も勢力と名聲
 とを失墜せず。されど更に峻厲なる基督教徒と私敵とは以て怯懦最神聖
 の義務に背くと爲して嗟嘆し刺咎せり。教會將來の重事、神聖なる幾卑劣
 の先蹤その自謂ふ所の夢寐に顯ぜし戒によりて身命を完うせりとは解
 嘲自正の理由とする所なりしが、後約八年を経て教事に殉ぜしは最良くそ

の心事を辯明せり。彼が殉教の傳は非常に公明に傳へられたれば、その最要點を摘録せば以て羅馬刑罰の精神と形式とを鮮明ならしめ得可し。

その放謫

アレリアンが三びガリエヌスが四び執政たりし時(二百五十七年)亞非利加之鎮太守パテルヌスはキプリアンを召し、羅馬の宗教を捨てし徒は須く直に宗祖の祭祀の式に復す可しとの勅旨を傳へしに、キプリンは毫も躊躇せず、自唯一眞神に歸依して日々此神に正統の君主たる兩皇帝の安康福趾を祈請する一基督教徒、一卑涉なりと明答し、鎮太守の提せる不當不法の問訊を拒むは一府民の自由權なりと辯じて屈せざりしかば、爲に放逐に處せられ、カルセーヂを距る約四十哩豐饒の美地ゼウギタニアの沿海市クルピスに放たる。而も謫逐の卑涉は生活の便易と道德の覺悟とを樂しみ、名聲は亞非利加伊太利に喧傳し、教界の模範として其行事は公刊され、書信訪問相踵ぎて謫地の閑寂を破りしが、新守の更任するやキプリアンの運命亦轉じて召還され、流石にカルセーヂ城中に入るを得ざりしものから城外の私苑に居住するを許されたり。

その殉道

後恰も一年、鎮亞非利加太守ガレリウス・マキシムスは基督教々師處刑の勅命に接せしに、ぞ、カルセーヂ卑涉キプリアンは自免れざるを知り、人情の弱點一びは危難と殉道の名譽とより遁れしも、また省みて私苑に歸り、徐に致死の兩使を待ちき。位階ある兩使は卑涉を挾んで一戰車に乗じ、太守閑なきを以て直に獄に引かず、一使の私第に誘ひ、爲に盛饗を供し、聖師の運命窮まれるに驚嘆する信教の群集街上に滿つるや、教徒を引きて卑涉と最後の會合を爲すを許しき。翌朝卑涉は太守の法廷に引かれ、姓名地位を問はれし後犧牲を供す可く勸められ峻拒の後果を想ふ可く説かれしも、決然として拒絶せしかば、太守は屬僚と議定して已むなく死刑を宣せり。その宣判に曰く、「此タスキウス・キプリアヌスは羅馬神祇の敵として、衆民を蠢惑して神聖なるワレリアン、ガリエヌス兩皇帝の制法に反抗せしめし首魁として直に斬首せらる可きものなり」と。其處刑の法は重罪に當る一刑人に對して最寛大温和なるものにて、主義の改變の爲にも共犯の告白の爲にも拷掠を用ひざりき。

宣刑終るや宮門の前に待ちし基督教徒は一齊に「吾等も與に死なん」と呼べり。而もその熱誠愛慕の流露はキブリアンを利せざりしもまた群集に害を致さず。護民官百夫長の護衛の下に卑涉は抵抗なく擾騷なく城外の空地なる刑場に引かれしに、卑涉の親任せる若干の不斯彼得及執事は之に伴ふを許され相扶けてその上衣を脱ぎ尊き流血を保存するため地上に麻布を敷き命によりて二十五金を刑吏に贈れり。殉道者は雙手を以て面を掩へり。一撃の下に身首處を異にせり。遺骸は若干時間異教徒の前に曝されしも、夜に入るや凱旋の行列壯麗の彩燈を具して基督教徒の塋域に移し、その葬儀は毫も羅馬官憲の干渉を受けず、卑涉の最後の事に與りし者も何等の訊問處罰なかりき。而してさしも數多き亞非利加州の卑涉中キブリアンが殉教の冠を得し最初の人たりしは顯著なる事實なりとす。

殉道者として死せんも背教者として生きんもキブリアンの自選ぶ所なりしも、唯榮辱は此に由りて分れむ。カルセーチ卑卑は基督教の信仰を唯大志野謀の方便に用ひしと爲さん歟、その性格を支持するは尙難しとせん、

殉道者の態度と教徒の崇敬

若し若干の勇膽あらば一事の爲に教友の憎惡と異教の輕侮とに終生の名聲を代へんよりは寧ろ最殘忍の拷掠にも耐えたらむ。その熱誠は信仰より生ぜしとせば殉教の榮冠は實に其希ふ所なりけむ。教界諸師父の言論は雄にして而も味なれば明確なる思想を其中に識別し難く、教法の爲に鮮血を濺ぐ者に約する不滅の榮譽福祉の度量を測定し易からず。殉教の火は凡百の缺短を補ひ有所罪障を滅すといひ、普通教徒の靈魂は徐に苦しき淨祓を経るも、捷利の苦楚を受けし者は直に永劫冥福の享受に達し、大師長使徒、豫言者の伴に列して基督と與に人類の世界的審判に參與し得とは、其好んで説く所なり。況や現世に永く遺る名聲は最人性の虛榮に投ずれば能く殉教者の勇を鼓するに足るをや。原始的教會が信仰の選手に採げし熱烈なる感謝尊崇に較ぶれば、羅馬雅典にて國事に殉せし者の榮譽の如きは言ふに足らず。毎歲その盛徳と苦患との記念は神聖なる一儀典として存せられ終に宗教的崇拜を受くるに至る。また公然宗教的主義を表白せる基督教徒中には、異教吏僚の法廷より牢獄より免されし者も斯る例は

屢あり亦其不充分的殉教溫和なる決意に相應する名譽を博し、最敬虔なる婦人はその繋がれし縲紲、その受けし創痕に接吻せんことを請ひ、其身體は神聖其判決は崇敬を以て迎待せられ、自その秀越の待遇を濫用する輩も敢からず。教功宗勳に對する如上の顯彰はまた基督教の爲に苦痛を受け、身命を擲ちし者の多からざる證左たり。

現代の嚴格なる識量にては、スルピキウス・セエルス（註）の精彩なる記述に見る如き卑涉職を得んよりは寧ろ殉教者たらんを希ひし原始的基督教徒の熱誠は學ぶ能はずして唯賞賛す可く、賞賛せんと欲せず反つて批難せんずらん。縲紲に繋がれて亞細亞諸市城を引かれし時、イグナチウスが書きし文中には最人情の自然に反せる情感を吐露せり。彼は圓戯場に暴らさるゝ時親切にも不時の干渉によりて榮譽の冠を奪はざらんことを羅馬人に切望し、自一死の用たる野獸を怒らしめて決意を示せり。而して此イグナチウスの欲せし所を實行して、猛獅の憤怒を激成し、刑吏の施刑を督促し、燄身の猛炎に悦び投じ、非常の苦楚の中に悦樂の感を表はしたる殉教者の勇

原始的
狂熱的
基督教徒の基

譚は傳はれり。諸帝が教會の安全の爲に謀りし制規を自守り得ざる熱烈の教徒ありて、時に進んで處刑者の缺けたるを揚言し、敢て異教の公式を侵犯し、夥を爲して吏僚の法廷に膺至し、法の宣告を強請するに至るあり。斯る基督教徒は古代哲學者の留意を逸す可くもあらねど、爲に嘆賞されずして愕異されしのみ。時に精思合理の繩規を超逸する教徒の眞意を解し得ざれば、その敢死の狂熱は頑迷なる絶望、執拗なる不靈に出でざれば、迷信的狂妄の結果なりと目されき。太守アントニヌスは亞細亞の基督教徒に向つて絶叫せり、『不幸なる人々、斯計り其生に飽きなば繩索と斷崖とを得るに難きことか』と。太守は學識あり公平なる一史家の記によれば、斯る不測の事案に對し何等皇帝の制令なければ、自己の教徒を所罰するに苦しみ、唯その夥伴を懲すため若干を罪して、殘餘の群集は輕侮して、放釋し遣れり。斯る輕侮に拘らず、信徒の不撓なる精神はよく他を動かさず、異教徒にして之を憐み之を賞して、改宗歸依せし者、敢からず。信仰の熱誠は受刑者より觀者に傳はり、殉教者の流血は教會の種因となれり。

然り、狂熱は人心を刺戟し、雄辯は人情を鼓舞すと雖も、而も尚愛生厭苦畏死の人間の最自然の情を矯め難し。比較的考慮ある教會の司者は即殉教徒の狂熱を掣肘し、妄動を抑制し、信徒の生命の重んぜらるゝに從ひて、殉道の榮譽を希求するの念漸く薄し。元來罪の輕重はあるものから、處刑の炎火を免るゝには三道あり。一は無辜、二は疑似若しくは輕罪、三は背教改宗是なり。

(一) 羅馬の一吏僚、其司法下の某基督教徒に歸依せりとの告訴を得れば、令狀をその教團に下し、被告に家事を處理し、罪案に答辯する相應の時日を寛假す。此の如きは近世の宗教審問者の聞かば大に驚く所ならむ。されば若し被告にして勇斷なくんば、此猶豫の時日に深く匿れて、身命を待とうし、徐に時機の至るを待ち得可く、上世の峻厲なる宗訓を固執して、異端に迷ひしモンタヌス派の外は、最神聖なる高僧も、此遁匿

q. 百十一年に起る。フリギアの人にて、自仲介聖者と號するモンタヌスの教派にて、教祖常にプリスキラ、マクシミラの二女を從へ稱して女豫言者となす。此派は結婚を精神的結合となし、未來まで永續するゝ爲し、斷食を勵行し、身を辯護し、殉教を奨め、毎年三び四十日齋を行へり。

を他に薦め、且自行はざるは稀なりき。(二) 諸州太守は熱心よりは寧ろ貪慾のため、記名の民には羅馬の法令を遵奉し、羅馬の神祇に犠牲を上るを證する證明狀の發賣を奨勵せしかば、富みて怯なる基督教徒は此によりて告發者の威嚇を退め、自己と宗教との安全を併せ購ひき。(三) また何時の迫害處刑にも公然、輒く信教を變改する類なき基督教徒、甚多く、容易に香を薫き、犠牲を供して改宗を誓ひ、或は操執固くして能く久に耐え、數責られて漸く屈するあれば、或は吏僚の一喝に會ひて、立に服するあり、内心の恨悔の面に露はるゝあれば、平然として神祇の祭壇に進むあり。唯威力の異怖によりし改宗變法は一時の危急に應ずるに過ぎねば、追刑の峻令弛めば、懺悔歸法の徒、教會の門前に市を爲すに至る。

第四節 禁否の交出

四。基督教徒の裁斷處刑には固より一般の法規を制定せりと雖も、版圖廣く、執法自由なる羅馬政府の治下にては、教徒の運命は大抵自己の狀態時

世の情勢さては元首執政の性情によりて其寛嚴を異にす。異教徒の迷信的憤怒は狂熱によりて暴發する時あり、また靜慮を以て回避有恕するあり。州太守の意見に従ひて成法の執行に寛嚴を生じ、其意見も概公布の法令に由るよりは皇帝の私見内意に従ひ、その一轉眼は迫害の猛炎を或は煽り或は熄む。斯くて時々峻嚴なる迫害ある毎に、原始的基督教徒は痛嘆してその迫害の狀を鋪張せし傾向ありと雖も、ネロ皇帝よりチオクレチアン帝の世に至るまで教會盛衰の最明細なる見を抱ける第五世紀の教界記者は、有名な十迫害を數へたり。然れども此數は埃及の十流疫、默示録の十角の數によりて豫言の信仰を史上の事實に照らして基督教の爲に最不利なりし十世を選びしもののみ。且斯る一時的迫害處刑は、唯信教の熱心を蘇生せしめ歸教の訓練

十迫害

一、第一回はネロの世、六十四乃至六十八年。
 第二回はドミチアンの世、八十一乃至九十六年。
 第三回はトラジアン、ハドリアン、アントニヌス・ピウスの世、百七乃至百六十八年。
 第四回はマルクス・オレリウスの世、百六十一乃至百八十一年。
 第五回はセプティムス・セエルの世、二百二乃至二百三十一年。
 第六回はマキシミンの世、二百三十六年。
 第七回はデキウスの世、二百五十五乃至二百五十七年。
 第八回はワレリアンの世、二百五十七乃至二百六十年。
 第九回はアウレ

想像に出
 て、チベ
 リウスア
 ントニウ
 スの勅旨

を復興するに過ぎずして、非常なる峻厲の後には従つて永き平和安全の時期あり。君主或は意に介せず或は放漫に委して法令の異變はなきも尙教徒は實際に教禁の寛假を享受し得たりき。

リアンの世、二百七十二乃至二百七十五年。
 第十回はチオクレチアンの世、二百九十八乃至三百五年。
 八、約翰默示録十七章に「爾が見し十の角は十の王なり、彼等は未國を得ざれども此獸と偕に一時のあひだ王の如き權威を執る可し」云々

テルトツリアンの告白中には甚古く甚奇に又甚疑はしき皇帝の仁慈の二例あり。チベリウス、マルクス・アントニヌス兩帝が勅旨を發して基督教徒にをの無辜保護するため而已ならず教義の眞を證する異常の奇蹟を宣明せんとせしといふ是なり。その一例は懷疑の心を迷はし得る難解の事なり。即ポンテウス・ピレトは神身を具すると見ゆる一無辜に對し死刑を宣するの不當なるを皇帝に奏せしといふ、^一、耶蘇基督。ふ事酬賞なしに身を殉道の爲に抛ちし事凡百の教法を侮慢せしチベリウス帝が直に猶太の救世主を羅馬神祇の間に列せんとせし事、議院の帝命に反抗せし事、帝は議院の拒否を憤らずして帝は嚴命を布くの前數年教會の

第四節 禁否の交出

名も存在もなかりし時、峻法より基督教徒を保護せし事而して此異常の行蹟は、最公然に權威ある記録に存して希臘羅馬諸史家の遺却せるに反し、帝の歿後一百六十年に告白を編述せし……ロ・テルツルリアヌス

亞非利加の一基督教徒にのみ傳はりし事を信ぜざる可からず。また第二の譯はマルクス・アントニヌス帝の勅旨はマルコマンニの役に不思議の神助を得て其崇敬感謝の爲に出でたりと爲す。此役軍隊の苦艱、雨雹、電雷の天變、南蠻の潰敗は異教記者の數人、均しく喧稱する所なり。軍中若し若干の基督教徒ありたらんには、危難に遭遇して自他の安全を熱誠に祈願したりと爲すは怪しむに足らず。然れども黃銅の銘、大理石の勅、皇帝の牌、アントニヌスの圓柱、君主戰卒共に一も此神助を認めしものなく、一齊に是をジュピトルの神威、マルキュリーの神靈に歸せるを見る。マルクス帝は在位の間常に哲學者としては基督教徒を輕侮し君主としては此を處罰したりき。有徳の帝王の下に受けし艱苦を奇異の因縁によりて、虐主暴君の即位によりて免れしは基督教徒なり。マルクス帝の不仁を味ひしは唯此教徒の

コムモズ、セゾ、ルセ、スモ、セ、テ、の、基、督、教、徒

みなる如く、コムモズ帝の仁慈を受けしも亦此教徒の外に莫し。(百八十年)帝の最愛の妃有名なるマルキアは終に弑逆の異圖を畫せしが不思議にも基督教徒を好み福音の教義を以て自己の不徳を償ひ得ざりしも、基督教徒の保護者として女性の缺點を補はんとして。虐主の世に在りて十三年間教徒が安穩なりしはマルキアの保護によりしが、帝國セゼルス家の掌裡に歸するや教徒は新廷と家族的の更に榮譽ある關係を得たり。新帝は嘗て重患に際し一奴が抹塗せし神聖の油膏によりて、靈驗か効能かは知らず危を免がれしかば、爾來男女の信徒を待遇す。皇子カラカラの師傅は教徒なりしかばその性行中苟も仁恕の美點あらばそは輕微と雖も亦基督教の資なり。セゼルス帝の世、士民の怨憤は制壓され古法の峻厲は停止され州太守は寛法緩令の報償として領内の教會より毎歲贈獻を受けし程にて、此平寧和沖の時世には更生祭の式日に就きて亞細亞伊太利卑の爭議を最重大事と目したりき。かくて改宗者の數漸く増し百九十八年に帝の意を動かし、まで教會は和平を得たりしが終に帝が新教の傳播を防ぐために發

無事三十八年

せし勅旨は、本唯新改宗者を制限するに出でしも、之を厲行するや難を最熱烈なる教師宣傳者に及ぼさざるを得ざりき。而も此時尙羅馬多神教徒の寛慢なる精神は父祖の教儀を行ふ者の爲に勸解に吝ならずりき。

然れどもセエルス帝の此制法もその世を終るとともに廢し、一時的颶風の經ぎし後基督教徒は更に三十八年(二百一十一年)乃至二百四十九年(二百四十九年)の平穩無事の日月を送りき。此時まで教徒の集會は私宅閑地を擇びしが、今や禮拜のために殿堂を造營し、羅馬に於てすら教團の土地を購ひ、公然宗教上の司主を選ぶの許可を得て、永き平穩の時期に教會の威嚴を成立せり。亞細亞諸州出身の諸帝の世は基督教の爲に最幸にして、教派中著聞令名の士はま妃妾宮奴に媚求せずして、編流として哲學者として宮中に入し、既にた民間に浸潤せる不可思議の教法は不知不識の間に帝王の好奇心を牽けり。

妃マメアのアンチオクを過ぐるや學徳の譽東方に喧傳せる有名のオリゲンを引見せんと欲し、オリゲン徴に應じて至り、謁し、假令術數に當める此婦人を改宗せしめ得ざりしとはいへ、尙その能辯に悅服敬聽せしめ、厚禮を以

マキシムと基督教

てパレスタインに送り歸されき。マメアの感はその子アレキサンダーによりて繼承され、新帝はまた基督教を重用し、帝の内宮にはアブラハム、オルフェウス、アッポロニス、基督の像を安置し、宇宙最高の天神に對する義務として各自特殊の様式を以て人間を教化せし聖者として尊崇し、その家庭にては更に純正なる信仰崇敬を行ひ、卑劣の宮裡に入りしは恐らく此時を以て始と爲さむ。然るに(二百三十五年)アレキサンダー帝の歿後、殘忍のマキシムン帝が不幸なる己の恩主の寵臣、眷奴を誅殺するに當りて、貴賤男女の基督教徒も亦併せて虐殺されしが、此舉に迫害壓教の名を負はするは抑誤れり。

マキシムンは虐主たりしも、其基督教に對する憎惡は一時的地方的にして、狂妄の犠牲に數へられし敬虔なるオリゲンは、此時尙帝の耳に福音の眞理を説き得たりき。彼は又フリーブ帝其母后に數訓書を呈したりしかば、パレスタイン附近の出身たる帝が位を得るに及びては、基督教徒は眞に其保護者を得たりき。帝の新教に對する公平なる否寧ろ偏溺せる容遇と

デキウスの
峻厲

教會司宰の尊重とは當時帝は教法に歸依せりとの嫌疑を生じ二百四十四年(後世帝は懺悔贖罪に因り先帝弑殺の罪を清めたりとの傳説を生ずる原因とはなりき。帝の殂落二百四十九年)皇帝の替立によりて基督教徒はドミチアン帝以來此に至るまでを最自由安全の盛代なりと想ふまでに峻厲なるデキウス帝の短き治世に會せり。予輩はデキウス帝の徳性を見て此峻苛は前主の眷寵の族を惡む卑念に出づとは疑ひ得ず寧ろ是羅馬古道の廢頹を挽回せんとする大方針より新興有毒の迷信として基督教の擯逐を企てしなりと信ぜむと欲す。乃ち名邑の卑涉は放逐誅除され羅馬の編流は吏僚の命により卑涉の新選を停めらるゝこと十又六ヶ月に及び基督教徒は帝は紫袍の競争者を容るゝも尙且帝都卑涉に耐え得ざらんとすとの説を爲すに至れり。若し帝の明能く仁慈の下に尊大を包藏するを洞察し、靈界の權を掌握して終に俗界の威力を擁する後果を先見し得たらんには、予輩はその聖彼得の傳燈者を視てオーガスタス帝の繼統者の敵と爲し、を怪しまざらんとす。

グレリアン
とリエヌス
と基督教

グレリアンの治は羅馬御史の嚴肅なき輕佻浮泛のものなりき。帝は初世二百五十三乃至二百六十年は基督教に歸依せりと疑はれし前世の主に過ぐるまで寛大なりしに、晩年の三星霜半は埃及の迷信に耽溺せる一宰臣の言に惑ひて先帝デキウスの訓言を繼ぎ峻苛を用ひき。亞ぎてガリエヌス帝の國に臨むや國歩の艱難なる反つて教會は和平を復し、卑涉の職を公認されしが如き勅旨を得て教徒は自由に教法を行ひ古法舊令は何時廢停すともなしに自弛類し、オレリアン帝が獨振作せし外は四十餘年の昌安によりて基督教義は迫害禁壓の苦よりも更に恐る可き道德の頹唐を招致したり。

サモサタ
のルナ
パウ

恰もオデナツス、ゼノビアが東方に蟠踞せる時に方り、二百六十年アンチオクの教首たりしサモサタのパウルの譚は洵に當世の情弊を暴露して遺す所なし。父祖傳來の産にあらず勤勞勉苦の果にあらずして此高僧の巨富を擁せるはその罪惡を證せり。彼は教會の勤務を營利の職と認め、宗教の裁斷を積富の業と爲し、信徒の富豪より屢寄獻を誅求し、密捨の淨財を

以て多く私囊に充て、奢侈倨驕異教徒の指彈を顧みず、崇第寶坐、行粧の盛從、訴の衆信書、願應酬の繁劇、事務の多端、原始的卑劣の謙素に似ずして、吏僚政務、執掌の態あり。その壇に上り、徒に説くや、亞細亞僞辨者の態度、風調をの擬し、聽衆の喝采、堂宇を動かし、その權威に抗し、その虚偽に迎合せざる者を待つ、驕傲不遜、暴戻に盲從、阿諛の細流には、淨寶を濫賜し、飲食の慾を逞くし、教堂の中、妙齡の二美人を蓄へて、消閑の同伴と無すに至れり。

その失敗

斯る醜惡の不徳ありとも、能く基督正教の純正をだに失はざりせば、サモサタのパウルは終生、叙利亞首都の教界に君臨し得たる可く、若し迫害禁教の一舉に遭遇せんか、勇膽恐らくば、名を聖徒殉道者の間に列し得けむ。而も其不用意に採用し、執拗に固守せし三位一體に關する瑣末の異説の爲に、東方諸教會の熱烈なる輕侮を煽搖し、埃及より黒海に及ぶ間、到る處の卑劣は、驟起して、幾度か會議を催し、辨駁を公にし、互に破門除籍を宣し、約を訂し、盟を解き、遂に二百七十年、七八十員の卑劣は、アレチオクに會合し、僧侶信徒に諮らす、自己の權勢によりて、パウルを廢して、新教首を選定せり。その手

段の明に異法なるや、また不平の徒を増し、宮廷貴族の術を解せるパウルは、ゼノビアの眷寵を得て、尙教職を固執し、教堂に據守する四年に及びしが、オイレリアン帝の征定は、東方の局面を一變せり。相互に分派異端と刺譏せし、教界の兩派は、勅命によりて、決を捷帝の廷に採るに至れり。此公式にして、而も奇異なる裁斷は、法令にこそよらざれ、少くも帝國の官僚によりて、基督教徒の存在、資財、特權、教政の認識さるゝ、好機明證たりき。帝は異教徒たり將軍たり、素よりパウルの一派と敵派との孰か、正教の眞旗幟を擁するや、論決す可くもあらねど、その裁斷は公正と合理とを基礎と爲せり。帝は伊太利の卑劣を、教徒中最公平の判官と認め、その説を聽きて、二百七十四年、直にパウルが執守せし地位を褫奪せり。然れども、予輩は此際、帝の政策を看過す可からず。帝は臣民の何の階級にもあれ、百方其利害休戚を繋ぎ、諸州と首都との申索を固くせん、と欲せしなり。

第五節 チオクレチアン以後の禁教と殉教の事實

チオクレ
チアン時
の教會
安昌

帝國の難處相踵げる間に基督教徒は安全昌盛を樂しみ、チオクレチアンの即位以來二百八十四乃至三百三年殉道の時代去りしも、十八年間此帝の新政策の下に温和なる待遇を受けたり。帝は寧ろ政戰の器にして研學の質に非ず、細心にして大改革を好まず、常に帝國の舊道を守りて神祇を崇尊すと雖も、后プリスカ、皇女ブレリアは何時の世にも婦人の歸依を得る基督教の眞理を敬聽し、左右に侍せる有力の閣侍ルシアン、ドロセウス、ゴルゴニウス、アンドリ等亦之に歸依せしかば、皇帝の飾裝衣冠器什寶玉さては府庫を掌る宮中有數の諸官も之に倣ひ、皇帝の神廟に犧牲を奉つるには已むを得ずして扈從すれど、一び邸宅に歸れば妻子奴婢と與に自由に基督教の儀禮を行ふにぞ、チオクレチアン及共治の諸帝が帝國の顯要に任用せし人官にも材幹重任に耐ゆるものから神祇の崇敬を侮蔑せる徒尠からず、諸州の卑涉は榮位を得、營に州民にのみならず吏員よりも尊敬を受け、諸城の古教會は新加之信徒を收容するに足らず、増築新創するもの多し。エウセビウスが痛嘆せし風尙習俗の頹廢はチオクレチアン帝の世基督教徒が自由

異教徒の
奮起

放縱の結果且證據たり。昌樂は訓養の精神を蝕し、會合に虛妄猜忌憎惡の行はれざるなく、不勒斯波得は日に大志野望の地位を得る教長の職を競望し、宗教的秀越を以て満足せし卑涉は教會に於ける專制俗權を振はんとし、基督教徒の異教徒と識別さるゝ活信仰は唯論議に存して生活に認め難し。斯く外觀の安固なるに反し、銳利なる觀察者は教會が今や從來耐え得し迫害よりも一層激烈の迫害に威嚇さるゝを認めむ。基督教徒の熱烈急速の進歩は多神教徒の情眼を攪醒し、前後二百年に亘る教爭の相互の刺戟は兩黨の争心を鼓舞し、國人を誤れりとし、祖先を永劫の不幸に陥るゝ後進新教の安舉に怒れる異教徒は、その讒謗嘲罵に對抗するため從來遺棄して顧みざりし信神崇祇の組織を立て、教會の超自然的教力を畏るゝとともに之に競争して、彼と同じく亦奇蹟の城地に嬰守し、犧牲贖罪歸教式の新方式を制定し、人心を煽搖する神託托宣を復興し、奇異不可思議の譚を以て靈蹟に迎合する欺瞞の徒を輕信す。乃、兩派ともに奇蹟を認め、幻妖左魔の力術を信じて互に迷信靈異の分野を争奪せんとすれば、其最危険の仇敵なりし

哲學は今や最緊要の朋侶と化し、アカデミーの茂林エビキュルスの苑圃ストアの庶廊は殆ど懷疑不信の諸派として荒廢し議院の權を以てシセロの遺篇は禁絶す可しと爲す羅馬人さへ少からず。流行の新プラト派は嚮に排斥せし僧巫と結托して恐る可き基督教徒に對抗するを賢なりと爲す。乃希臘詩客の傳奇より警諭の智を引用し、標榜せる主義の爲に神話的儀禮を述作し、古代の神祇を至上天神の象徴若しくは代宰として崇敬者福音書を反駁する幾多の著述を公にせり。此等の著述は後正教歸依の皇帝によりて焚かれたりき。

デオクレチアン帝の政策、コンスタンチン帝の仁恕は寛政の主旨を存するものから、マキシミアン、ガレリウス兩皇は最基督教を憎惡せり。蓋し兩皇の心裏には學術の光明なく、稟性は教育の陶冶を経ず、劍に依りて皇位を得、天下に君として尙武夫野翁の迷信を去らず。領州の一般政治は恩主たる兩帝の法令に遵ふも、營中宮裏に在りでは屢忌憚なき基督教徒を誅除せり。正當に兵役に就く可しとて父の爲に吏僚の前に薦められし時、斷然

マキシミアン、ガレリウスの多少の迫害

信念によりて兵たるを拒みし、亞非利加の一青年マキシミアンは死刑に處せられたり。若し百夫長マルケルスの如きは如何の政府も許し難き所ならむ。彼は公祭の日その職官の帶を解き劍を棄て、徽章を去り、永世の王耶穌基督の外何者の命をも奉ぜず、永久に偶像崇拜の君主の爲に軍役に任ぜずと絶叫せしかば、軍隊は直に之を執へ、マウリタニアの一州吏は之をチンギ城に裁判し、その自白により、叛罪を以て論じ斬首せり。斯る事例は宗教的刑罰よりも寧ろ軍法若しくは私法の斷罪に近きものから、自ら諸帝をして部下の基督教信者の士官若干を革職せしガレリウスの峻苛を是認せしめ、公安に背反する教徒は帝國の無用の臣民なり、否危険なる臣民なりとの説に左袒せしめき。

ガレリウスが彼斯征討の功を貢ひてデオクレチアン帝とニコメデアに冬陣を張りし時、基督教に就きて商量するや、帝は仁恕説を持して、假令帝室と軍中とまり之を排斥せんも、なほ其血を濺ぐを危険且残忍の事として極力拒せしかば、ガレリウスは文武兩般若干の重官を會して商議に決せん

ガレリウス會議の禁教

を請ひて御前會議を開きたり。會に列せし重官等はガレリウスの暴威に阿附し、基督教の絶滅に就きて帝の自尊敬神畏怖に渉る諸點を主張したり。想ふに其議は諸州の中央に一獨立臣民の存在と増加とを寛容する限り、光榮ある帝國の美治は完全なる能はずといふに在りけむ。羅馬の神祇と憲制とを棄てし基督教徒は特殊の共和國を爲し、既に自家の法を有し、吏を設け公財を積み、無數の富有なる團集を左右する卑劣の會合によりて、百方連盟團結すれば、その未武力を擁せざるに先たちて禁遏せざる可からずと。帝の心を動かして迫害禁教に傾かしめしは斯る論議ならむ。宮中の密議私見憎惡、婦人閹儒の妬忌其他鎖末の事、尙帝國の運命を左右し賢王の會議に影響するものは予輩説き得る限にあらす、唯臆想推量するのみ。暗澹たる冬天に洶々として會議の結果を慮りし基督教徒は終に帝の決意を見たり。紀元三百三年二月二十三日は基督教の進歩を抑制する當日と定まりしが、故意か偶中か恰も羅馬のテルミス神の祭日に中れり。此日昧爽、禁軍統領は若干の士官護民官收稅官を率ゐてニコメチア城中最

ニコメチア教會の廢毀

最初の禁教令

盛般壯麗の地區を占むる大教會に赴き門戸を破毀して靈場に躡入し何等禮拜の目的物を索り得ざるものから幾卷の聖典約書を燒棄すれば官吏は禁衛工卒を從へ攻城の器械を具して至り、皇宮を俯瞰して久しく異教徒の憤恚の種因となりし魏我たる聖堂を數時間に壞ち夷けたり。

翌日禁教令は下り。帝は尙流血を厭ひて、苟も犠牲を神祇に奉ぜざる者は盡く燔殺す可しといへるガレリウスの怒を抑制し得しも執拗なる基督教徒に對する刑罰はなほ十分峻烈なりき。即帝國諸州の教會は悉く毀夷す可し、宗教的禮拜の秘密會を行ふ者は悉く死に處す可しと令す。今や迫害禁教の盲的狂熱を指導する哲學者は能く基督教の旨義に通曉し、信仰の奧義は豫言者福音者使徒の書中に在りと知るものから卑劣不勸斯彼得をして悉くその聖典を吏僚に委付せしむ可しと力説し、重罰を以て公然嚴密にその燔却を迫れり。禁教令はまた教會資産の公沒を命ぜり。乃、或は最高評價者の手に賣られ、或は皇室領に併せられ、城市民團に寄與され、貪婪なる廷臣に頒付せらる。既に禮拜を禁遏し教團を解散したる後に來

第五節 チオクレアン以後の禁教と殉教の事實

るば、斯くてもなほ自然の宗教、羅馬の宗教、宗祖の宗教を峻拒する徒を奈何に處分す可きやの問題なり。良民には一切の榮譽公職を禁じ、奴隸には終生放釋の恩典を奪ひて、併せて法律の保護を解き、判官は基督教徒に對する告訴は聽く可きも、教徒は如何なる侵害を蒙るも訴ふるに地なく、國法の峻苛に當るもその恩澤に浴する能はざらむ。此痛ましく恥づ可く慍ましく世に知られざる殉道の新例は信仰の固執を弱むるに最有力にして、人間の感情利害は此に至りて皇帝の企圖に屈せざるを得ず。唯夫整然たる政府の政策も時に基督教徒の爲に遮らるゝとあり、羅馬の帝王も迫害禁遏の畏怖を除き、欺瞞暴壓の舉施を默容せんためには自家の權勢臣民の地位を危うせざるを得ざりき。

禁教令のニコメチアの最熱鬧場に揭示さるゝや、否一基督教徒は之を碎棄して不敬壓制の守吏を痛罵せり。此罪は最寛大の法令によるも叛謀に當り刑死に該る、其犯人の地位あり教育あれば罪益重り、之を燔殺、否緩火を以て炙殺せしが、死に臨み苦に耐えて尙輕侮の微笑を漏らし毫も屈する

所なきより愈皇帝を侮辱せりとして刑者の殘虐を逞うせしめき。その行爲は基督教徒もなほ法令の違背と認められたれどその神勇を推賞して殉教の英雄と爲すものから、是亦益深くデオクレチアン帝の畏怖と憎惡の念を増進せり。

ニコメチアの失火

帝の畏怖は辛うじて免れ得し一危難によりて更に驚怖に變ぜり。後十五日間にニコメチアの宮裡、帝の寢殿にて再び火を失し、幸ひにして燒損を免れしも偶然の過失ならずと推想され、嫌疑は自基督教徒に繋り、是目前の苦楚と將來の畏怖とに憤怨したる狂教徒、同教の朋侶たる宮中の閣侍と通同して、天神教會の深仇として兩帝に危害を加へんと謀れるなりと推定されき。蓋し多少の嫌疑なきに非ず。乃各人皆猜疑憎惡の情を抱きし中に帝最甚しく高位寵任を得たる多數の臣僚は牢獄に投ぜられ拷掠の苦を受け、宮裏城中流血の慘を見しも、終に何等密謀の痕迹發見されざりしは予輩その冤柱を悲しむ可きや決意の鞏固を稱す可きやを知らず。後數日、ガレリウスは斯る狂妄の地に留まらば基督教徒憤怨の犠牲たらざる可から

すと揚言して急にニコメデアを去れり。予輩が此禁教一件に就き偏頗不
公平ながらも所傳を得るは唯教界史家の記録のみ。而してその記録は皇
帝の畏怖と危難とを詳説せず、その火炎を日略せし二史家の一は以て神譏
たる雷火と爲し、他は是ガレリウス自縦つ所と爲せり。

禁令施行
の用意

禁教令は全國一般の令チオクレチアン、ガレリウスは西方帝皇の允諾を
待たざりしも賛同を確めたれば、諸州の太守は同時日に各自領内に對す
る處斷の訓令を受けたりと見る可く、孔道置郵の便によりて法令は急速力
を以てニコメデア宮中より羅馬領の邊陲に傳波したらんも、その叙里亞に
發表されしは五旬の後、亞非利加諸城市に揭示されしは殆んど四箇月後な
らざる可からず。此猶豫の時日は、己を得ずして禁令を布きしも遠隔の州
縣に必然動搖の起るに先だちて眼前に先例を示さんと欲せし帝の細心に
出でたり。始吏僚は流血を避く可しと令されしも峻苛を用ひ窮迫を獎勵
され、基督教徒は教會の紛飾を去るを辭せざりしも教儀を停め聖書を燬く
を肯んじ得ず。亞非利加の一卑涉フリックスの敬虔なる頑守は當局を刺

教會の破
却

戟せり。市尹は之を逮捕して太守に致し、太守は之を伊太利の禁軍統領に
致し、フリックスは回避の遁辭を吐くを肯んぜず、終に彼ホラチウスの
生地として世に聞えしルカニアのエヌシアにて斬首さる。此先蹤あり、ま
た之によりて恐らく或帝旨ありて、爾後諸州の太守は聖書を致さざる基督
教徒を誅殺することとなりしにぞ、此機に會ひて殉道の名を得し者多かり
しも、また聖典を異教の掌裡に委付して生命を完うせし者甚だ多く、卑涉不
勒斯彼得すら此不敬虔を行ひてトラヂトルの汚名を蒙りし徒渺からず。
蓋し是亞非利加教會の現在の恥辱、後來の紛擾によれり。
聖書の印行翻譯は當時既に帝國に充滿し、最峻嚴の追窮を加ふるも絶滅
し難く、教會公用の書卷を探り盡くすすら背信の基督教徒の通同に依らざ
るを得ざりしが、教會の破却は政府の權力と異教徒の勞力とによりて容易
く遂げ得たり。されど夫すら或州にては唯之を閉鎖せしに止まり、他州に
ては令旨を厲行し、門戸榻椅教壇を奪ひ去りて、燒却し、全然建築を夷却する
ありて、必ずしも一樣ならず。予輩の好奇心を満足せしめんよりは寧ろ刺

戦するまでに種々の談片に富めるは此際の事なりけらし。例之ば何れの地なりしかフリギアの一小城邑にては吏僚邑民皆基督教徒たりしより若干の抵抗ある可しと期せし太守は軍隊を用ひて禁令を斷行せしにぞ邑民は兵を執つて對抗せざれば教會に殉ぜんとの決意にて悉く會堂に籠守して退去の訓諭に應ぜず其頑強を怒りて軍隊の四方より火を縦つに及び妻子眷族を擧げて焼死せりとぞ。

禁令の連發

叙利亞及アルメニア邊陲に起りし動搖は忽壓迫されしも教會の敵は以て無限の從順を守る可き本來の義を忘れし卑劣の謀略なりと爲し帝は終に始守りし仁恕の域を超え基督教の名をだも剩さじとの殘忍なる令旨を連發す。乃先づ諸州の太守は悉く教界の民を捕拿す可き第一令を受けしかば囚獄は卑劣不勒斯彼得執事讀師講師を以て充滿し吏僚は此迷妄の信仰を破り神祇の國定禮拜に復せしめん爲に凡百の峻苛を用う可しとの第二令を得しかば全基督教徒を擧げて處刑することとなり皇帝の士官は罪人を摘發追跡拷掠するを義務と爲し苟も神祇に不敬皇帝に不順なる

罪人を庇護する者は亦重罪を以て律せられき。而も斯くまで峻苛なる中にもなほ朋友親姻を庇護せし異教徒の多かりしは迷信の憤悲も人情の自然を絶滅し得ざりし美しき證據なり。

デオクレチアン帝は禁教令を布きて幾ならずその實行を他人の手に委せんとせしものから紫袍を脱するに至りては共主嗣帝は時に其令を圖行し時にその旨を遵守せず帝の第一令出でより教會の終に安易を得るまで前後十年間帝國各地の状況を別叙分説せざれば到底明確に其真相を傳へ難し。

コンスタンチヌス帝の天稟濃厚なる如何なる臣民をも抑制するを好まず。宮中の要職は基督教徒なりしも其人を愛し其誠を尊びて信教の異同を以て好悪を更へず。唯その未だ亞皇たるや公然デオクレチアン帝の禁令を拒む能はずマキシミアン帝の勅命に従はざるを得ざりしも其權力はなほ教徒の痛苦を緩うし得己むを得ず教會破却に同意せしも國民の憤怒制令の峻苛より教徒を保護し得しかばガリア(恐らく不列顛も亦はその庇

陰に不思議にも靜安を保ち得たり。たゞ西班牙太守は熱誠か政策かは知らず、コンスタンチウスの私旨に遵ふよりも寧ろ兩帝の公勅を厲行せしかば、領内は若干の殉教者の血を濺げり。然るにコンスタンチウスの帝位に昇るに及びては其皇帝の至上權は仁徳を施行するに自由に治政短かりしも寛法の組織を確立して嗣子コンスタンチンの爲に先蹤を遺し、嗣子は即位の始より自教會の擁護者と揚言し、終に公然基督教を確立聲明せし第一皇帝たるの名を博せり。帝の改宗歸教の本旨は仁慈に出でしか、政策に由りしか、自覺にや悔恨にや起りし其勢力と諸子の威令の下に基督教が羅馬帝國の國教と爲りし昌隆の狀は本史第三卷の興味あり必要なる一章を爲す可ければ茲に及ばず、今は唯帝の毎捷は漸次に教會の利益を増進せりと
言ふて已まむ。

マキシミ
ン、セジ
ルス、治下
の伊太利
亞非利加
の禁教

伊太利及亞非利加は暫時なれども激しき迫害に遭ひき。久しく基督教徒を憎み、流血殘暴を好めるマキシミアン帝は悦んで共主デオクレチアン帝の峻令を勵行せり。迫害第一年の秋兩帝は凱旋式舉行の爲に羅馬に會

合し相謀りて專壓の數令を續發せり。後デオクレチアン帝の紫袍を脱するや、伊太利、亞非利加はゼルス帝の治下にガレリウス亞皇の抑壓を遇くするあり。羅馬の殉道者中後人の特記す可きアダウクスは伊太利の一名族にして内藏の重官に在りしもの、此迫害中高位名門にして教に殉せし唯一人たり。

マクセン
チウスの
教徒寛容

マクセンチウスの亂は伊太利、亞非利加の教會に和平を復せり。他の臣民を壓制せし此暴君は反つて基督教徒には公正有情、否偏愛にして、教徒の感謝思慕を好み、教徒の受くる迫害舊敵より招く危難は既に衆く且富める一黨派の忠誠を得るに足ると信ぜり。さればその羅馬カルセーヂの兩卑涉に對する處置は猶正教の君主が正當の編流に對するも斯くやと思はるるまでに寛大なりき。羅馬の卑涉マルケルスは嚮に迫害の際教法を背棄せし多數の教徒に重科を課して國都の擾亂を惹起し、互に鬪争血を流すに至りしにぞ、マルケルスを流謫せしは平和克復の唯一法なりき。カルセーヂ卑涉メンスリウスの案件は更に重大なりき。其地の一執事帝に對して

證據を發せしに其犯者卑沙邸裏に隠匿し未だ宗教的不入權存せざるに卑沙はその引渡を拒みたり。然るに帝は卑沙を法廷に召し正當には死諒に該る可きを唯簡單なる訊問の後放還したりき。斯りしかば領下教徒の安寧なりしは殉教者の遺骸を遠く東方に購ひ來らざるを得ざりし一條の譯にて知り得可し。羅馬に執政家の後裔にて七十三員の管家を役する富女アグラエあり管家の一ポニファキウスを寵愛して床を別ちしが東方聖者の遺骸を得んと欲し情郎は爲に黃金薰香を載せ十二騎三戰車を從へて遙にキリキアのタルススに到りしといへるを聞けり。

迫害禁教の首唱ガレリウスの峻烈は領内教徒の畏怖せしところにて貧富共に移送に不便なる者を除く中流の士民は多く郷土を出で西方に遁奔せし程なり。ガレリウスの只イルリクムの州軍に號令せる間は他地方に比して福音宣傳に對して冷淡なる慄悍の地方とて殉教の徒も少かりしもその東方皇帝の尊位に就くや飽くまで熱烈殘毒の本色を逞くし直隸のトラキア亞細亞のみならず其亞皇たるマキシミンの領知せる叙利亞パン

ガレリウス、
シモン、
下の東方
の禁教

スタイン埃及に及ぼしたり。然るに勵行屢效なきと六年の實績と晩年多病の爲とに漸く全臣民を絶滅しその信教を屈服し難きを悟り自己の名及びリキニウス、コンスタンチンの名を以て下の勅旨を公にせり。即首に帝號を誇稱して曰く、

ガレリウス
の恩赦

「帝國の利益防護の爲に腐心せし重大事中羅馬の古法公儀に據りて諸事を矯正復興す可き志望あり。特に宗祖制定の宗教儀禮を遺棄し擅に故事舊典を廢停して感想に出づる奇異の新規妄説を唱導し帝國諸帝を連盟する迷妄の基督教徒を天理自然の本道に復歸せしめんと希望す、神祇の崇敬を強制せし法令は却つて多數の教徒を危難に陥らしめ多數を死に抵らしめ、執拗頑迷悟らざる更に多數の民をして公教を失はしめしが此不幸の徒をして仁政の澤に浴せしめんと欲す。故に今此徒をして自由に私信を吐き憚る處なく集會せしめん、慎んで政令を遵奉順行して違ふ勿れ。又別に旨を判官吏僚に諭す所あれば此仁惠恩澤の下に基督教徒がその崇信する神前に朕等の爲各自のため、及共和國のため、安康幸福を祈らん

ことを望む」と。斯る勅旨を發せし帝皇の眞意と本心とは、勅旨の言辭によりて予輩の窺知する所にあらずと雖も、瀕死の皇帝の辭斯の如きは其の地位のその眞面目を證する所以ならぬ。

大教徒の起

蓋しガレリウスの此恩赦令を下すや、リキニウスは恩主にして好友たる自己の意に従ふ可く、コンスタンチンは基督教徒の寛遇に賛同す可きを疑はざりしが、唯數日の後亞細亞の主たる可きマキシミンの賛否は最必要なるに、旨令の小序に其名を列記せざりき。されどマキシミン繼承の始六箇月間は前帝の遺志を奉じ、公勅を以て教會の安寧を保證せざりしも、禁軍統領サピヌスは諸州の守吏に移牒回文して新帝の仁政を舖張し基督教徒の頑強を認容し判官に無益の迫禁を停止し教徒の密會を默許せしめしかば、多數の教徒は獄裡を出で鐵穴より釋され、懺悔者は凱旋の頌歌を誦して郷土に歸り、迫害に屈伏せし教徒は悔恨の涙を垂れて再び復宗を教會の門に請へり。

復害の起

然れども虚欺の靜寧は久しからず、東方の教徒は皇帝の性格を信じ得ざ

りき。殘忍と迷信とはマキシミン帝本來の面目なり。殘忍は迫害の手段を生み迷信は禁壓の目的を起す。は神祇の崇敬、左衛の學修、神託宣の歸信に耽溺すれば、その天寵を得たりと尊信する豫言者哲學者は屢諸州の政務に任じて帝の機密に參畫し、基督教徒の勝を制するは整然たる訓練に因り多神教の弱點は教中統率の組織を缺くにありと説き、明白に教會の政策に擬せる宗教組織を創制し勅旨を請ひて帝國の大都會なる神祇の殿堂を修理粉飾し諸神奉仕の巫僧を悉く神祇伯に督隸せしめ多神教の爲に卑涉と對抗競敵せしめ、伯は諸州高僧の所施を帝の代理と認め、白衣をその表識とし名門富豪より選任せり。於是吏僚教界の勢力は宮廷の意向を民意輿論の形式により幾多の建議上告を見る、就中ニコメデア、アンチオキア、チルス地方のもの最多く、皆帝に仁恕に失せんよりは公正の法に據らんことを請ひ、基督教に對する憎惡を言ひ少くも各自の地方より之を排斥せんと懇請せしむ。マキシミン帝のチルスの訟議に答ふるの書現存せるが、帝は諸衆の赤誠を嘉納し基督教徒の執拗不敬を論難し直にその放逐を許容

せんとの意を漏らしき。巫僧吏僚は銅表の勅旨を勵行する任に當り、流血は避く可しとの命あるも頑強なる教徒には尙最残酷の處刑を課せり。

斯る熟計成算の下に暴虐を用ひんとする帝の峻酷には亞細亞の基督教徒は戰慄したらんも、僅に數月を出でずして西方の兩帝の令旨は帝をして此企書を抛つの已むなきに至らしめき、帝はリキニウスを伐つに忙殺されてまた教事を顧る違なく、その敗死は教會の爲に最後の最畏る可き教敵を除き得たり。

斯くデオクレチアン皇帝の禁令以來基督教徒禍害の一般史を記するに予は故に殉教者の慘死迫害を詳記するを避け來れり。エウセビウスの史よりラクタンチウスの宣言より幾多の古法令より畏る可く厭ふ可き長期の慘景を描寫し、笞鞭拷串、鐵串、火床、さては猛火、銅鐵、猛獸、更に恐る可き殘逆の刑者が人體に加へし諸般の苦責を以て幾多の楮毫を費やさんは容易の業のみ。此等悲惨の光景は基督教徒の名の爲に苦楚を嘗むる聖徒の死を止め凱歌を奏し遺骸を發見す可き數多の幻想奇蹟を以て光彩を加へ得可し。

迫害記事
の撰擇と
その史料
の曖昧

殉道者の
状況

然れども予輩はその幾干を信す可きかを決せざれば何物を抄録す可きかを定むる能はず。教界史家中の最嚴正なるエウセビウスすら宗教の光榮を發揮す可きを述べ、宗教の汚辱たる可きを載せずと曰へり。斯るは公然歴史の根本律の一を犯せる史家の他の根本律の觀察に嚴正の用意を拂はざる疑ひあり、殊に同代の諸人に比して信用少く宮裡の術に熟したるエウセビウスに於て然り。吏僚の利害憎惡に驅られたる時、殉教者の狂熱常徑を逸せし時、殘忍性の工夫し能ひ執拗性の耐え能ふ凡百の拷掠は犠牲者に加へられけむも、尙不用意に記せる二條の記事の、普通斯る可しと想像せるよりは基督教徒の一般待遇の寛なりしを證するあり。礦坑の役に就ける懺悔者は看守の厚情さては寛意のため恐る可き坑中に小籠を造り自由に自己の宗教を奉じ得しは一なり。自進んで吏僚の手に投ぜんとする教徒の狂熱を制す可しと卑劣に命ぜしは二なり。蓋し自身を吏手に委せんとするは、或は光榮の一死を以て悲惨の生涯を終らんとする貧窮負債の徒か或は一時の禁錮を以て終生の罪惡を償はんと欲し、さては信徒の囚人に對

殉教者數の推定

する慈惠寄施を得んとする輩而已。かくて教會の仇敵に克つや囚罪の徒は自功に誇りて苦を衒ふ。世遠く地隔たるに従ひて其事蹟漸く化して傳奇偉聞と爲り、傷痍は立に癒え、體力は忽ち復し失ひし四肢は不可思議に生ぜりなどいふ靈蹟異事は容易に解決せられ、最異常の神話は教會には光榮として歡迎され、群徒には推賞され、緇徒には保護され、宗教史には證明さる。流論禁獄苦楚痛掠の曖昧なる記事は技巧ある説者の筆端によりて鋪張省略自在なれば、予輩は別に更に確實鮮明なる事實を探索せざるを得ず。何ぞや。チオクレチアン皇帝以來諸帝皇の禁迫令に死せし殉教者の數是なり。近世の傳説は禁迫の急なる一舉に全軍を屠り全城を盡くせりと曰ひ、上世の記者は福音の信仰の爲に鮮血を濺ぎし者の數を窮めずして、唯徒に漫然痛罵の惡聲を放つ而已。然れどもエウセビウスの史に據るに死刑に該りしは唯九卑沙のみ、其パレスタインの殉教者を數へしも九十二人に過ぎず。當時の緇流の熱誠勇氣の度を解せざる予輩は、前者より何等有力の推論を得ざるも、後者は必要に信頼す可き決論を得可し、羅馬帝國の

州別によればパレスタインは東帝國の十六の一に當り、眞偽はいざ、仁恕を標榜して信徒流血の禍を避けし州守ありとせんに、ガレリウス、マキシミン兩帝の世基督教發祥の地は全殉教者の十六の一を出せりと爲さば、全數は約千五百人之を十年、迫禁の間に平均せば、毎年百五十の殉教者を出すと見做し得む。伊太利亞、非利加の二地、兩三年にして禁令歇みし西班牙をも之に加算して、同率を以て推せば、通計二千人に過ぎざらむ。チオクレチアンの世前代に比して基督教徒の數増し、その仇敵また加はりしは疑ひなければ、此信す可き計算は基督教を世界に流布する大事件の爲に生命を抛ちし原始的聖徒殉教者の數を推算するに難からず。

予輩は己むを得ず悲む可き事實を以て本章を終らざる可からず。疑もなく猶豫もなく、基督教徒は異教外道の爲よりも、寧ろ内部の鬭争の爲に、遂に大なる苦を喫せし事是なり。西方羅馬帝國の傾運以來、無智蒙昧の世に、帝都の卑劣は羅甸教會の僧俗を併隸し、其制定して永く道理を侮蔑せし迷信の組織は終に十二世紀乃至十六世紀の間、改革の運に會し、教熱の徒に襲は

基督教の内憂は外患より大なり

れき。羅馬教會は其克ち得たる帝國を防ぐに暴を以てし、平和慈惠の組織は幾ならず削籍兵亂虐殺神聖職官の制度によりて汚され、改革者が靈俗兩面の自由の爲に蹶起するや、加特力君主は緇流と連り猛火と利刃とを以て教界問罪の威力を助けき。於是乎一ネーデルランドに於てすらチャーレス第五世の臣民迫害の手に墮れし者實に十有五萬。是グロチウスの明言する所、鬪争の渦中に居りて温和を失はず印刷の術起りて誤傳少き世、其時に生れ其國に在りて才學兼秀のグロチウスの記せる所なり。果して是信す可しとせば、一代の中一州の地に刑死せし抗抵派の數は、三世紀の久じきに亘り羅馬帝國の博きに起りし原始的殉教者の數より遙に多しと爲さざる可からず。然れども事實の眞否は直に事理を左右せんか。或はグロチウスにして改革黨の功蹟を舖張せりと爲さば、予輩は更に疑ふ可く不完全なる上世の記録を疑はざるを得ず、況やコンスタンチン皇帝の保護の下に在りて敗亡せる帝の仇敵尊まれざる前世の君主が基督教徒に加へし迫害を記録する特權を手にせし宮廷の一卑涉熱情の說法者の所傳に於てをや。

コンスタンチノブルの建置、

第三章 コンスタンチンの政治組織、

軍政、宮廷、財政、

第一節 コンスタンチノブルの建置

コンスタンチン皇帝の偉大に抗せし最後の敵手、その捷利を飾りし最後の捕囚は不幸なるリキニウスなりき。捷主は泰平昌盛の一代に羅馬帝國の繼承を自家に收め、新國都新政策新宗教を遺し、その革新は歴世の繼紹遵奉する所と爲れり。大コンスタンチンと諸子との世には重要事簇出踵起して、史家にして單に歲月の次序によりて繋る局面を細心に分離するに非ざれば殆んど史實の多數と變化とに壓倒されんとす。史家は帝國の傾衰に急ぐ戰役革命を叙する前、須く先力と根柢とを帝國に與へし政治的制度を説かざる可からず。史家は古人に知られざりし政治的事實と宗教的

新都建設の計畫

事實とを區別せざる可からず。基督教の捷利と内鬪とは教訓の爲にも侮蔑の爲にも豊富にして明快なる資料を供す可し。

リキニウス失敗の後その對手は(三二四年)將來東方の名都としてコンスタンチンの帝國と宗教との後に遺る可き運命を有せる新都の建置を企てたり。始チオクレチアン帝が帝國の舊都を去りし旨意は、自尊か政策かは措くも、四十年來列帝の踐踏によりて重きを加へ、不知不識の間に羅馬は嘗て之を尊崇せし隸屬の諸王國と同列に落ち、諸皇帝の國は悉く附近に生れ亞細亞の政廳軍陣に人と爲り不列顛軍より紫袍を受けし武人的君主によりて冷視する。伊太利人は自己の救主と認めしコンスタンチンより時羅馬議院及府民に下すとの勅旨を得しも、この新君主を親しくその都中に迎ふることは殆んど無かりき。帝の年尚壯なるや和戰各様の緊要事の爲に、或は徐々たる威儀を具へて、或は敏活なる勤勉を以て、大版圖の邊陲に來往し、常に内外の對敵と角逐するに忙殺されしが、昌運既に中して年齒また傾くや、帝位の鞏固と威嚴とを併せ保たんとために更に永久の居地を定め

位ウビザンチウムの地

んを思ふ。乃、強兵を以て禿納タナイス河間の狄族を控御し、明目を以て屈辱的和平に平ならざる波斯王の行動を監視せん爲に形勝の地を歐亞交會の地方に求む。嚮にチオクレチアン帝がニコメチアに駐紮せしも亦此見地に出でしも、帝の紀念は今の基督教會の擁護主には厭ふ可きにぞ、コンスタンチンは寧ろ別に新都を奠めて、永く己の名を後昆に垂れんと思はざるに非ず。そのリキニウスと戰へる間、將軍として政治家としてビザンチウムの天險の難攻不落にして而も天下通商の要衝たるを視得たり。

蓋し帝より前古の良史の一、その地の形勝を説きて微弱なる希臘の一殖民の之に據りて能く海上權を占め昌榮なる獨立共和府の名譽を博せしをいひき。

今堂々たるコンスタンチノブルの雄名を負へる地域に就きてビザンチウムを觀察せんか、都城の外形は不等邊三角形をなす。その東面亞細亞を指してトラキアのボスフォルスの海波寄せ返すは三角形の鈍角に當り、北面

ボリビウスなり。海伯の子と稱せられし航海者ビザスが此地に一市を創めしは紀元前六五六年なり。その民はアルゴス、メガラより來る。稱してビサンチウムといふ。のち之を併與せしはスバルタの將パウサニアスなり。

には港灣深く入り南面はプロボンチス、即、マルモラ海に臨む。三角形の底邊は西に面して歐羅巴大陸の突端に接攘す。而もその海陸の形勝を明にせんには尙仔細の説明を要す。

黒海の水地中海に向ひて滔々として流通する曲折せる海峡は、上世の傳説にも史上の事實にも著名なるボスフォルスの名を帯ぶ。兩岸の斷崖高く林樹暗き裡に散在せる幾多の祠堂は、アルゴノ艦隊の遠征以來黒海の波濤の難を凌ぎし希臘航海者の不熟練と畏怖と熱誠とを證す。怪鳥の爲に惱まされしファイネウスの宮、ケスツスの戦にレダの子を委せしアミクスの林地は、永く海峡の兩岸に遺蹟を留めたり。峡水の盡頭にキアネ岩ありて、詩人の言に據れば、昔は水面に浮びて黒海の口を扼し神の世人をしてその秘密を知らざらしめしといふ。この岩礁よりビザン

コンスタ
ンチノブル
とボス
フォルス

チウムの海港に至る水道は長さ約十六哩幅約一哩半。歐亞兩岸とも右に名なるセラピスとジビトル、ユリスの神祠の地に新城を築きしが希臘諸帝の築きしが舊城は兩岸最、蹙まりて相距る僅に五百歩の地點に在り。これら諸城はコンスタンチノブル包圍の後直にムハメッド二世によりて修築されしが土耳古の捷主は恐らく此地が己に先つこと二千年前にダリウス大王が船橋を架して兩大陸を連結せし故地とは知らざりけむ。舊城を距る少許にクリソポリスの小市邑、即、スクタリありて、コンスタンチノブルの亞細亞方面の郊外と目さる。ボスフォルス峡はビザンチウム、カルケドンの間に始めて開けてプロボンチス海と爲る。兩城市の後者は前者よりも數年前に希臘人の建置せし所にて、建置者の短見なる、對岸遙に之に優る形勝あるを知らずして徒に嘲笑を買へり。

帝都の海

コンスタンチノブルの海港はボスフォルスの入江として夙に金角灣の名あり。その形鹿角、犀牛角に比す可し。金の一語を加へしは諸方の船舶この安全の港灣に風浪を避け得るに因る。二小流を合せるリクス河は清

第一節 コンスタンチノブルの建置

水を絶へずこの灣中に流注して水底を清め、淡水を慕ふ魚類の寄州となる。この海邊潮の干満少くして港内は短艇の助を假らずして物貨を直に埠頭に揚卸し得。大船の舳を海面に艦を直に街屋に接し得る所も亦尠からず。リクス河口より港灣の口に至る長は七哩餘。港口の幅約五百碼にして鐵鎖を引きて敵の水師を防ぐに足る。

プロボス

ボスフォルス峽よりヘルスポンド峽に至るまで歐亞兩岸互に退きてマルモラ海を擁す。古の所謂プロボスチス是なり。兩峽口の距離約一百二十哩。その中流を西に航する者は一日の中にトラキア、ピチニアの高原を望む可く、不斷の白雪を戴くオリムプスの山嶺を見る。チオクレチアの帝都たりしニコメチアの灣を左にして發し、キジクス、プロコンネソスの小嶼を過ぐればガリポリに投錨す可く、亞細亞歐羅巴を隔つる水勢は再通りて狭門を爲す。

ヘルレス

最精細にヘルレスポンド峽を測定せし地理家はその迂回せる長を約六十哩幅を約三哩と爲せども、セスツス、アビドス兩市間なる古土耳其古城の

北方に至りて水最盛まる。かの古レアンデルが情婦の爲に波濤を凌ぎ渡りしは此處にして、双岸相距る五百歩。レアンデルがエヌス女神の女へロを慕ひて毎夜此峽水を遊ぎ渡りて之に通ひしに、一夜溺れて水中に死すとの譚あり。

ホーマー、オルフェウス等が屢廣きヘルスポンドの稱を與へしは相應せずとせんか。旅人殊に詩人にして狭水の迂曲に従ひて舟を縦ち兩岸の風光に應接しては不知不識海の觀念を忘却して唯林樹鳥影の間を流下してエーゲ海、即、多島海に注ぐ一大急流の感ありしならむ。イダ山下の高處なる古のトロイはヘルスポンドの峽口を俯瞰し、名を不朽に傳へしシモアス、スカマンダーの小流より殆んど水の縁を絶たる。當時希臘軍の陣地はシゲア、レチア兩岬の間なる十二哩の沿海に在りて、側面はアガメノンの旗下に戦ふ驍將勇士によりて防がれ、シゲア岬はアキレスのミルミドンの常勝軍に、レチア岬は不撓のアジャクスに占めらる。アジャクスの墮るるや、そのジブ、ヘクトル神の怒に抗して海軍を防ぎし地に墓冢を作り、後にレチウムの

市人は神の名譽を以て之を祀れり。コンスタンチンは、ビザンチウムを相し得ざりし前に、羅馬人がその傳奇的起原を托せるこの著名の地に帝國の中心を置かんとしき。古トロイの下、レチア岬、アジャクスの冢に至る平野は帝が始新都の地域として撰擇せる所なりき。その計畫は直に止みしも、未成の殘壘遺塔なほヘレスポンド峽を過ぐる者の眼裏に入る。

吾曹は今やコンスタンチノブルの形勝をいふの資格あり。その地は實に天の大帝國の中都たらしむる所たり。北緯四十一度に位し七丘に據れる都城は歐亞兩岸を劃し、氣候温健に、土地肥沃に、港灣安全に、大陸に接壤せる地幅廣からずして防備に利あり。ボスファルス、ヘレスポンドの海峡は、コンスタンチノブルの兩關門たり。その水道を扼し得ば敵の水師を拒む可く我に商船を致す可し。東方諸州の鎮壓も亦若干かコンスタンチンの意圖に存せしにて、前代に地中海の中央に進入して武を用ひし黒海の狄族は之より間もなく海寇の業を抛ちこの超え難き關門の突破に失望せり。假令兩海峡を鎖すも、沿海の産はなほ能く都中民衆の必需を充たし奢侈を滿

コンスタンチノブルの形勝

たすに足る。後に土耳其の稅政に苦しみてもトラキア、ピチニアの沿海は尙葡萄苑、菜圃、穀野多く、プロボンチスは季に應じて容易に漁獲し得る鮮魚の無盡藏たり。若し一び兩關門を開かんか、北は黒海南は地中海の天然人工の富貨至らざる無く、日耳曼、スキシアの深林中、タナイス、ボリステネスの河源に收集し得る原料、歐羅巴、細亞の技巧に成る製品、埃及の穀、遠き印度の寶玉、香料は風に乘じて集まり、コンスタンチノブルは久しく上世世界の商阜たりき。

帝都の建置

風光の美、形勝の固、通商の利、一地點に兼備すとせば、コンスタンチンの此地を相せしは自然なり。但大都の草創に昌榮を期するには、古今若干の異事、奇聞に假托すれば、帝も亦人間政策の不安固なる意見によりは、寧ろ永劫不變の神意に建都の決定を期せんと欲せり。帝の勅旨の一に子孫に訓へて、コンスタンチノブルの永代の建都は神命によれりといへり。その如何に神意天命を得しやは、帝の謙讓の默徳に葬られしも、後世の記者、縦に之を補説して、以爲く、帝ビザンチウムの城中に眠りし一夜、墮城産土の女神年

第一節 コンスタンチノブルの建置

處久しく老殘せる媪となりて夢に入りしに、帝手から凡百盛装を加へしため、忽妙齡の佳人に變ぜるを見驚き醒めて夢を釋き、乃直に天意に應ぜりと。新城市を建て新殖民を設くるや、迷信的盛儀を具へて祝福するは羅馬人の常なり。流石に帝は甚しく異教に來由せる儀禮は略せしも、なほ觀衆の心裡に希望と尊崇の深き印象とを遺すを忘れざりき。帝は徒歩槍を執りて嚴肅なる一行に先登して豫定の都城の境線を巡行指示し、從ふ者その行きく／＼て尙已まず、既に一大城市の域に超ゆるに驚き問ふや、帝は朕が前に進む眼に見へざる嚮導彼の止まるまで進まざるを得ず」と答へき。吾曹は敢てこの異常の嚮導の何たるを論ぜじ、唯茲にコンスタンチノブルの境界廣表を説くに止めむ。

都城の地

現状にては土耳其宮殿は七丘の第一たる東岬に據りて、わが測地量にて約百五十エカーを占む。土耳其專制娼妓の宮府は直に希臘共和國の遺基に據りしも、ビザチウムにては港灣の利便の爲に此方面の居住地は今之王宮の界限以上に擴大されたりしが如し。コンスタンチン帝の新城壁は舊

壁を距る十五スタチア、三角形の擴大せる一面を横ぎりて港灣よりプロポントスに達し、都城に近づく者の層々相倚るの美を見る七丘の中五丘を城中に收む、帝の歿後約一世紀、新建築は一方港灣に、他方プロポントスの沿岸に延び、既に第六丘の狹梁を掩ひて第七丘の廣頂に及べり。狄蠻の間斷なき攻略よりこの郊外を保護するため充分なる恆久的城壁を造りて都城を圍繞せしはテオドシウス少帝なり。東岸より金門に至る都城の全長は約三羅馬哩、周匝は十乃至十一羅馬哩、面積は約二千英エーカー。近世の旅行家が時に或は都城の境線を歐羅巴方面の接近町村に、甚しきは水を隔てし亞細亞沿岸の地にまで及ぼし説く、鋪張廣大の言は從ひ難きも、ペラガラタの郊外市は港外に在るも尙都城の一部と爲す可く、之を通算すれば、全部の周匝を十六希臘哩(約十四羅馬哩)と爲せる一ビザチウム史家の測定は恐らく首肯し得む。コンスタンチノブルのこの廣表は洵に帝都たるに恥ぢざらむも、なほバビロン、テーベのそれに及ばず、古羅馬にも、倫敦にも、而し巴里にだも若かさるなり。

治世の光榮を永久に遺さんと企畫せる羅馬世界の君主はこの大土木に富資勞役及なほ遺存せる民衆の天才を傾注せり。或は帝都建設の資費を推算して、城壁、殿宮、水道の工費約二百五十萬磅と爲す。黒海沿岸の綠林プロコe、黄金六百センチナリ、即、六萬磅の重量といふ。固より正確精細の算數にはあらず。ンネソス島嶼の白大理石は建築の無盡蔵にして、水路近くして便に、ビザンチウム港中に輸致さる。多數の勞工技匠精勵役に服するものから、帝は當代技術の傾衰の爲に、技匠の技と數とはその企畫の偉大に伴はざるを慨し、諸州の守吏は命を奉じて學堂を開き講師を聘し、報賞特權を與へて教育ある優良の子弟を募り、之に建築學とその實用とを學習せしむ。かくして成りし新都の建築はコンスタンチン時代の妙工名匠の手腕を借らざるを得ざりき。フィヂアス、リッブスの天才を復活せんは羅馬皇帝の力にも及ばずと雖も、その徒が後昆に遺せし不朽の名作は一暴主の貪婪なる虚榮を防ぎ得ざりき。聖旨によりて希臘亞細亞の諸市府はその最價值ある粧飾を強

奪されき。著名なる戰役の紀念物宗教的崇拜物、上世の神祇英雄聖徒人の傑れたる像は悉くコンスタンチノブルの莊麗なる捷利を飾れり。斯る歎美す可き名作が表顯せんとせし名家の精神を除きては何者も欠くる所なしと史家ケドレヌスの説きしはこれが爲なり。然れども帝國衰へて人心政教の奴となりては、ホーマー、デモスゼネスの精神はまたコンスタンチノブル都中に求め得べくもあらず。

ビザンチウム攻圍の日捷主は帳營を第二丘の頂嶺に張りしかば、その成功を記念せんため、その陣地を以て大公場を爲す。場は圓形否寧ろ橢圓形にして、相對せる兩口に凱旋門あり、その尤も右に肖像多き廊前あり。今燒柱と稱せらるゝは場の中央に立ちし高き圓柱の斷片なり。柱は高二十呎の白大理石の臺上に立ちて、各高十呎、周三十三呎の雲斑石十箇を重ねたれば、頂點は地を距ること一百二十呎、上にアポロの巨像ありき。像は或は雅典より、或はフリギアの一城市より搬來せしといふ黄銅像にて、フィヂアスの作なりとぞ。右手に笏を持ち、左手に地球を持ち、頭に光冠を戴ける此像

は作者もと太陽神を表徴せしが、今やコンスタンチン帝を表せり。圓戲場即馬戲場は長四百歩幅百歩の堂々たる建築にして、兩標木の間には肖像方尖塔多く、今もなほ三蛇相繞へる黃銅の一柱にその遺影を認め得可し。嘗て三蛇の頭を脚としてその上に支へし黃金鼎はサーキゼスの敗後に戦捷ちし希臘人がデルフィ神廟に寄進せる所なりき。馬戲場の盛観は既に久しく土耳其人の手に荒廢せしも、アトメイデンの名稱はなほ調馬場たるを示す。皇帝が演戲を樹せし玉座よりは宮殿に下る曲階ありて、殿宇の美は羅馬のそれにも劣らず、附屬の廳堂、園、曲廊とともに、圓戲場と聖ソフィア寺の間なるプロボンチスの海に臨む若干の地域とを占む。コンスタンチンが高き圓柱各色の大理石六十以上の銅像を施與して粉飾し、現時なほゼウタシッポスの名ある混堂も亦記すに足る。然れども都城の建築名勝を詳述せんは本史の面目にあらず。唯その帝城の尊嚴を示し、都民の利便樂を供するもの一として具はらざる無きをいはば足れり。建置の後約百年に記せるところに據れば、都中には一學府、一圓戲場、二劇場、八公混堂、百五十

都民

三の私浴場、五十二の前廊、五府庫、八水道、四議院若しくは法廷、十四寺院、十四宮殿、各種各様の庶民の住戸ならぬ四千三百八十八邸ありきとぞいふ。都民の充實はその建置者の第二の重要な問題なりき。帝國の板蕩後の暗黒時代に、この記憶す可き事實の古きも直接なる結果は希臘族の虚聞と羅甸族の輕信との爲に混迷に陥れり。羅馬の貴族議院騎衆は悉くその無數の僕隸を率ゐて皇帝に従ひてプロボンチスの海岸に移り、外人と庶民とのみは舊都に残留し、田園と化せし伊太利の地は爲に忽耕耘の荒廢民口の凋落を見たりとは、一般に確定され信受さるゝ所なり。その舖張誇大に失することは本史の進むに従ひて自明にす可きも、コンスタンチノブルの發達は、人口と工業との一般的増進に出でずとすれば、斯る人為的殖民は帝國の諸舊都より寄與する所たらざるを得ず。羅馬及東方諸州の富有なる議官は帝の召に應じて新都に遷住せしならむ。帝王の招呼は殆んど法令と擇ばざるに、その寛大なる待遇は衆富豪の歡び應ずる所となれり。帝は都中の諸處に建營せる邸宅館第を之に給し、その地位に應ずる采地給



東部のコンスタンチノブルの建置

都民の特権

資を與へ、ボツス、亞細亞の地を擧げてその世襲領に頒てり。然れども此種の獎勵は忽に充實され、漸くに廢停さる。政府の地定まれば、公收入の若干は君主により、宰臣により、吏僚により、宮人によりて用ひらる。たゞ地方の富者は利害義務のため、娛樂好奇の爲に自中央に集まる。而して多數の第三級は勞働に衣食し、上流の必需奢侈に生活する、奴僕、工匠、商賈より成るは言を須ひず。斯くて未だ一世紀ならざるに、コンスタンチノブルは富と數とに於て羅馬と匹敵せり。殆んど健康利便に介意せぬまでに、櫛鱗次せる新家は僅に狹街を残して、行人車馬の熱鬧を加へ、豫定の地は既に増加する、民人を容るゝに足らず、兩面海に面せる所に、新郊外を作りて遂に一大都市を爲すに至れり。

酒油、穀食、金糧を屢々一般に頒布せし制は、嘗て羅馬の貧民をして殆んど勞役の必要を免れしめき。斯る初世の皇帝の寛大は、或部分までコンスタンチノブルの建置者の學ぶ所にして、爲に民衆の賞賛を博せしも、亦後代の批難を免れず。立法者、征服者の國民はその流血を以て購ひ得し、亞非利加

第一節 コンスタンチノブルの建置

の收獲を要求するの權あり得可く、潤澤の爲に羅馬人は自由の記憶を遺失す可しとはオーガスタスの人爲的に案出せることなりき。然れどもコンスタンチンの浪費は公私の利害孰れよりするも寛容さる可くもなし。新城の利益の爲に埃及に年額の穀を徴するは、勤勉なる一州農民の労働を以て懶惰なる都民を養ふを以てなり。この帝の他の制法の批難す可き之に類するものもあるも、その特記す可き此の如きは無し。帝は都中を十四區に別ち、公會に議院の稱を與へ、都民に伊太利人の特權を授け、都城に古羅馬の最初最愛の令姐たるコロニーの名を命ぜり。その尊敬す可き母はその年地位舊時の偉大の記憶に相應する法定認知の優秀の地位を保てり。

コンスタンチンの新都造營を督する宛然情郎の如くなれば、城壁前廊、主要なる殿宇は數年にして完成せり否、或は數月にして成れりともいふ。(三)

奠都式

三〇年、或は三三四年。而も異常なる精勵は毫も推賞に値せず。建築の速成にして不完全なる、次帝の世には既に傾倒破損を來せるを以てなり。然るに帝はその新造に乗じて奠都式を擧げたり。

h、コヂヌスはコンスタンチノブルの建置は開闢紀元五八三七年(基督紀元三二九年)九月二十六日に始まり、五八三八年(三三〇年)五月十一日に成ると爲すも、その說中疑ふ可き點多し。ジュリアンは十年を要せしといひ、スパンハイムは之を三二四乃至三三四年と爲す。

にして永久なる一事の看過し難きあり。建置記念日毎に帝命によりて作られし右手に隍城神の小像を捧げしコンスタンチンの木像鍍金の肖像を三角車に載せ、盛装せる衛士之を守衛し、嚴肅なる行列と共に馬戲場裏を巡行し玉座の前に至るや、當代の皇帝は座を起ちて之に禮拜崇敬を表し、寄與の祭日には大理石柱に第二羅馬新羅馬またはコンスタンチン城の名を彫りて之を授く。然れどもコンスタンチノブルの名は此光榮ある名よりも行はれ、革運十四世紀の後、今に至りて尙長く建置者の名譽を傳へたり。

第二節 政治組織と文官

羅馬帝國の政治組織

新都の建設は自民政軍政の新制度と伴ふ。チオクレチアン帝が創めし複雑なる政治組織はコンスタンチンの改善、その直後の繼嗣者の完成を経しが、仔細に之を検案すれば、實に大帝國の奇異なる活畫を想見し得る而已ならず、實に帝國の急激なる傾頽の秘因を説明するを得。何等かの顯著なる制度の推究には、屢々羅馬史の古今に溯及せざるを得ざるも、此研究の本來の時期はコンスタンチンの即位よりテオドシウス法の發布に至る約一百三十年に在り。テオドシウス法並に東西のノチチアより吾曹は帝國情勢の最正確なる報告を得可し。斯る題目の變化は暫く史譚の進行を中斷す、然れども斯る中斷を罪する讀者は宮廷裡の一時的隱謀戰役中の偶發的事項にのみ熱心なる好奇心を有して法律習俗の必要を等閑視する輩のみ。

神教帝國

物質力に満足せる羅馬人の雄々しき誇負は鋪張虛大の形式儀禮を東方

の虚榮に委したり。而もその古代の自由より發せし此等の徳の形影をだも失ふに及びては、羅馬習俗の簡朴は亞細亞宮廷の風化を蒙れり。共和時代には喧傳著聞し帝國時代には沈淪聞へざる個人の動靜聲望の宣揚は皇帝專制の下に廢れ、皇帝は玉座階下の稱號を帯べる奴隸より位階官職の制を人為的權力の最卑しむ可き機關と爲し、下賤の臣僚は革命によりて希望と奉仕の報賞との忽滅却せんを恐れて政府の維持に努力す。この神政帝國(斯の如きは屢川ゐらるゝ語なり)に於ては、あらゆる位階は最細密なる正確を以て記され、その威嚴は各種の織細にして嚴肅なる儀禮を以て表せらる、之を知るは一科の學を蔑にするは一種の冒瀆なり。誇負と諛諛との爲にツリーの殆んど解し得ず、オーガスタスの輕侮排斥す可き言辭を濫用して羅句語の純正を汚がし、皇帝親すら尙且卿の忠誠卿の嚴肅卿の卓越下卿の名聲卿の嵩高異數の宏大卿の著聞せる宏大なる高位下等の尊稱を用

i、此等はみな殿下、閣下、高台、貴台、或は大人、老爺、先生等の類の尊稱なるも、各何等の辭を當て、可なるやを知らず、英語を解する讀者は振假名によりて讀まれたし。

第二節 政治組織と文官